

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第428集

かい ふち いち  
**貝の淵Ⅰ 遺跡発掘調査報告書**

一般国道456号地域活性化支援道路整備事業埋蔵文化財発掘調査

岩手県花巻地方振興局土木部

(財) 岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

かい ふち いち

# 貝の淵Ⅰ遺跡発掘調査報告書

一般国道456号地域活性化支援道路整備事業埋蔵文化財発掘調査

# 序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されております。これら多くの先人達の創造してきた文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。発掘調査により遺跡が消滅することは、まさに惜しいことありますが、その反面それまで間に包まれていた先人達の営みに光明があたるのも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的な課題であり、財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一般国道456号地域活性化支援道路整備事業に関連して、平成14年度に発掘調査を行った石鳥谷町貝の淵I遺跡の発掘調査をまとめたものであります。貝の淵I遺跡は、石鳥谷町の東部を流れる北上川左岸の河岸段丘上に立地しており、調査の結果、平安時代前半の竪穴住居跡が検出され、当時の集落跡であることが分かりました。また、墨書き土器や刻書き土器、それに当時の一般庶民は持ち得なかった灰釉陶器が出土するなど、貴重な資料を提供することができました。この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご指導・ご協力を賜りました岩手県花巻地方振興局土木部、石鳥谷町教育委員会をはじめとする関係者各位に衷心より謝意を表します。

平成15年10月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 合 田 武

## 例　　言

1. 本報告書は、岩手県種賀郡石巻谷町閑115地割31-2ほかに所在する貝の淵I遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2. 本遺跡の調査は、一般国道456号地域活性化支援道路整備事業に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は、岩手県花巻地方振興局土木部と岩手県教育委員会生涯学習文化課との協議を経て、岩手県花巻地方振興局土木部の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号及び遺跡調査略号は次のとおりである。

遺跡番号 ME07-0167 遺跡調査略号 K F I -02

4. 野外調査の調査期間・調査面積・調査担当者は次のとおりである。

調査期間 平成14年4月8日～6月18日

調査面積 3.020m<sup>2</sup>

調査担当者 佐々木信一、野中真盛

5. 室内整理の期間と担当者は次のとおりである。

整理期間 平成14年11月1日～平成15年3月31日

整理担当者 佐々木信一

6. 各種鑑定にあたっては、次の方々に依頼した。

石質鑑定 花崗岩研究会

炭化材樹種同定 早坂松次郎（岩手県木炭協会）

鉄製品の保存処理 岩手県立博物館

7. 基準点測量及び空中写真撮影は、次の機関に委託した。

基準点測量 慶長測量設計株式会社

空中写真撮影 東邦航空株式会社

8. 野外調査及び本報告書の作成にあたっては、次の方々にご協力・ご指導をいただいた（順不同・敬称略）。

菊池邦雄（岩手県文化財保護指導員）、藤澤良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）

9. 本遺跡から出土した遺物及び調査資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

10. 本遺跡の調査成果は、先に「現地公開資料」（平成14年6月8日）、「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成14年度分）」に発表しているが、本書の内容が優先するものである。

# 目 次

序

例言

## 本 文

I 調査に至る経過 .....	1
II 遺跡の立地と環境 .....	1
1. 遺跡の位置 .....	1
2. 遺跡の立地と周辺の地形 .....	1
3. 基本層序 .....	4
4. 周辺の遺跡 .....	5
III 野外調査と室内整理の方法 .....	9
1. 野外調査 .....	9
2. 室内整理 .....	10
IV 検出された遺構と出土遺物 .....	15
1. 縄文時代の遺構 .....	15
陥し穴状遺構 .....	15
2. 古代以降の遺構と出土遺物 .....	17
(1) 竪穴住居跡 .....	17
(2) 住居状遺構 .....	45
(3) 燃土遺構 .....	46
(4) 溝跡 .....	47
3. 遺構外の出土遺物 .....	53
V まとめ .....	80
1. 遺構 .....	80
2. 遺物 .....	82

## 表

第1表 周辺の遺跡一覧表 .....	6	第7表 鉄製品観察表 .....	79
第2表 縄文土器観察表 .....	74	第8表 石器観察表 .....	79
第3表 弥生土器観察表 .....	74	第9表 陥し穴状遺構一覧表 .....	80
第4表 土師器・須恵器観察表 .....	74	第10表 平安時代の住居跡一覧表 .....	81
第5表 土製品観察表 .....	79	第11表 墓古土器一覧表 .....	83
第6表 陶器観察表 .....	79		

## 図 版

第1図 岩手県における遺跡位置図	2
第2図 遺跡周辺の地形図	3
第3図 基本土層図	4
第4図 周辺の遺跡位置図	8
第5図 スクリントーン・土器実測図凡例	11
第6図 貝の淵I遺跡遺構配置図	13・14
第7図 1号・2号・3号陥し穴状遺構	16
第8図 1号住居跡	18
第9図 2号住居跡	20
第10図 3号住居跡	22
第11図 4号住居跡(1)	24
第12図 4号住居跡(2)	25
第13図 5号住居跡	27
第14図 6号住居跡	29
第15図 7号住居跡	31
第16図 8号住居跡	33
第17図 9号住居跡	35
第18図 10号住居跡(1)	37
第19図 10号住居跡(2)	38
第20図 10号住居跡(3)	39
第21図 11号住居跡	42
第22図 12号住居跡	43
第23図 13号住居跡	44
第24図 住居状遺構	45
第25図 1号・2号焼土遺構	46
第26図 1号溝跡	48
第27図 2号溝跡	49
第28図 3号溝跡	51・52
第29図 遺構内出土遺物(1)	55
第30図 遺構内出土遺物(2)	56
第31図 遺構内出土遺物(3)	57
第32図 遺構内出土遺物(4)	58
第33図 遺構内出土遺物(5)	59
第34図 遺構内出土遺物(6)	60
第35図 遺構内出土遺物(7)	61
第36図 遺構内出土遺物(8)	62

第37図	遺構内出土遺物(9) .....	63
第38図	遺構内出土遺物(10) .....	64
第39図	遺構内出土遺物(11) .....	65
第40図	遺構内出土遺物(12) .....	66
第41図	遺構内出土遺物(13) .....	67
第42図	遺構内出土遺物(14) .....	68
第43図	遺構内出土遺物(15) .....	69
第44図	遺構内出土遺物(16)・遺構外出土遺物(1) .....	70
第45図	遺構外出土遺物(2) .....	71
第46図	遺構外出土遺物(3) .....	72
第47図	遺構外出土遺物(4) .....	73
第48図	住居跡、住居状遺構 .....	81
第49図	貝の淵I 遺跡出土焼青土器 .....	84

## 写真図版

写真図版 1	遺跡遠景 .....	89
写真図版 2	遺跡近景 .....	90
写真図版 3	遺跡全景、土層断面 .....	91
写真図版 4	1号・2号・3号陥し穴状遺構 .....	92
写真図版 5	1号住居跡 .....	93
写真図版 6	2号住居跡 .....	94
写真図版 7	3号住居跡 .....	95
写真図版 8	4号住居跡 .....	96
写真図版 9	5号住居跡 .....	97
写真図版10	6号住居跡 .....	98
写真図版11	7号住居跡 .....	99
写真図版12	8号住居跡 .....	100
写真図版13	9号住居跡 .....	101
写真図版14	10号住居跡(1) .....	102
写真図版15	10号住居跡(2)、11号住居跡(1) .....	103
写真図版16	11号住居跡(2)、12号住居跡 .....	104
写真図版17	13号住居跡 .....	105
写真図版18	住居状遺構、1号・2号焼土遺構 .....	106
写真図版19	1号溝跡、2号溝跡(1) .....	107
写真図版20	2号溝跡(2)、3号溝跡(1) .....	108
写真図版21	3号溝跡(2)、遺跡近景、作業の様子、小学生の遺跡見学 .....	109

写真図版22	遺構内出土遺物(1)	110
写真図版23	遺構内出土遺物(2)	111
写真図版24	遺構内出土遺物(3)	112
写真図版25	遺構内出土遺物(4)	113
写真図版26	遺構内出土遺物(5)	114
写真図版27	遺構内出土遺物(6)	115
写真図版28	遺構内出土遺物(7)	116
写真図版29	遺構内出土遺物(8)	117
写真図版30	遺構内出土遺物(9)	118
写真図版31	遺構内出土遺物(10)	119
写真図版32	遺構内出土遺物(11)	120
写真図版33	遺構内出土遺物(12)	121
写真図版34	遺構内出土遺物(13)	122
写真図版35	遺構内出土遺物(14)	123
写真図版36	遺構内出土遺物(15)	124
写真図版37	遺構内出土遺物(16)	125
写真図版38	遺構内出土遺物(17)	126
写真図版39	遺構内出土遺物(18)	127
写真図版40	遺構内出土遺物(19)、遺構外出土遺物(1)	128
写真図版41	遺構外出土遺物(2)	129
写真図版42	遺構外出土遺物(3)	130

## I 調査に至る経過

貝の淵 I 遺跡は、「一般国道456号地域活性化支援道路整備事業」の施行に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道456号は県都盛岡市を起点とし、北上川東側地域を南北に縦断して県南部を結び、一般国道4号を補完する幹線道路として重要な役割を果たしてきた。しかし、当地区は線形が不良で幅員が狭小なことに加え、交通量が大幅に増加していることから、円滑な走行の実現、歩行者等の安全確保、生活環境の改善が急務となった。また、稗貫川橋が老朽化したことから抜本的な対策を講ずることとし、平成12年度全体事業延長L = 2,680mの一般国道456号関口地区地域活性化支援道路整備事業として整備に着手した。

(岩手県花巻地方振興局土木部)

## II 遺跡の立地と環境

### 1. 遺跡の位置

貝の淵 I 遺跡は岩手県稗貫郡石鳥谷町にあり、JR東北本線石鳥谷駅の南南西約4kmに位置し、北上川左岸の河岸段丘上に立地している。石鳥谷町は、盛岡市の南方約25km、岩手県のほぼ中央部にあり、東に稗貫郡大迫町、西に岩手郡零石町、南に花巻市・和賀郡東和町、北に紫波郡紫波町が隣接している。主要交通路は、JR東北新幹線及び東北本線、国道4号が南北に縦断している。

本遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「花巻」N J-54-13-16(盛岡16号)の図幅に含まれ、北緯39度27分20秒、東経141度10分29秒付近に位置する。

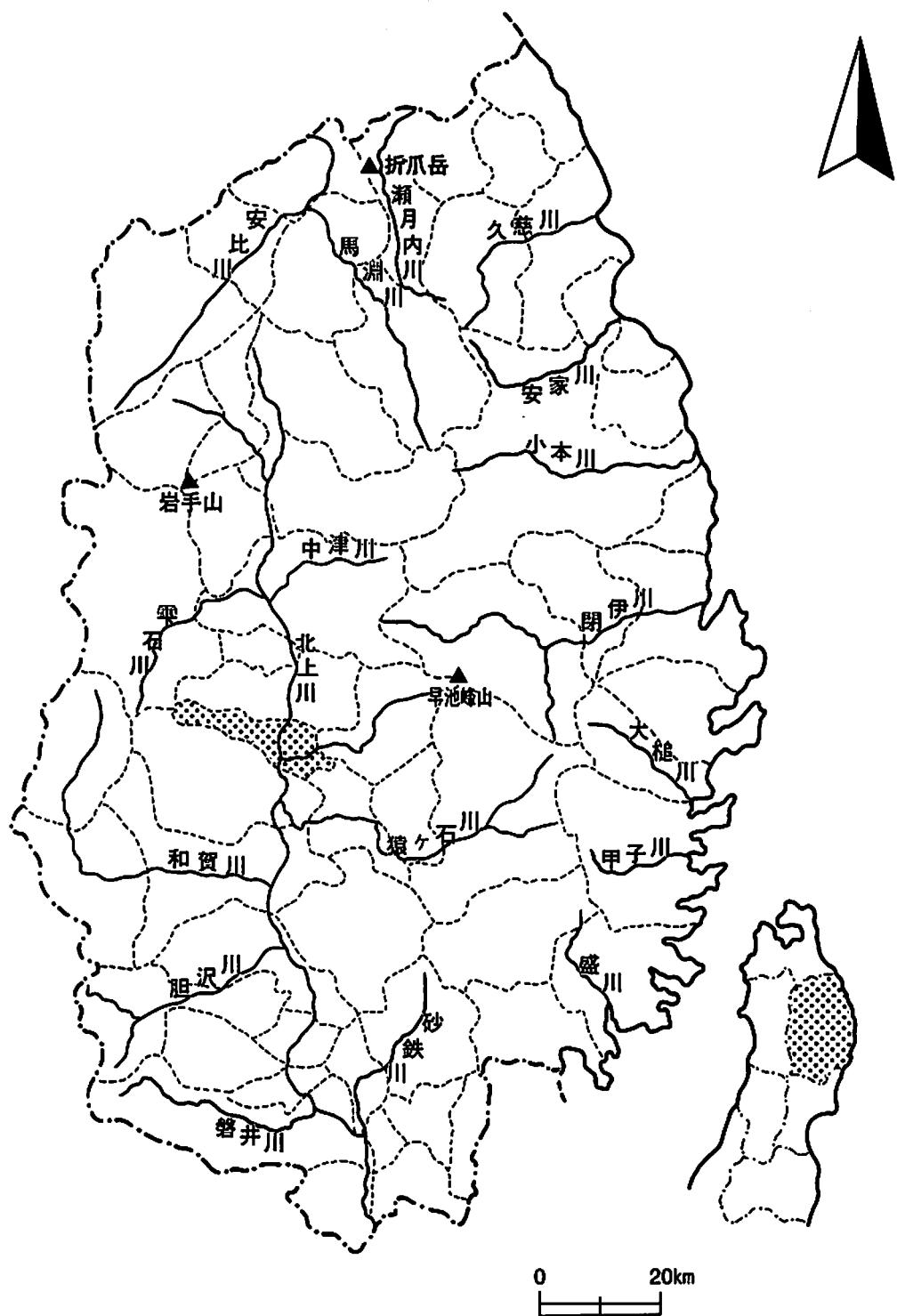
### 2. 遺跡の立地と周辺の地形

石鳥谷町は、奥羽山脈と北上山地に挟まれた北上盆地の中央部に位置する。町の北西側には岩手山(標高2,038m)、東側には北上山地最高峰の早池峰山(標高1,917m)が山稜を望ませている。

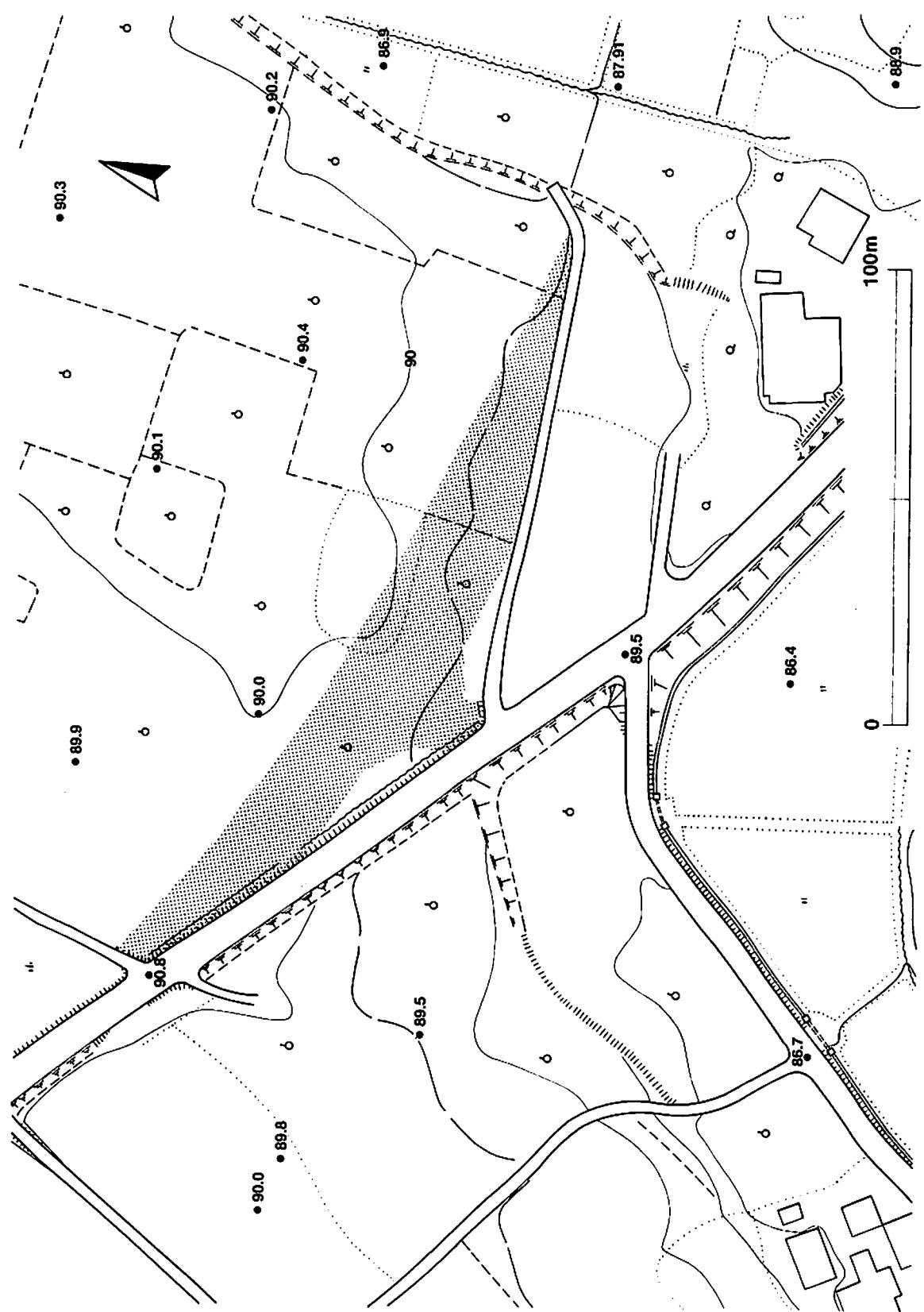
町の東部を蛇行しながら南流する北上川(全長249km)は、岩手郡岩手町を水源とし、花巻市・北上市・水沢市などを経て、宮城県石巻市で太平洋にそいでいる。石鳥谷町付近では、支流の稗貫川、添市川、葛丸川、耳取川、滝沢川と合流している。

北上盆地は、北上川を境として東側と西側とでは地形が大きく異なり対照的である。北上川の東側は北上山地の西縁丘陵地域にあたり、北上山地を水源とする比較的勾配の緩い河川により小規模な段丘と沖積地が比較的広範囲に見られる。これに対して、西側は急峻で起伏の大きな奥羽山脈が分布し、その東縁には奥羽山脈を水源とする勾配の急な河川により扇状地が発達している。

貝の淵 I 遺跡は、北上川東側の段丘上にあり、北上川の支流である稗貫川右岸に位置している。現況は畑である。



第1図 岩手県における遺跡位置図

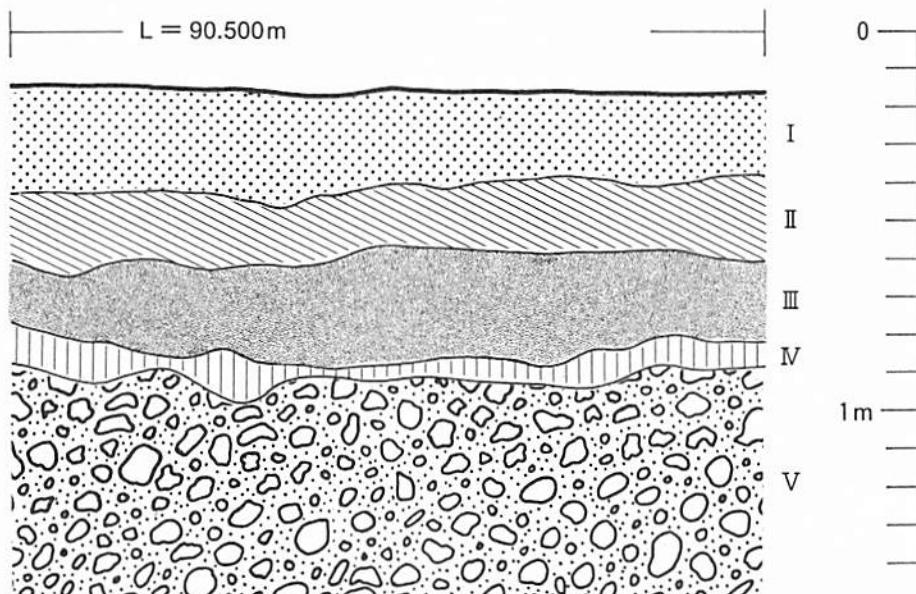


第2図 遺跡周辺の地形図

### 3. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。なお、土層断面図は、グリッドB II a 8で作成したものである。

- I層 10YR2/1 黒色 シルト 表土で遺跡全面を覆っている。よく締まり粘性がある。炭化物を少量含んでいる（1%）。層厚は22~30cmである。
- II層 10YR1.7/1 黒色 シルト よく締まり粘性がある。炭化物を少量含んでいる（1%未満）。層厚は16~22cmである。
- III層 10YR2/2 黒褐色 シルト よく締まり粘性がある。層厚は16~32cmである。調査区域東部には見られない。
- IV層 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト よく締まるが粘性はない。本層が遺構検出面であり、遺物はほとんどこの層からの出土である。層厚は2~13cmである。
- V層 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト かたく締まるが粘性はない。遺構は本層まで掘り込まれている。層厚は60cm以上である。



第3図 基本土層図

## 4. 周辺の遺跡

石鳥谷町には、現在187カ所の遺跡が確認されている。<sup>註1</sup>時代別では縄文時代の遺跡が最も多く、次いで古代、中世、近世、古墳、旧石器、弥生となっている。これらの遺跡は、北上川及びその支流の河川が形成した段丘や低地に多く分布している。

石鳥谷町では、昭和40年代半ばまで、五大堂長沢遺跡（縄文晩期）、大瀬川田屋遺跡（縄文中期）が発掘調査された程度で、発掘事例が少なかった。しかし、その後、東北新幹線建設や東北縦貫自動車道建設等に伴い多くの遺跡が発掘調査され、縄文時代から近世にかけての歴史が明らかになってきた。

主な遺跡を挙げると、高畠遺跡（縄文中期）、大明神遺跡（弥生・平安）、大曲遺跡（平安）、幅遺跡（縄文・平安）、大地渡遺跡（縄文中期・平安）、大瀬川A遺跡（縄文中期・平安）、大瀬川B遺跡（中世）、大瀬川C遺跡（中世城館）、野田遺跡、上台遺跡（平安）、五大堂安堵屋敷遺跡（縄文晩期）、白幡林遺跡（縄文・平安・近世）、小森林遺跡（縄文・平安・中世）などである。

貝の淵I遺跡は、北上川の支流である稗貫川流域に位置しており、同流域には貝の淵I遺跡の他に、上流から大川原館、曲谷地遺跡、端館、七ツ森古墳群、猪鼻遺跡、下館II遺跡などがある。

第1表は貝の淵I遺跡周辺の遺跡（石鳥谷町、花巻市）についてまとめたものである。なお、遺跡の位置については第4図に示してある。

註1 岩手県教育委員会生涯学習文化課の遺跡台帳による。

引用・参考文献

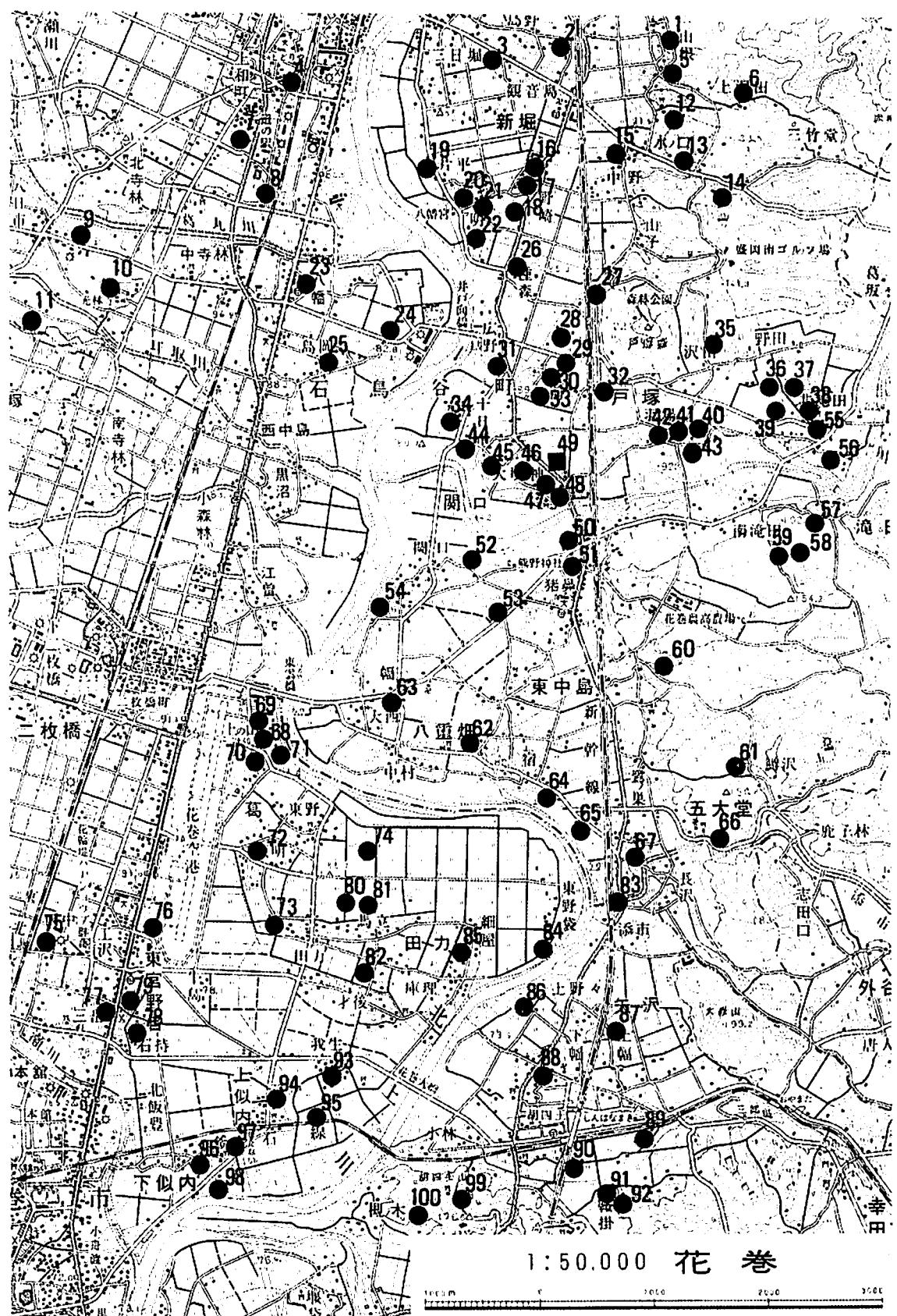
岩手県教育委員会（1982）：「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」岩手県文化財調査報告書34集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2002）：「稲荷遺跡発掘調査報告書」岩埋文第408集

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物等
1	長善寺II	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器
2	島	集落跡	平安	土師器、須恵器
3	沼の沢	散布地	平安	土師器、須恵器
4	上和町I	散布地	縄文・古代	縄文土器(後期)、土師器、須恵器
5	上沢田I	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
6	上沢田II	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
7	白幡林古墳	古墳	古墳	古墳
8	北向古墳群	古墳群	古墳	古墳
9	八日市	散布地	縄文・古代	縄文土器(後期)、土師器、須恵器
10	光林寺館	城館跡・散布地	縄文・古代	縄文土器(後期)、土師器、須恵器、堀
11	大興寺II	散布地	古代	土師器
12	塚原	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器、住居跡
13	内御堂	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器
14	宇洞	散布地	縄文・古代	縄文土器(中期)、土師器、須恵器
15	保沢川	散布地	平安	土師器、須恵器
16	久保I	散布地	平安	土師器、須恵器
17	久保II	散布地	平安	土師器、須恵器
18	久保III	散布地	平安	土師器、須恵器
19	明戸I	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器
20	明戸II	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
21	明戸III	散布地	平安	土師器
22	明戸IV	散布地	平安	土師器、須恵器
23	番屋	散布地	古代	土師器
24	島岡I	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
25	島岡II	散布地	平安・近世	土師器、須恵器、水路跡
26	種森	散布地	平安	土師器、須恵器
27	幅	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器
28	幅欠	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器
29	野沢川I	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器
30	野沢川II	散布地	縄文・平安	縄文土器(後期・晚期)、土師器、須恵器
31	百日木	散布地	縄文・平安	縄文土器(後期)、土師器
32	大曲	散布地	平安	土師器、須恵器
33	上野々	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器
34	上十日市	散布地	平安	土師器
35	志登計	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
36	戸塚蟹沢	散布地	縄文・古代	縄文土器(晚期)、土師器
37	硯石	散布地	縄文・古代	土師器、須恵器
38	長石	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器
39	滝田筒原	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器、石器
40	蟹沢I	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
41	戸塚筒原	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
42	蒲沢	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
43	端館	城館跡・散布地	平安・中世	土師器、須恵器
44	下十日市古墳群	古墳群	古墳	古墳
45	塚の森I	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器
46	塚の森II	散布地	平安	土師器
47	七ツ森古墳群	古墳群・散布地	縄文・古墳	縄文土器、古墳、土師器
48	七ツ森	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
49	貝の淵I	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器
50	猪鼻	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器

番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物等
51	猪鼻Ⅱ	散布地	古代	須恵器
52	下館Ⅱ	散布地	古代	土師器
53	関口	散布地	古代	土師器
54	関口	散布地	古代	土師器、須恵器
55	滝田歳の神	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
56	大川原館	城館跡・散布地	縄文・古代	縄文土器、土器、堀
57	曲谷地	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器
58	見山	散布地	縄文・古墳	縄文土器
59	見山古墳群	古墳群	古墳	古墳
60	反町	古墳群・祭祀跡	縄文・古墳	縄文土器、古墳、住居跡
61	滝田硯石	散布地	平安	土師器
62	稻荷	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器、刀子、鉄
63	荒野	散布地	古代	土師器
64	宿	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器
65	姫浜姐	散布地	平安	土師器
66	沢流	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
67	安堵屋敷	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
68	佐渡川古墳群	古墳群	古墳	円墳、土師器
69	宮野日方八丁	城館跡	平安	住居跡、土師器、須恵器、鉄器、堀
70	上ノ山	散布地	縄文・古代	縄文土器
71	上ノ山館	城館跡・散布地	古代～中世	堀、縄文土器(前期・中期)、石器、土師器、須恵器
72	源明Ⅰ	散布地	平安	須恵器
73	源明Ⅱ	散布地	古代	土師器
74	葛	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器
75	ME16-1069	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器
76	十三塚	散布地		塚・古錢
77	三岳	散布地	古代	土師器
78	石持Ⅰ	散布地	古代	土師器
79	石持Ⅱ	散布地	古代	土師器
80	馬立Ⅰ	散布地	平安	土師器
81	馬立Ⅱ	散布地	平安	土師器
82	田力中野	散布地	縄文・平安	縄文土器、土師器
83	添市古墳群	古墳群	古墳	古墳
84	東野袋	散布地	古代	土師器
85	庫理	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
86	矢沢古堂	集落跡	古代	土師器、須恵器、鉄製鋤
87	上幅	集落跡	縄文・古代	石器、縄文土器、竪穴住居跡
88	下幅	散布地	古代・平安	土師器、竪穴住居跡、須恵器
89	ME27-0221	散布地	古代	土師器、須恵器
90	矢沢八幡	集落跡・城館跡	平安・近世	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、土師器、須恵器
91	経塚森	経塚	古代	土師器、塚
92	寺場	集落跡	古代	竪穴住居跡、土師器、須恵器
93	ME16-2364	散布地	古代	土師器
94	似内	集落跡	古代	土師器、須恵器
95	上似内	散布地	古代	土師器、須恵器
96	ME26-0233	散布地	古代	土師器
97	下似内	散布地	古代	土師器、須恵器
98	下東	散布地	古代	土師器、須恵器
99	胡四天王山館	城館跡	平安	縄文土器、土師器、須恵器、空濠、竪穴状遺構
100	楓ノ木Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器、須恵器



第4図 周辺の遺跡位置図

### III 野外調査と室内整理の方法

#### 1. 野外調査

##### (1) グリッドの設定

基準点測量を委託し、公共座標軸を利用して調査区を設定した。調査区域の西側に基準点1を、東側に基準点2をそれぞれ設定した。基準点の成果値（日本測地系）は以下の通りである。

基準点1 X = -60,352.000 Y = 29,376.000 H = 89.861m

基準点2 X = -60,352.000 Y = 29,440.000 H = 89.890m

この2つの基準点を結ぶ線を基準線とし、基準線上を基準点1から西に64m進み、更に基準線に直行する線上を北へ56m進んだ点を原点とした。原点より基準線に平行ないし直行するように40m毎に区切り、大区画とした。大区画を更に4m毎に区切り、小区画とした。

グリッドの名称は南北方向はアルファベット、東西方向は数字を用い、その組み合わせによった。大グリッド名は大文字のアルファベットとローマ数字、小グリッド名は大グリッド名を冠した後、小文字のアルファベットと算用数字を用いて、A I b 2のように表した。

##### (2) 粗掘り・遺構検出

調査区域内の数か所にトレンチを入れて検出面までの深さや層序の確認をした後、表土の除去は重機で行った。遺構検出面までの土層の除去は人力で行った。遺構の検出面はⅣ層である。検出された遺構には、検出順に1号住居跡のように命名した。

##### (3) 遺構の精査・出土遺物の取り上げ

遺構の精査は堅穴住居跡・住居状遺構を4分法、焼土遺構・陥し穴状遺構を2分法、溝跡については数か所に上層確認のためのベルトを残して掘り下げた。精査の各段階で図面の作成や写真撮影等必要な記録をとった。出土遺物の取り上げは、遺構内のものは遺構名、遺構外のものは小グリッド単位で層位を記入して取り上げた。

##### (4) 実測

実測は簡易やり方測量を行った。実測図は原則として20分の1の縮尺で平面図・断面図を作成したが、住居跡のカマドなどの細部については10分の1の縮尺で図面を作成した。

##### (5) 写真撮影

写真撮影には、6×7cmモノクロ1台、35mm判のモノクロとカラーリバーサル各1台を使用し、遺構の平面・断面と遺物の出土状況を中心に撮影した。

## 2. 室内整理

### (1) 作業手順

遺構については、現地で作成した実測図の点検、合成、第2原図の作成、トレース、図版作成の順に進めた。遺物については、接合、復元、仕分け、登録を行った後、原則として実測図の作成、トレース、写真撮影、図版作成の順に進めた。

### (2) 遺構図版・遺物図版

本報告書に掲載した遺構図版の縮尺は以下のとおりである。

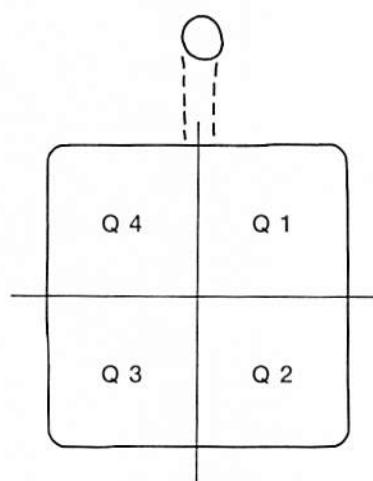
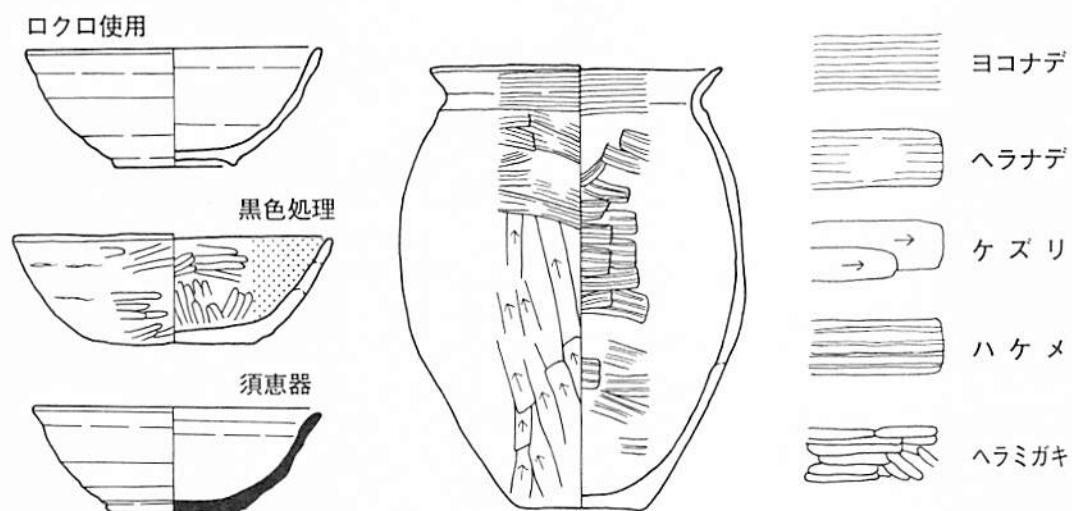
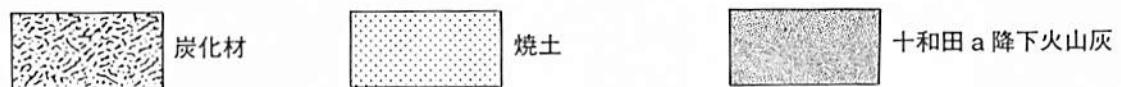
- ・豊穴住居跡・住居状遺構の平面図・断面図 …… 1/60 カマドの断面図 …… 1/30
- ・陥し穴状遺構の平面図・断面図 …… 1/40
- ・溝跡の平面図 …… 1/80、1/160 断面図 …… 1/40

また、遺物図版の縮尺は、土器は1/3又は1/4、拓本は1/3、礫石器と鉄製品は1/3、土製品は1/2である。

遺物写真は原則として1/3の縮尺を用いたが、これに該当しないものには縮尺率を別に付してある。遺構やその他の写真的縮尺は不定である。なお、遺物図版掲載番号と写真図版掲載番号とは統一してある。

遺構図版における上層断面図には、層位ごとに数字を付して色調、土性、混入物等を記してあるが、数字のない層は木根等による搅乱層である。

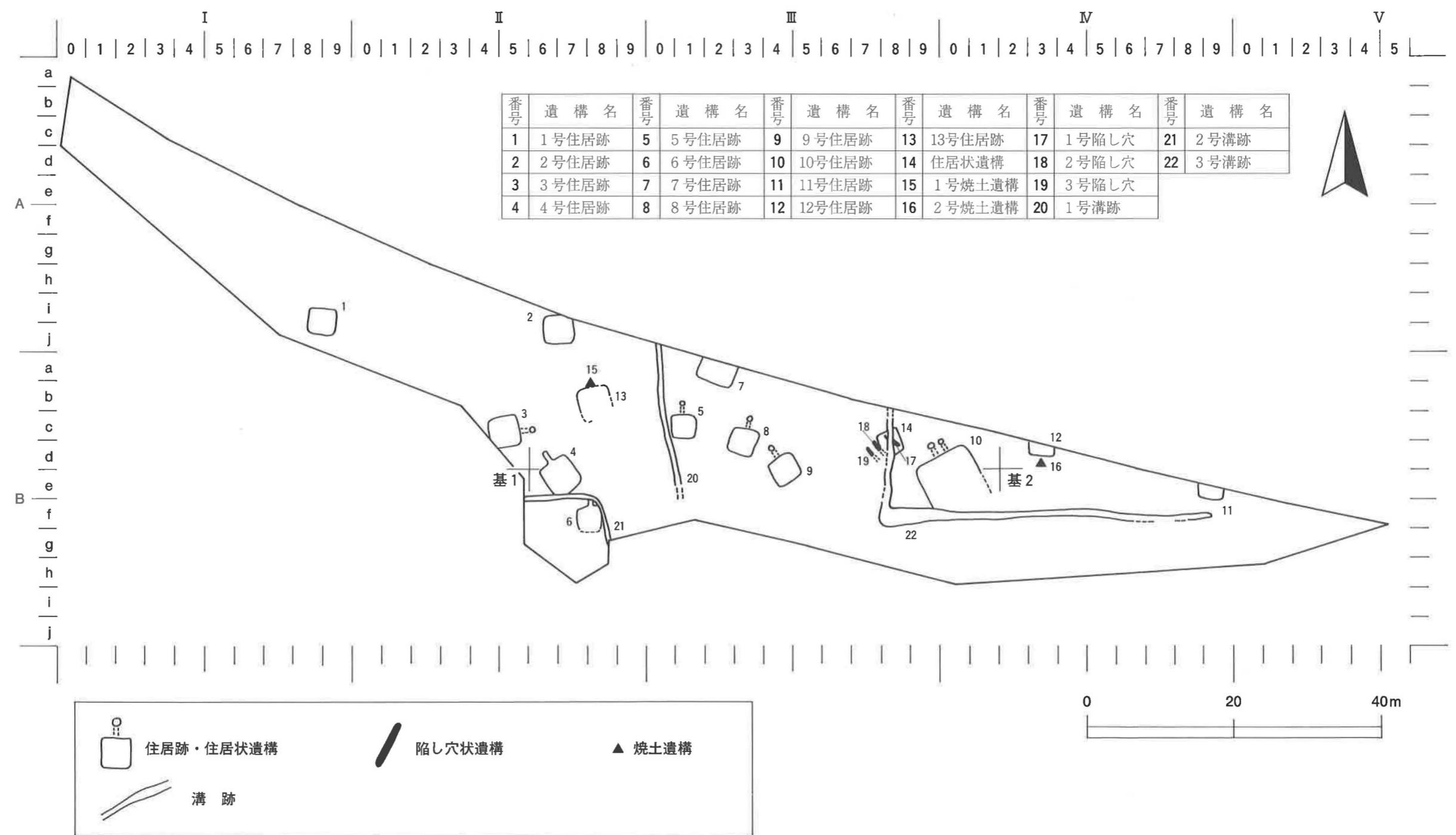
遺構図版・遺物図版を作成するにあたり、使用したスクリントーンの種別と土器実測図の凡例は第5図のとおりである。



住居跡 4分割

第5図 スクリントーン・土器実測図凡例





第6図 貝の淵I遺跡遺構配置図

## IV 検出された遺構と出土遺物

### 1. 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構として、陥し穴状遺構が3基検出されている。住居状遺構の床面下（1基）とその南西部（2基）での検出である。3基とも出土遺物はなく、時期は不明である。

#### 1号陥し穴状遺構（第7図、写真図版4）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB II c 8に位置する。住居状遺構を精査中、黒褐色土の広がりとして検出された。北西側を3号溝跡によって切られている。

＜平面形・規模＞ 平面形は細長い溝状で、長軸方向は北西－南東である。規模は開口部30cm×2.56m、底部18cm×2.55m、深さは中央部で42.8cm、両端部で38~46cmあり、北西側が深くなっている。

＜壁・床面＞ 短軸の断面は長方形状で、両壁とも垂直に立ち上がっている。長軸の断面はフラスコ状で、内湾しながら立ち上がっている。底面は凹凸があるが堅く締まっており、北西側が少し低くなっている。

＜埋土＞ 5層に細分される。黒色土や黒褐色土が主体で、粘性はあるが全体に締まりに欠ける。

#### 2号陥し穴状遺構（第7図、写真図版4）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB III d 7に位置する。IV層面で黒色土の広がりとして検出された。搅乱を受け、北西側の一部が残存するのみである。

＜平面形・規模＞ 平面形は細長い溝状と考えられ、長軸方向は北西－南東である。規模は開口部53cm×(1.05m)、底部23cm×(1.5m)、深さは57~70cmである。

＜壁・床面＞ 短軸の断面は細長い逆台形状で、底面から緩く外傾しながら立ち上がっている。長軸の断面形はフラスコ状と考えられ、内湾しながら立ち上がっている。床面は少し凹凸があるが、堅く締まっている。

＜埋土＞ 8層に細分される。黒色土や黒褐色土が主体で、粘性は弱いが全体によく締まっている。

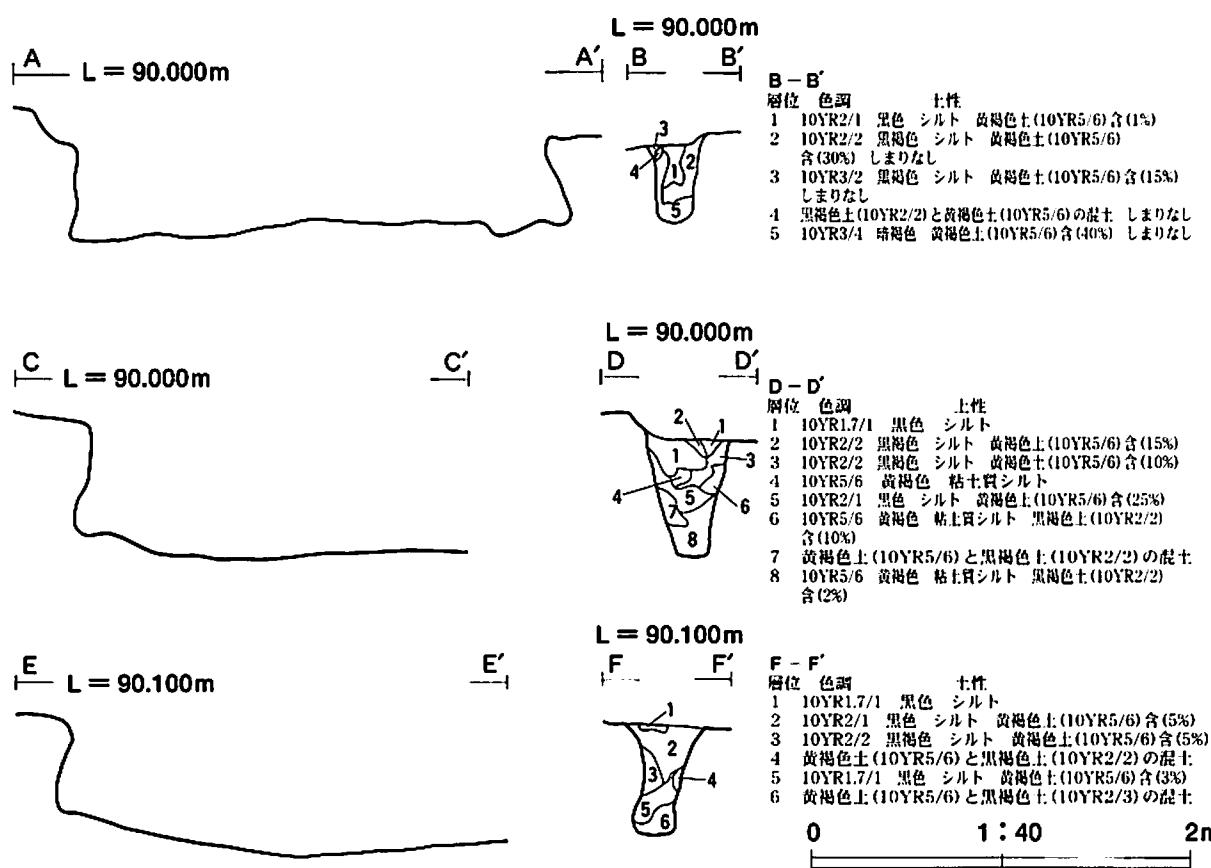
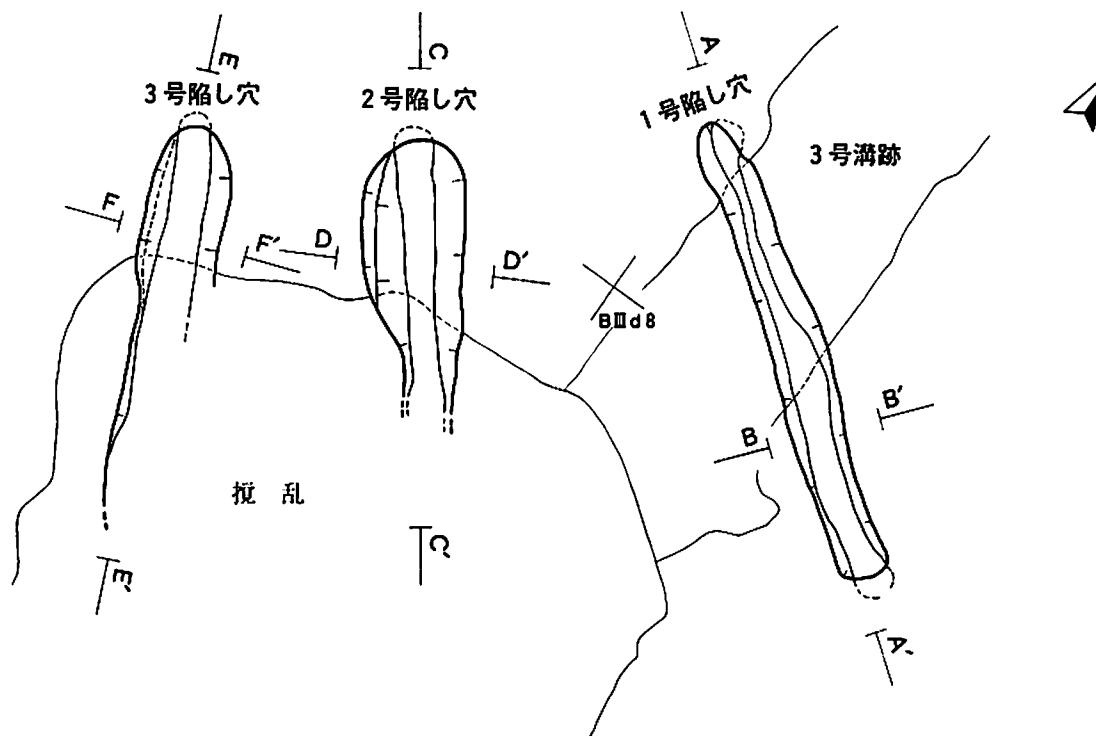
#### 3号陥し穴状遺構（第7図、写真図版4）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB III d 7に位置する。IV層面で黒色土の広がりとして検出された。搅乱を受け、北西側の一部が残存するのみである。

＜平面形・規模＞ 平面形は細長い溝状と考えられ、長軸方向は北西－南東である。規模は開口部44cm×(72cm)、底部24cm×(1.0m)、深さは50~70cmである。

＜壁・床面＞ 短軸の断面は長方形状で、底面から緩く外傾しながら立ち上がっている。長軸の断面形はフラスコ状と考えられ、内湾しながら立ち上がっている。床面は少し凹凸があるが堅く締まっており、南東側が少し低くなっている。

＜埋土＞ 6層に細分される。黒色土や黒褐色土が主体で、粘性は弱いが全体によく締まっている。



第7図 1号・2号・3号陷し穴状造構

## 2. 古代以降の遺構と出土遺物

検出された遺構は堅穴住居跡13棟、住居状遺構1棟、焼上遺構2基、溝跡3条である。出土した遺物は繩文土器、土師器、須恵器、石器、土製品である。

### (1) 堅穴住居跡

#### 1号住居跡

遺構（第8図、写真図版5）

＜位置・検出状況＞ 調査区域東部グリッドA I i 8・i 9・j 8・j 9にまたがって位置する。IV層上面で黄褐色土粒を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は3.4×3.9mである。

＜埋土＞ 柱穴や土坑の埋土を含め17層に細分される。黄褐色土粒を含む黒色土が主体で、全体によく締まっている。1層の黒色土中には十和田a降下火山灰が含まれている。3・7・14層は搅乱層である。

＜壁＞ ほぼ垂直に立ち上がりしている。壁高は2.9~24.1cmで、西壁が最も高い。

＜床面＞ 黄褐色土である。少し凹凸があるが、ほぼ平坦で堅く締まっている。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 8まで8個検出された。平面形はほぼ円形で、規模は径16×19cm~24×33cm、深さ6.6~14.4cmである。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

単位：cm

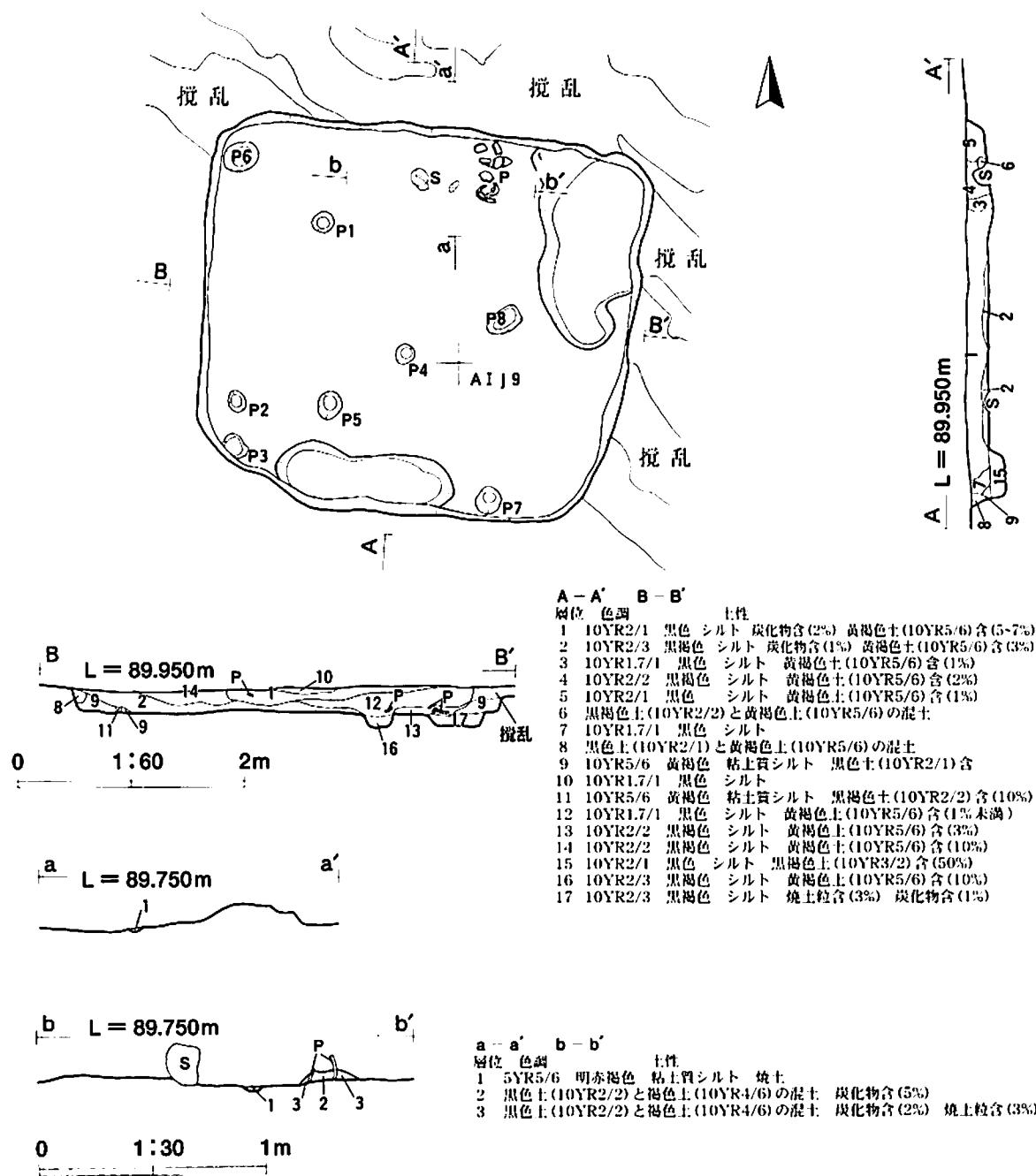
番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8
径	18×20	18×20	17×24	16×19	21×24	24×33	21×24	21×33
深さ	7	14.4	9.4	6.6	10.7	8	7.4	12.2

＜カマド＞ 北壁中央部に設置されていたと考えられる。本体は残存せず、袖部の芯材として使用された礫1個と土師器甕が残っている。また、燃焼部の焼土は径5×10cmの不整形で、厚さは最大で1cmである。

遺物（第29・30図、写真図版22・23）

土器1～12が出土している。1～4は壊で、4はロクロ使用、他はロクロ不使用である。1は底部から外傾しながら立ち上がり、体部下端に小さな段を持っている。口縁部は垂直気味に立ち上がり、口縁端部は僅かに細くなり、口唇部は小さな丸みを持っている。内外両面ともミガキが施され、内面は黒色処理されている。2は外傾して立ち上がっており、内外両面ともミガキが施され、内面は黒色処理されている。3は口縁部が垂直気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚し、口唇部は丸みを持っている。外面は体部下半部にケズリ、上半部にナデが施され、内面はミガキ後黒色処理されている。外面は煤け、口縁部近くには炭化物が付着している。4は大きく外傾して立ち上がり、口唇部は丸みを持っている。胎土には径1～5mmの砂粒を含み、内面は煤けている。底部切り離しは回転糸切りである。1・2・3の底部は平らに調整されている。

5～12は土師器甕である。5は底部の周辺が突出しており、体部は僅かに外傾しながら立ち上がり、頸部に段を持っている。口縁部は頸部から外傾し、口縁端部は僅かに外方へ引き出され、口唇部は凹状になっている。6は頸部に段を持っている。口縁部は外反し、口縁端部は上方へ引き出され、口唇部は丸みを持っている。内面には入念なナデが施されている。7は小壺の甕で、底部から外傾しながら立ち上がり、体部中半部から内湾し頸部へ続いている。口縁部は頸部から外傾し、口縁端部は細くなっている。内面全体と外面上



第8図 1号住居跡

半部は煤けている。8は体部上半部に体部最大径を持ち、頸部に段を持っている。口縁部は頸部から大きく外反しており、口縁端部は外方へ引き出され、口唇部は凹状になっている。外面は煤け、頸部から底部にかけて炭化物が付着している。9は頸部に段をもち、口縁部は緩く外傾しながら立ち上がり、口唇部は平らに調整されている。10は底部から体部下端部で、外傾して立ちあがっており、内外面とも一部煤けている。底部には纖維圧痕が見られる。11は底部の周辺が突出しており、体部上半部に体部最大径を持ち、頸部に段を持っている。口縁部は頸部から外反気味に立ち上がり、口唇部は一部平らに調整されている。底部には木葉痕が残っている。外面は煤けている。12は底部の周辺が大きく突出し、体部最上部に体部最大径を持つ。

ている。頸部には段を持ち、口縁部は外傾しながら立ち上がり、口唇部は円状になっている。底部には一部調整痕がある。体部は内外両面に炭化物が付着している。

#### 時期

出土遺物から、平安時代前半と考えられる。

#### 2号住居跡

遺構（第9図、写真図版6）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドA II i 6・i 7・j 6・j 7にまたがって位置する。IV層上面で黄褐色土粒を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 住居跡の一部が調査区域外のため全体形は明確でないが、平面形は隅丸方形で、規模は3.2×3.45mと推定される。

＜埋土＞ 7層に細分される。黄褐色土粒を含む黒色土が主体で、全体によく締まっている。2層は十和田a降下火山灰である。

＜壁＞ 西壁は外傾しながら立ち上がり、他はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は15.4～29cmで、西壁が最も高い。

＜床面＞ 黄褐色土である。少し凹凸があるが、ほぼ平坦で堅く締まっている。

＜柱穴＞ 1個検出された。規模は径70×82cm、深さ17.6cmである。

＜カマド＞ 北壁中央部に設置されている。本体は残存せず、袖部の一部と燃焼部の焼土が残るのみである。焼土は径21×27cmの不整形で、厚さは最大で2cmあり、よく焼成している。煙道部の規模・形状は調査区域外のため不明である。

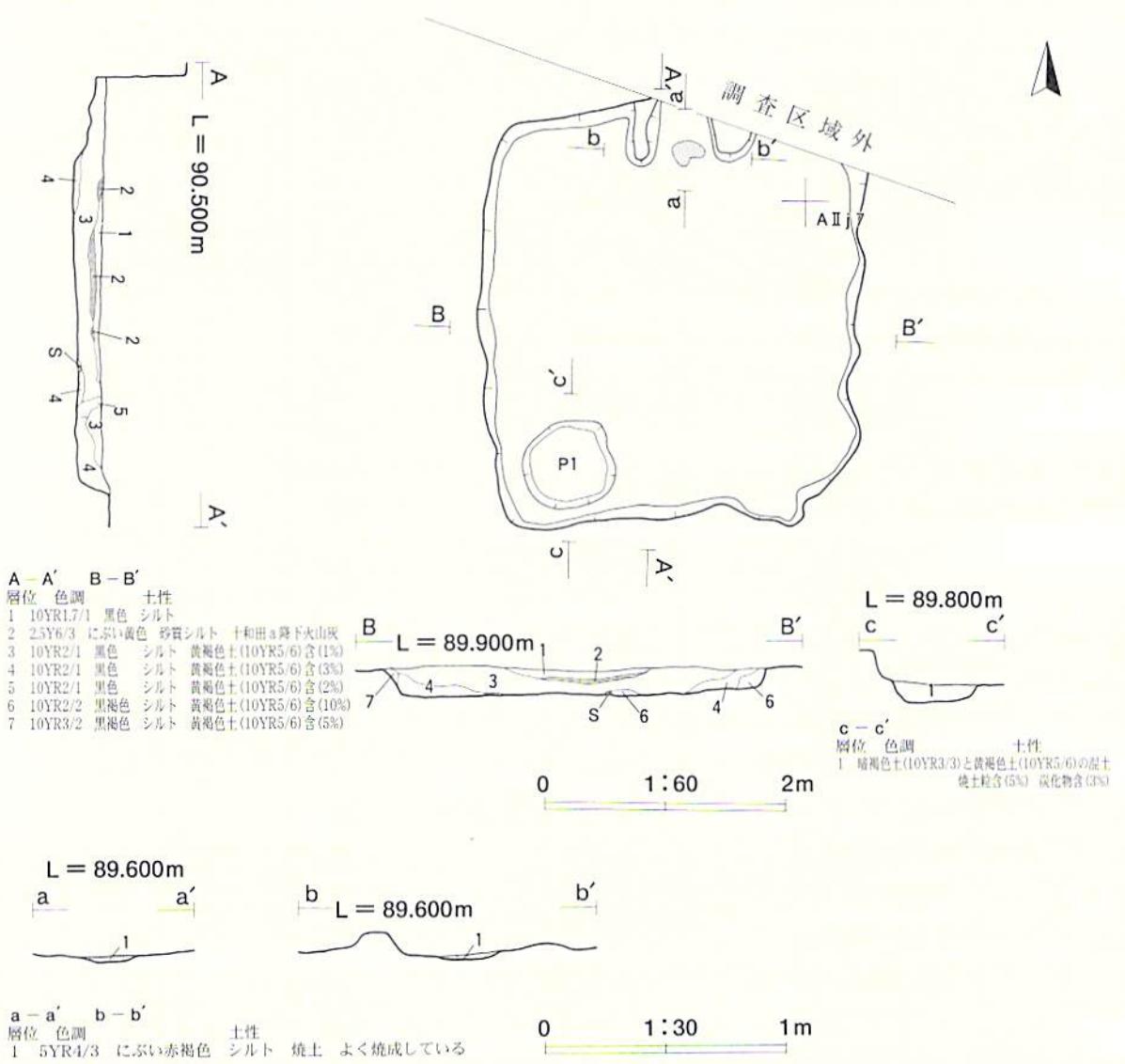
遺物（第30・31図、写真図版23・24）

土器13～17が出土している。13はロクロ不使用の壺である。やや丸底風の底部で、体部は外傾して立ち上がっている。内面はミガキ後黒色処理されている。

14～17は土師器甕である。14は底部の周辺が突出し、体部は僅かに外傾しながら立ち上がっており、体部上半部に体部最大径を持っている。口縁部は頸部から外反気味に立ち上がり、口縁端部は僅かに外方へ引き出され、口唇部は平らに調整されている。底部には木葉痕が残っている。15は底部から外傾して立ち上がり、体部上半部に体部最大径を持っている。口縁部は頸部から2cm位垂直気味に立ち上がり、その後外傾している。底部には木葉痕が残っており、体部は内外両面とも一部煤けている。16は体部上半部から口縁部である。頸部に段を持ち、口縁部は外傾し、口唇部は平らに調整されている。外面は一部煤けている。17は体部から口縁部で、体部中部に体部最大径を持つと考えられる。体部下半部は煤け、炭化物が付着している。

#### 時期

出土遺物から平安時代前半と考えられる。



第9図 2号住居跡

### 3号住居跡

遺構（第10図、写真図版7）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB II c 4・c 5・d 4・d 5にまたがって位置する。IV層面で黄褐色土粒を含む黒褐色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は4.05×4.07mである。

＜埋土＞ 9層に細分される。黄褐色土粒を含んだ黒褐色土が土体で、全体によく締まっている。3層は十和田a降下火山灰である。

＜壁＞ ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は17.9～31.6cmで、東壁が最も高い。

＜床面＞ 黄褐色土である。凹凸がなく平らで、堅く締まっている。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 9まで9個検出された。平面形はほぼ円形で、規模は径16×17cm～70×85cm、深さ3.5～33.4cmである。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

単位：cm

番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9
径	70×85	37×39	16×17	18×19	29×32	20×24	19×20	31×33	30×36
深さ	33.4	5.6	7.9	9.5	3.5	14	15.1	9.3	6.3

＜カマド＞ 東壁やや南側に設置されている。本体は残存せず、袖部の一部が残っている。芯材として円碟を使用し、それを粘土質シルトで覆って構築されている。燃焼部の焼土は、径35×49cmの不整形で、厚さは最大で6cmあり、よく焼成している。煙道部は割り抜き式である。断面形は梢円形で、煙道の長さは1.1mである。煙出部は円形の土坑状で、深さは49cmあり、底部は煙道底面より13cmほど低くなっている。

遺物（第31・32図、写真図版24・25）

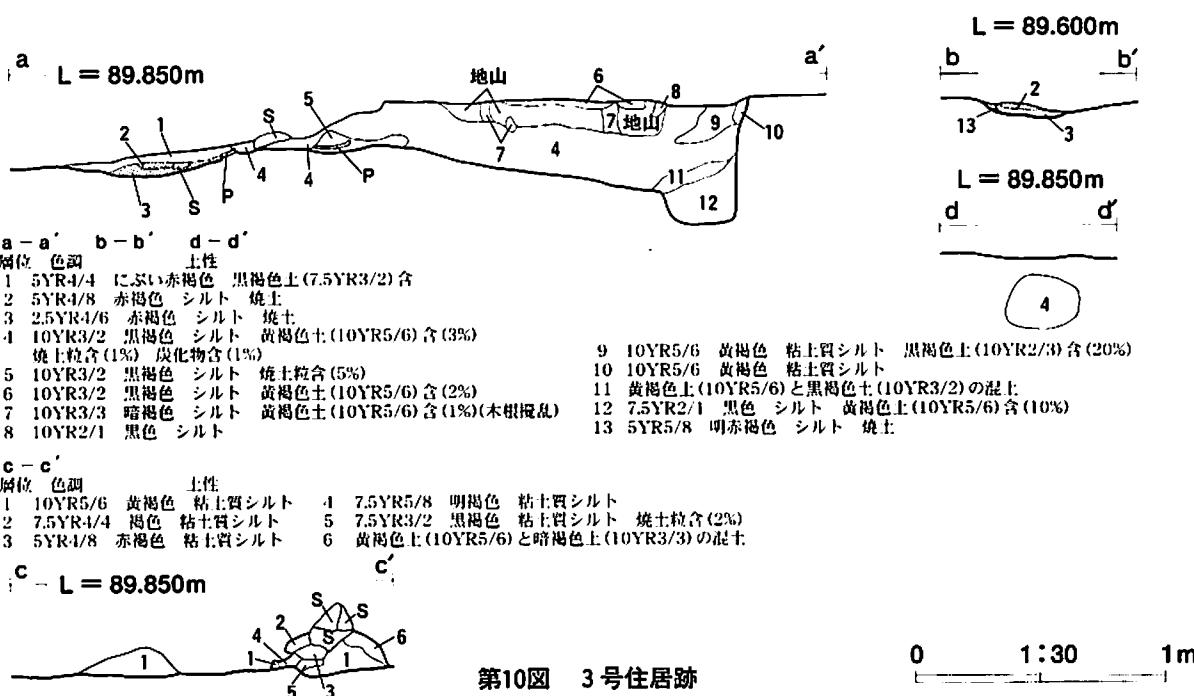
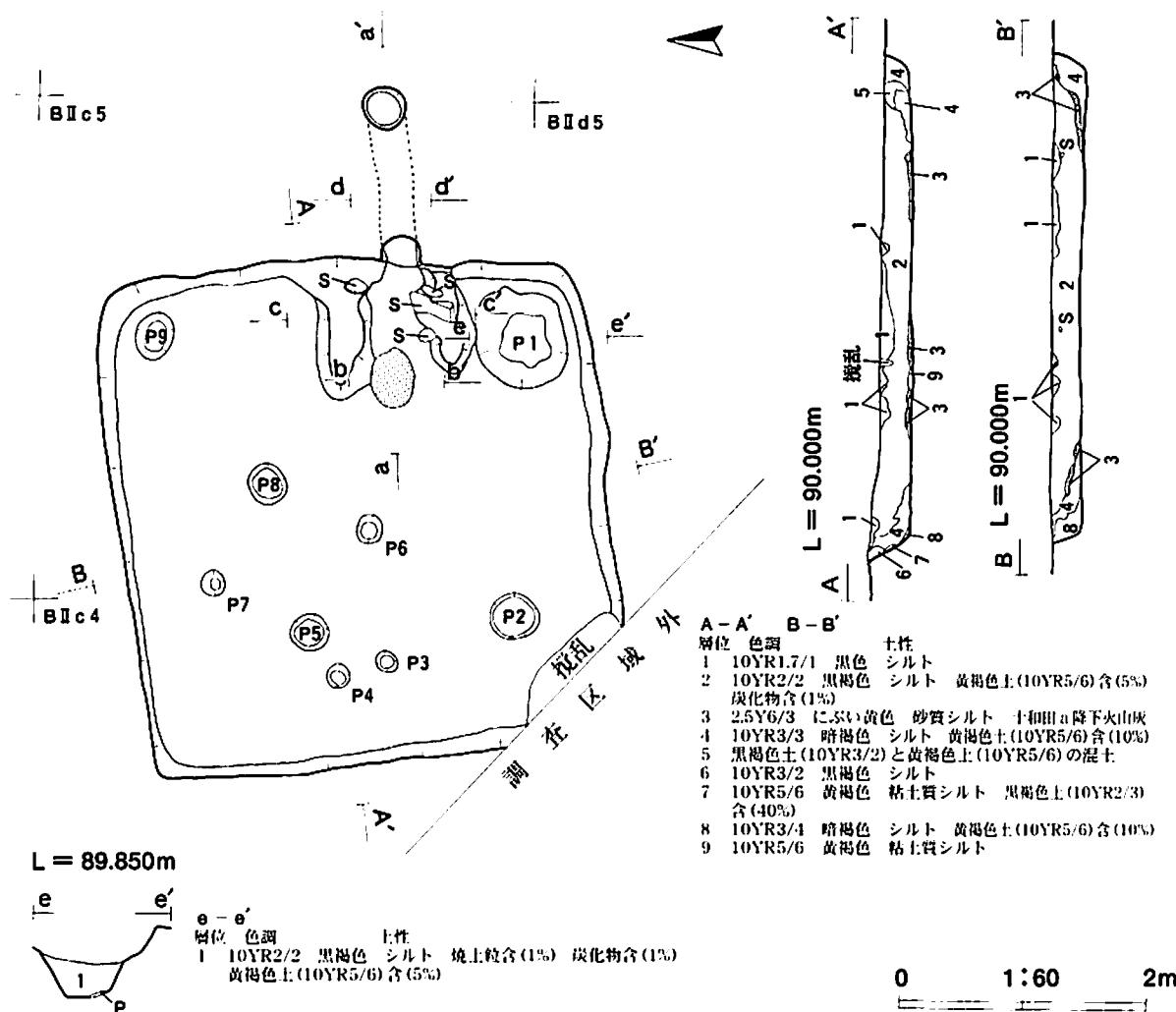
土器18～27が出上している。18～21は土師器壺で、18は口クロ不使用、19～21は口クロ使用である。18は口縁部が垂直気味に立ち上がり、口唇部は丸みを持っている。19は内湾気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外方へ折れ、口唇部は丸みを持っている。20は口縁部が僅かに外方へ折れ、口唇部は大きな丸みを持っている。外面口縁部は一部煤けている。21は底部から体部下端部で、底部切り離しは回転糸切りである。18・19・21は内面がミガキ後黒色処理されている。

22・23は土師器甕である。22は体部上半部から口縁部で、ロクロ使用である。口縁部は大きく外傾し、端部は僅かに肥厚している。体部内面には炭化物が付着している。23は底部から体部下半部で、底部から外傾しながら立ち上がっている。胎土には径1～5mmの砂粒を多量に含み、内外両面とも火熱を受け、一部変色している。

24～27は須恵器甕である。24～26は体部で、外面には敲き目痕が、内面には当て具痕が残っている。27は底部から体部下半部で、大きく外傾しながら立ち上がっている。外面の体部下端部は敲き目痕がケズリにより消されており、内面の当て具痕もナデにより消されている。胎土には径1～3mmの砂粒を含んでいる。

時期

出土遺物から平安時代前半と考えられる。



第10図 3号住居跡

#### 4号住居跡

遺構（第11・12図、写真図版8）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB II d 6・d 7・e 6・e 7にまたがって位置する。IV層面で黄褐色土粒を含む黒褐色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は4.5×4.68mである。

＜埋土＞ 柱穴や土坑の埋土を含め14箇に細分される。黄褐色土粒を含んだ黒褐色土粒が主体で、全体にやわらかいがよく締まっている。1層には十和田a降下火山灰が小ブロック状で含まれている。

＜壁＞ 北西壁は外傾しながら立ち上がっているが、他は垂直に立ち上がっている。壁高は15.4～29.7cmで、北西壁が最も高い。

＜床面＞ 黄褐色土である。少し凹凸があるが、ほぼ平坦でよく締まっている。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 28まで28個検出された。平面形は円形や楕円形で、規模は径17×18cm～68×90cm、深さ4.1～29cmである。柱穴の規模や配置から、P 5・P 23・P 25・P 27が主柱穴と考えられる。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

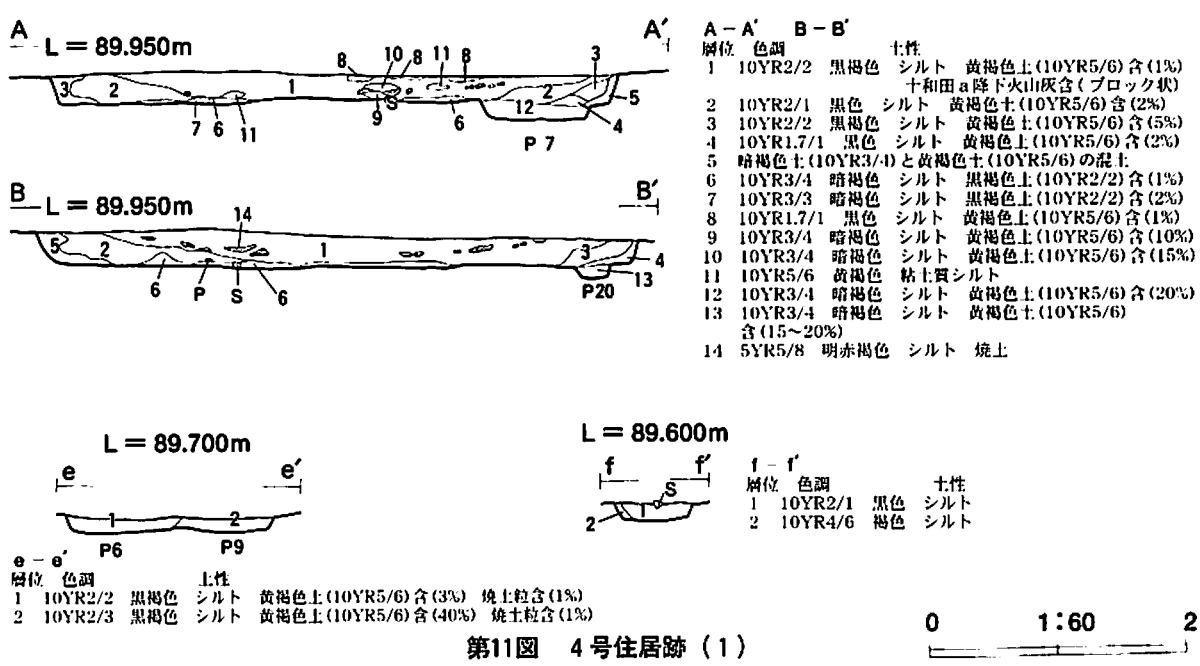
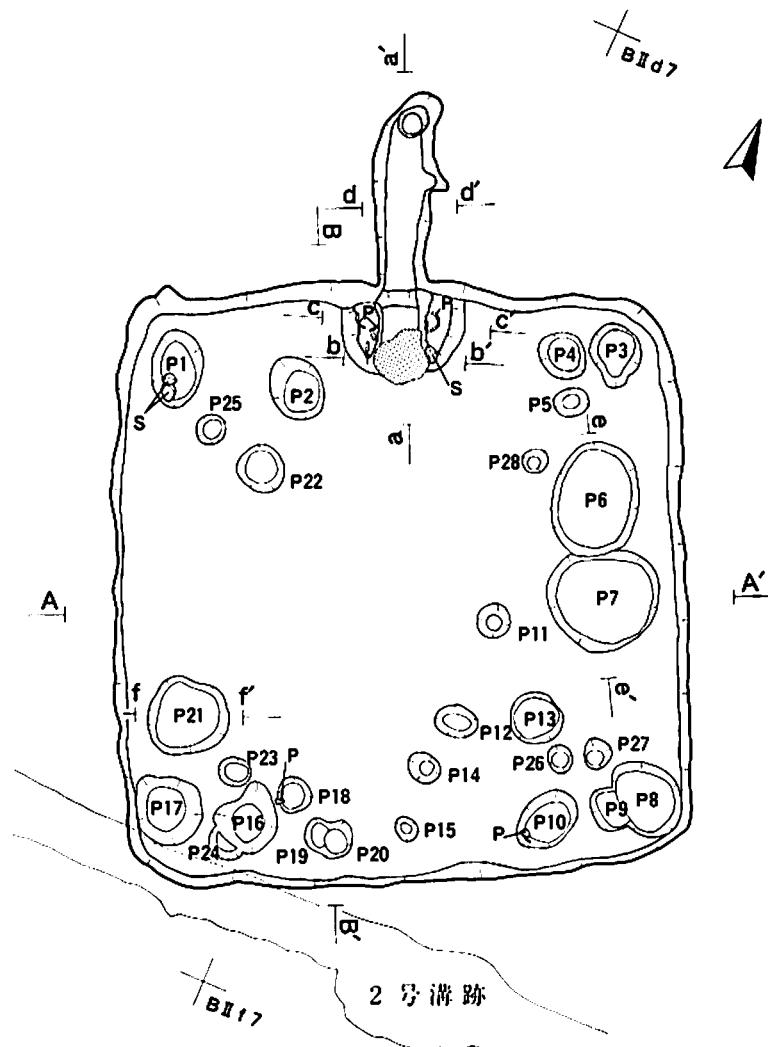
単位：cm

番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
径	41×60	41×50	40×51	35×40	23×28	68×90	80×85	53×65	33×38	38×53
深さ	11.6	11.8	15.7	12.5	17.4	13.7	13	11.2	10.8	8

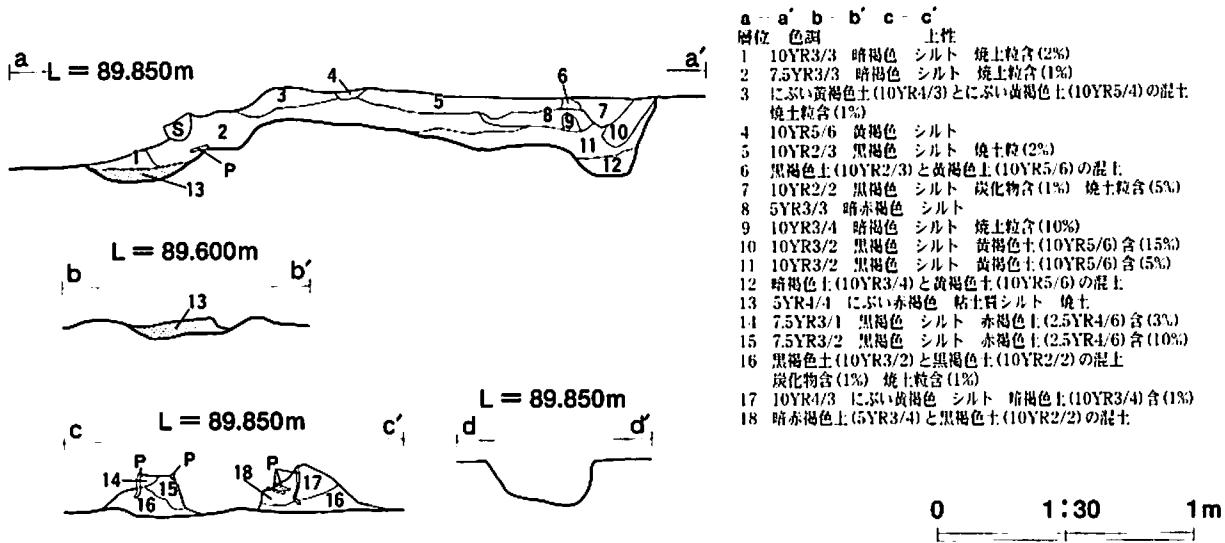
番号	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17	P 18	P 19	P 20
径	26×29	25×34	41×42	23×27	17×18	40×52	55×60	26×28	24×-	30×-
深さ	18.6	21	15.1	18.9	17.7	29	17.6	11.5	6.7	10

番号	P 21	P 22	P 23	P 24	P 25	P 26	P 27	P 28
径	62×65	35×38	23×26	29×-	23×25	20×20	22×25	19×21
深さ	15.3	13.2	16	4.1	23.5	17.4	20.3	17.4

＜カマド＞ 北西壁中央部に設置されている。本体は残存せず、袖部の一部が残っている。芯材として土師器甕を使用し、それを粘土質シルトで覆って構築されている。燃焼部の焼土は径43×45cmの不整形で、厚さは最大で7cmあり、よく焼成している。煙道部は掘り込み式である。煙道の長さは1.5mあり、緩やかに下がりながら煙出部へ続いている。煙出部は径20×27cmの楕円形状の掘り込みをもち、底面は煙道底面より12cmほど低くなっている。



第11図 4号住居跡 (1)



第12図 4号住居跡（2）

#### 遺物（第32～34図、写真図版25～27）

土器28～42と土製品43が出土している。28～30は土師器坏で、28はロクロ不使用、29・30はロクロ使用である。28は僅かに内湾しながら立ち上がり、口縁部は端部から5mmで僅かに外方へ折れ、口唇部は大きな丸みを持っている。内面はミガキ後黒色処理されている。体部外面は沈線が1本巡っている。29は底部から外傾して立ち上がっている。内面はミガキ後黒色処理され、黒色処理は外面口縁部下1cmまで及んでいる。底部切り離しは回転糸切りである。30は口縁部が少し肥厚し、口唇部は丸みを持っている。内面はミガキ後黒色処理されている。体部には墨書きされているが、一部分のため判読できない。

31～40はロクロ不使用の土師器壺である。31は底部の周辺が突出し、体部は少し外傾しながら立ち上がっている。頸部に段を持ち、口縁部は頸部から外反気味に立ち上がり、口縁端部は上方に引き出されて細くなり、口唇部は小さな丸みを持っている。口縁部内面は一部煤けている。32は底部周辺が僅かに突出し、体部は少し外傾しながら立ち上がっている。体部上半部に体部最大径を持ち、頸部には段を持っている。口縁部は頸部から垂直気味に立ち上がった後外傾し、口唇部は平らに調整されている。体部は内外両面とも一部煤け、内面体部中部には炭化物が付着している。33は底部周辺が僅かに突出し、体部は外傾しながら立ち上がっている。体部上半部に体部最大径を持ち、頸部に段を持っている。口縁部は垂直気味に立ち上がった後外傾し、口縁端部は外方へ引き出され、口唇部は丸みを持っている。内外両面とも煤け、口縁部外面には炭化物が付着している。34は体部上半部に体部最大径を持ち、頸部には小さな段を持っている。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁端部は僅かに上方へ引き出されている。内外両面とも煤けている。35は底部から少し外傾して立ち上がっている。頸部には段を持ち、口縁部は外傾もしくは外反するものと考えられる。底部は一部平らに調整されている。37は大きく外傾して立ち上がっており、体部外面にはケズリが施されている。外面は一部煤けている。38は内湾気味に立ち上がっている。胎土には径1～2mmの砂粒が含まれ、特に底部には径1mmの砂粒が多く含まれている。39は底部から外傾して立ち上がり、その後内湾している。体部外面は一部ミガキが施されている。40は底部の周辺が突出し、体部は外傾して立ち上がっている。底部には

径1mmの砂粒が多量に含まれている。38~40は砂底土器と考えられる。

41は須恵器甕である。体部上半部に体部最大径を持ち、口縁部は頸部から僅かに外傾して立ち上がっている。口縁端部は外方へ引き出され、口唇部は上方へつまみ出されている。外面は一部煤け、内面下部には炭化物が少量付着している。

42は流れ込みと考えられる弥生土器である。甕で、R L 単節の縄文原体を用い縄文が施されている。

43は紡錘車である。中央部に径6mmの穴があいている。上・下両面とも平らに調整されている。

#### 時期

出土遺物から、平安時代前半と考えられる。

### 5号住居跡

#### 遺構（第13図、写真図版9）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB III c 0・c 1に位置する。IV層面で褐色土を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は3.3×3.65mである。

＜埋土＞ 5層に細分される。黒色土や黒褐色土が主体で、褐色土粒を含んでいる。5層には十和田a降下火山灰が含まれている。

＜壁＞ 西壁は外傾して立ち上がり、他はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は17.4~29.3cmで、東壁が最も高い。

＜床面＞ 黄褐色土である。少し凹凸があるが、堅く締まっている。

＜土坑＞ P 1が検出されている。平面形は径55×88cmの不整形で、深さは最深部で32cmある。貯蔵穴と考えられる。

＜カマド＞ 北壁中央部に設置されている。本体は残存せず、袖部の一部が残っている。芯材として礫を使用し、それを粘土質シルトで覆って構築されている。燃焼部の焼土は径42×50cmの楕円形で、厚さは最大で7cmあり、よく焼成している。煙道部は割り抜き式である。煙道は断面形が円形で、ゆるやかに下がりながら煙出部に続いている。煙道の長さは90cmである。煙出部は円形の土坑状で、深さは41cmである。底部は18×25cmの楕円形状に溝んでいる。

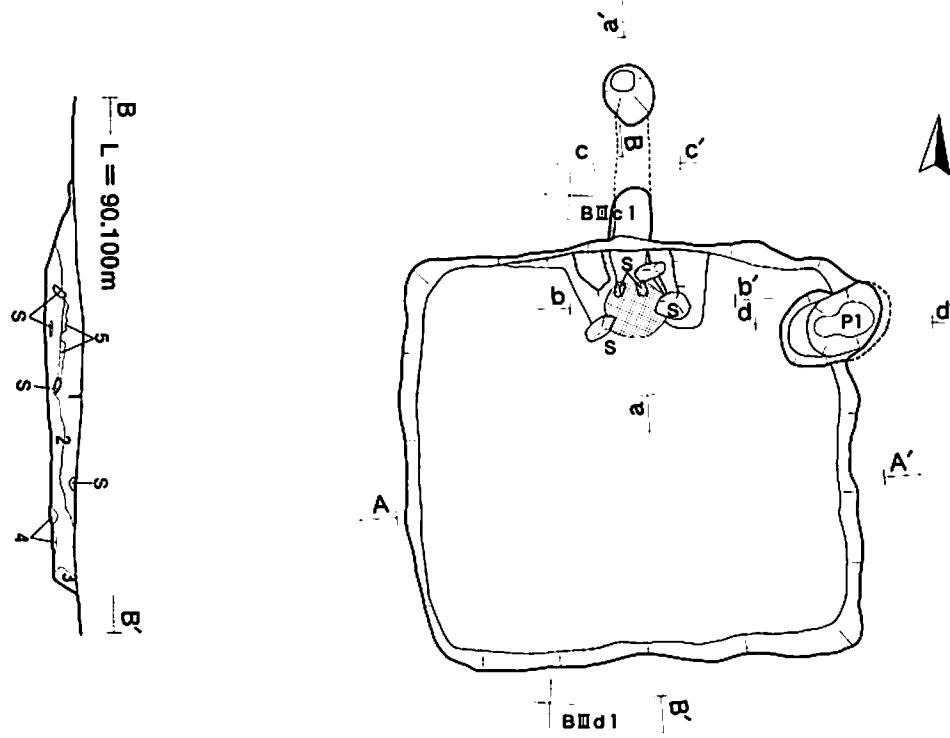
#### 遺物（第33・34図、写真図版27）

土器44~46が出土している。44は口クロ不使用の土師器壺である。体部下端部に小さな段を持ち、体部は小さく外傾しながら立ち上がっている。口縁部は細くなり、口唇部は小さな丸みを持っている。底部は丸底風で、「X」の線刻が認められる。内面はミガキ後黒色処理されており、黒色処理は口縁部外面2cmまで及んでいる。

45は甕である。底部から小さく外傾しながら立ち上がり、体部上半部に体部最大径を持っている。頸部には段を持ち、口縁部は頸部から外傾して立ち上がり、口縁端部は僅かに外方へ引き出され、口唇部は円状になっている。底部はケズリが施され平らに調整されている。外面は全体に煤け、口縁部に炭化物が付着しており、内面も体部が一部煤けている。46は土師器の瓶で、6号住居跡出土の細片と接合したものである。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部下2.5cmに小さな段がある。底部には直径5.3cmの穴があいている。内外両面とも一部煤け、胎土には径1~5mmの砂粒が含まれている。

#### 時期

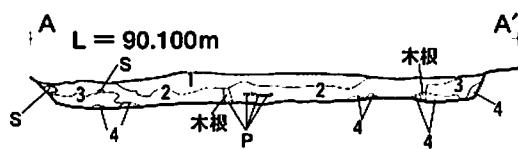
出土遺物から、平安時代前半と考えられる。



**A - A'      B - B'**

層位 色調 土性

- 10YR2/1 黒色 シルト 暗褐色土(10YR4/6)含(1%)
- 10YR2/2 黒褐色 シルト 暗褐色土(10YR4/6)含(5%)
- 10YR2/3 黒褐色 シルト 暗褐色土(10YR4/6)含(40%)
- 10YR5/6 黄褐色 シルト
- 10YR2/1 黒色 シルト 上和田a降下火山灰含(30%)



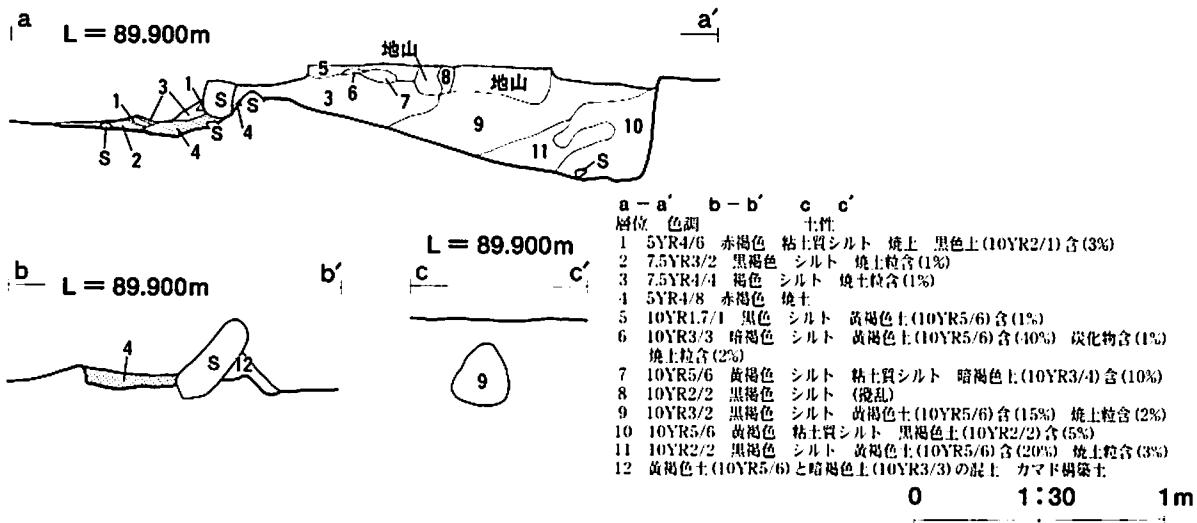
**L = 90.000m**

**d - d'**

層位 色調 土性

- 暗褐色土(10YR3/3)と黄褐色土(10YR5/6)の混土 炭化物含(2%) 焼土粒含(3%)
- 黒褐色土(10YR3/2)と黄褐色土(10YR5/6)の混土 炭化物含(3%) 焼土粒含(2~3%)

**0 1:60 2m**



第13図 5号住居跡

## 6号住居跡

遺構（第14図、写真図版10）

＜位置・検出状況＞ 調査区城グリッドB II f 7・f 8にまたがって位置する。IV層面で黄褐色土粒を含む黒褐色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ 北東部の一部が2号溝跡によって切られている。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は3.15×3.23mである。

＜埋土＞ 6層に細分される。黄褐色土粒を含む黒褐色土が主体で、全体に締まり、粘性がある。

＜壁＞ 東壁は垂直に立ち上がっており、北壁と西壁は外傾しながら立ち上がってている。南壁は削平され残存しない。壁高は2.8~18.9cmで北壁が最も高い。

＜床面＞ 黄褐色土である。凹凸があり、小礫をたくさん含んでいる。全体に堅く締まっている。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 6まで6個検出された。平面形は円形や楕円形で、規模は径22×27cm~54×73cmで、深さは8.1~18.5cmである。柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

単位：cm

番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
径	43×48	22×27	22×29	54×73	35×37	-×63
深さ	10.4	8.6	10.8	11.6	18.5	8.1

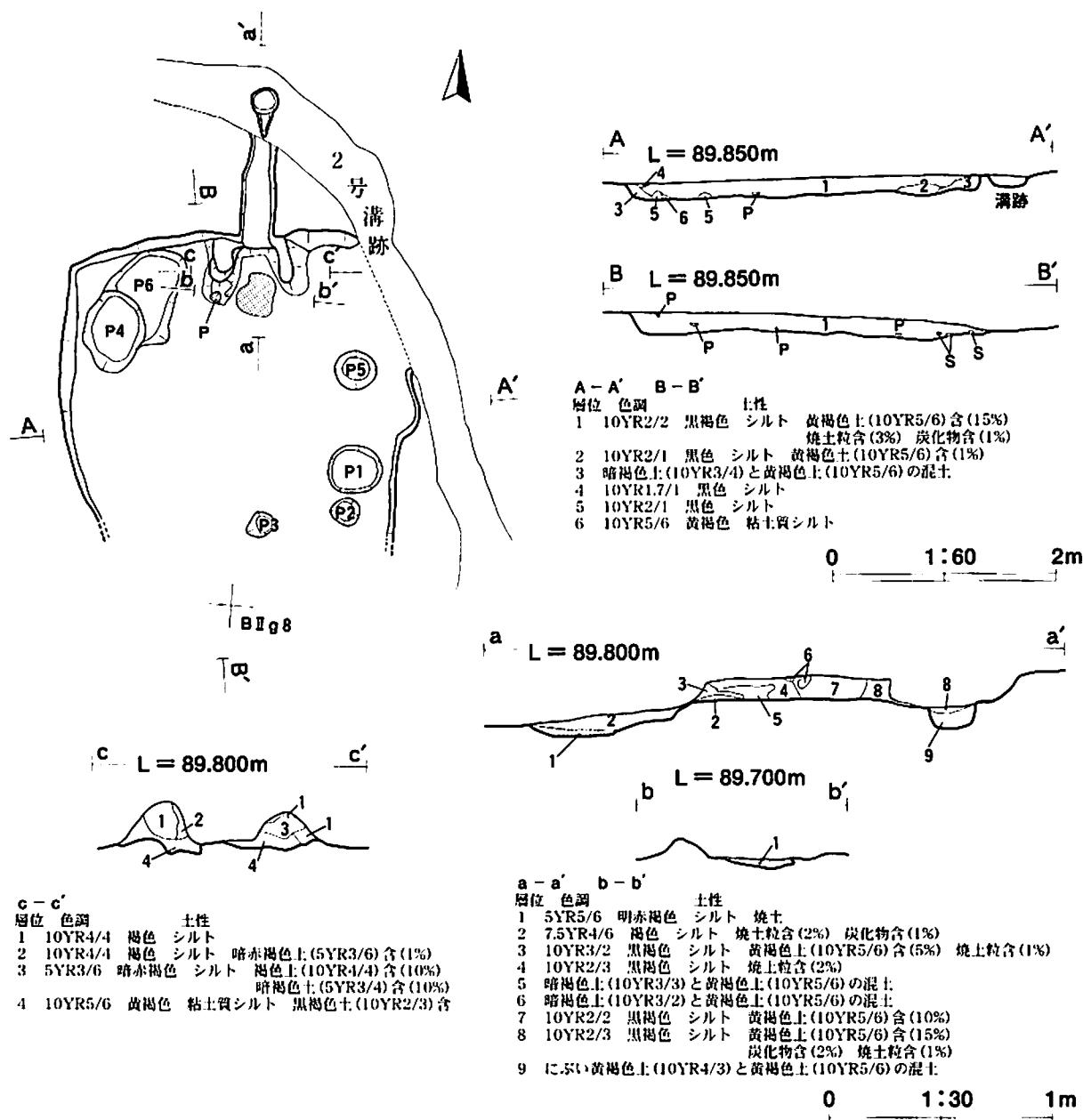
＜カマド＞ 北壁中央部に設置されている。本体は残存せず、袖部の一部が残っている。芯材として礫を使用し、それを粘土質シルトで覆って構築されている。燃焼部の焼土は、径35×40cmの不整形で、厚さは最大で3cmあり、よく焼成している。煙道部の形態は不明である。煙道の長さは90cmあり、ほぼ水平に煙出部へ続いている。煙出部は2号溝跡によって切られており、径20×23cm、深さ9.1cmの円形状の掘り込みが残っている。底面は煙道底面より11cmほど低くなっている。

遺物（第34・35図、写真図版28・29）

土器47~57が出上している。47~51は土師器杯で、51はロクロ使用、他はロクロ不使用である。47は底部から内湾気味に立ち上がっている。口縁端部は肥厚し、口唇部は丸くなっている。体部下端部に段を持ち、底部は磨かれ平らに調整されている。48は緩く内湾しながら立ち上がっている。底部は磨かれ平らに調整されている。49は内湾しながら立ち上がり、体部下端部に段を持っている。底部は丸底風である。50は小さく外傾して立ち上がり、底部は磨かれ平らに調整されている。47~50の内面はミガキ後黒色処理されている。51は大きく外傾して立ち上がっている。口縁部は僅かに肥厚し、口縁端部は細くなり、口唇部は小さな丸みを持っている。底部切り離しは回転糸切りである。

52は土師器鉢である。体部は底部から8mm位まで垂直気味に立ち上がり、その後外傾して立ち上がっており、体部上半部には段を持っている。口縁部は僅かに肥厚し、底部はやや上げ底風になっている。内面はミガキ後黒色処理されている。

53~57は土師器甕である。53は底部から外傾して立ち上がっているものと考えられる。体部上半部に体部最大径を持ち、頸部には段を持っている。口縁部は頸部から垂直気味に立ち上がり、その後大きく外反している。口縁端部は上方に引き出され、口唇部は小さな丸みを持っている。体部は内外両面とも煤けている。54は底部の周辺が僅かに突出し、体部は内湾気味に立ち上がっている。頸部には小さな段を持っている。内外両面とも煤けている。55は底部の周辺が僅かに突出し、体部は外傾しながら立ち上がっている。底部は中心部が直径5cmの範囲で2mm程くぼんでいる。砂底土器と考えられる。56・57は外傾して立ち上がり、内外



第14図 6号住居跡

両面とも煤けている。

時期

出土遺物から、平安時代前半と考えられる。

## 7号住居跡

遺構（第15図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドBⅢ a1・a2にまたがって位置する。遺構の北側半分は調査区域外である。IV層面で黄褐色土粒を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形と推定される。規模は(2.55)×4.9mである。

＜埋土＞ 13層に細分される。黒色土や黒褐色土が主体で、いずれも黄褐色土粒を含んでいる。

＜壁＞ 東壁は垂直に立ち上がり、西壁と南壁は外傾しながら立ち上がっている。壁高は19.1～32.7cmで、東壁が最も高い。

＜床面＞ 黄褐色土である。全体に堅く縮まるが、木根により搅乱を受け凹凸がある。

＜柱穴・土坑＞ P1～P4まで4個検出された。平面形はほぼ円形で、規模は径24×32cm～70×78cm、深さ10.1～31.2cmである。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

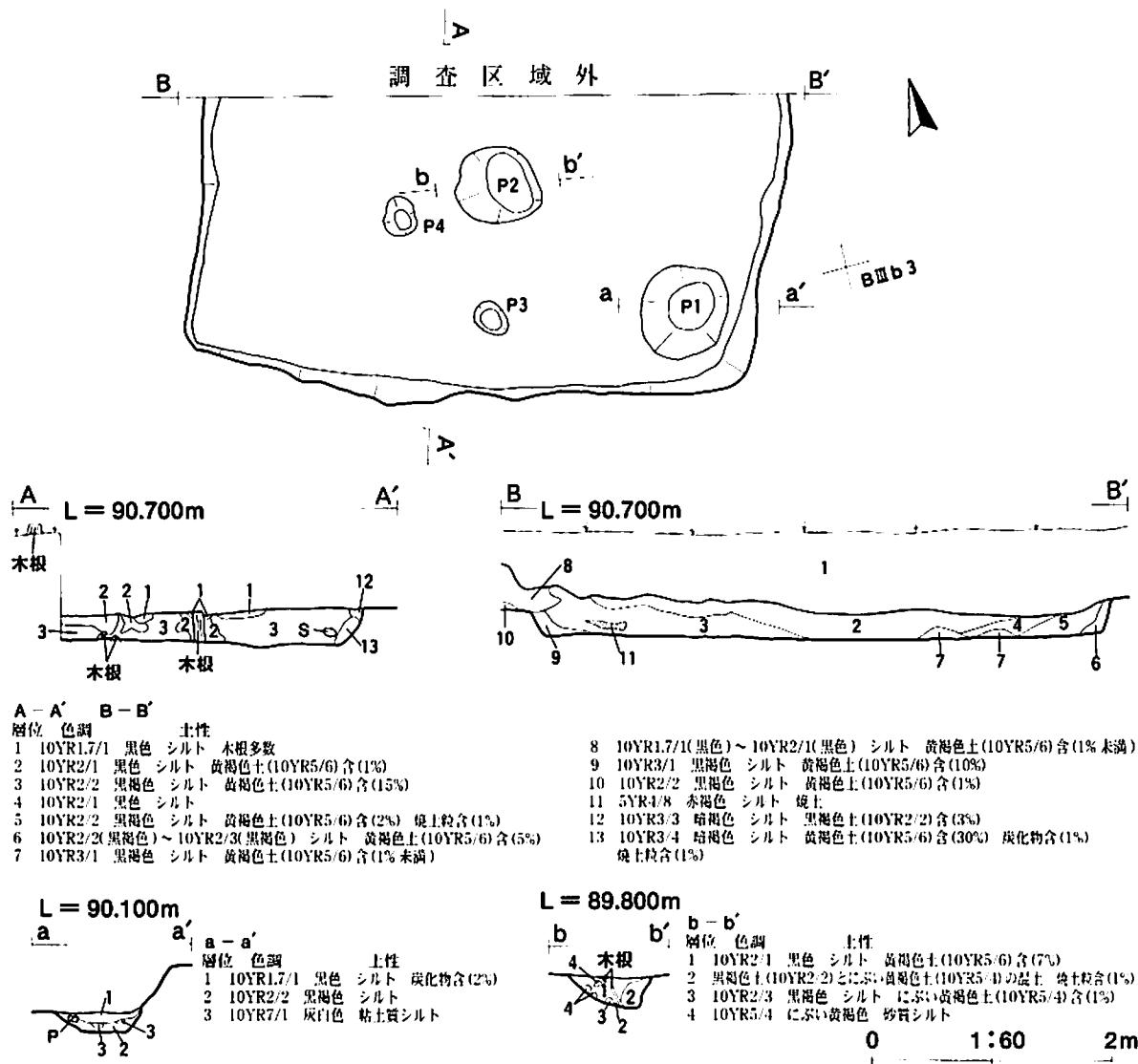
単位：cm

番号	P1	P2	P3	P4
径	70×78	63×75	24×32	27×33
深さ	21.7	31.2	10.1	28.8

＜カマド＞ 他の住居跡の例から考え、北壁（調査区域外）に設置されている可能性がある。

遺物（第35～37図、写真図版29～32）

土器58～87と石器88が出土している。58～76は口クロ使用の土師器壺であり、底部切り離しは71・74を除いて回転糸切りである。58～62は内面がミガキ後黒色処理されている。58は外傾して立ち上がり、口縁端部は外方へ折れ、口唇部は小さな丸みを持っている。体部には正面で「寛」と墨書きされている。59は内湾気味に立ち上がっている。口縁端部は僅かに肥厚し、口唇部は小さな丸みを持っている。黒色処理は外面にまで及んでいる。60は外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに肥厚している。61は外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外方へ折れている。62は外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに肥厚し外方へ折れている。63は大きく外傾して立ち上がっている。外面は体部と底部の一部が煤けている。64は内湾気味に立ち上がっており、口縁部は肥厚し、口唇部は小さな丸みを持っている。口縁部は内面の一部が煤けている。65は大きく外傾して立ち上がっている。口縁部は僅かに肥厚し、口唇部は丸みを持っている。内面は一部煤けている。66は外傾して立ち上がっている。口縁部は外方へ折れ、口唇部は小さな丸みを持っている。67は大きく外傾して立ち上がっている。口縁部は僅かに肥厚している。内面は一部煤けている。63～67はいずれも形が歪んでいる。68は内湾気味に立ち上がっている。口縁部は肥厚し、外方へ折れている。体部外面は火熱を受け、一部赤変している。69は外傾して立ち上がっており、口縁部は丸みを持っている。70は内湾気味に立ち上がっている。口縁部は肥厚して外方へ折れ、口唇部は丸みを持っている。71は大きく外傾して立ち上がっている。口縁部は肥厚し、口唇部は丸みを持っている。体部は内外両面とも一部煤けている。体部径に比べ底部径が小さい。72は内湾気味に立ち上がっている。口縁部は大きく肥厚し、口唇部は丸みを持っている。73は大きく外傾して立ち上がっている。口縁端部はやや細くなり、口唇部は小さな丸みを持っている。74は外傾して立ち上がっており、口唇部は丸みを持っている。体部外面には黒斑があり、胎土には砂粒が多く含まれている。75は内湾気味に立ち上がっている。口縁端部は少し外方へ折れ、口唇部は小さな丸みを持っている。76は口縁端部が少し肥厚し、口唇部は小さな丸みを持っている。



第15図 7号住居跡

77~80はロクロ使用の須恵器杯である。77は内湾気味に立ち上がり、口縁部は肥厚して外方へ折れている。78・79は外傾して立ち上がっており、79の口縁端部はやや細くなっている。80はやや内湾気味に立ち上がっており、胎土には径1mmの砂粒が多く含まれている。底部切り離しはいずれも回転糸切りである。

81はロクロ使用の土師器椀と考えられる。底部から内湾しながら立ち上がり、2cm位から垂直気味に立ち上がっている。体部・底部とも内外両面煤けている。底部切り離しは回転糸切りである。

82・83は土師器の鉢形土器である。いずれもロクロ使用で、底部切り離しは回転糸切りである。82は内湾して立ち上がった後4cm位から垂直気味に立ち上がっている。口縁部は外傾し、口縁端部は上方へ引き出され、口唇部は小さな丸みを持っている。外面全体と内面体部上半部から口縁部にかけて煤けている。83は内湾気味に立ち上がっている。口縁部は頸部から外傾し、口縁端部は僅かに肥厚している。外面は全体に煤け、内面は口縁部が煤け、炭化物が付着している。

84はロクロ使用の土師器の鉢型土器または甕である。外傾して立ち上がっており、外面は煤けている。底部切り離しは回転糸切りである。

85はロクロ使用の土師器の小型壺である。底部から少し外傾して立ち上がっており、口縁部は内湾し、口唇部は小さな丸みを持っている。底部切り離しは回転糸切りである。

86は土師器の耳皿である。ロクロ使用で、底部切り離しは回転糸切りである。

87はロクロ使用の須恵器甕の体部片である。外面はヘラナデされている。

88は石鏡である。横断面形は台形状で、両側縁と先端に刃部が形成されている。

#### 時期

出土遺物から、平安時代前半と考えられる。

### 8号住居跡

#### 遺構（第16図、写真図版12）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB III c 2・c 3・d 2・d 3にまたがって位置する。IV層面で黄褐色土粒を含む暗褐色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は3.35×3.92mである。

＜埋土＞ 4層に細分される。黄褐色土粒を含む暗褐色土が主体で、全体に堅く締まり、粘性がある。

＜壁＞ 外傾しながら立ち上がっており。壁高は7.2～26.6cmで、東壁が最も高い。

＜床面＞ 黄褐色土である。全体に凹凸があり、堅く締まっている。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 3まで3個検出された。平面形は円形や梢円形で、規模は径21×23cm～54×79cm、深さ4.2～10.8cmである。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

#### 柱穴計測表

単位：cm

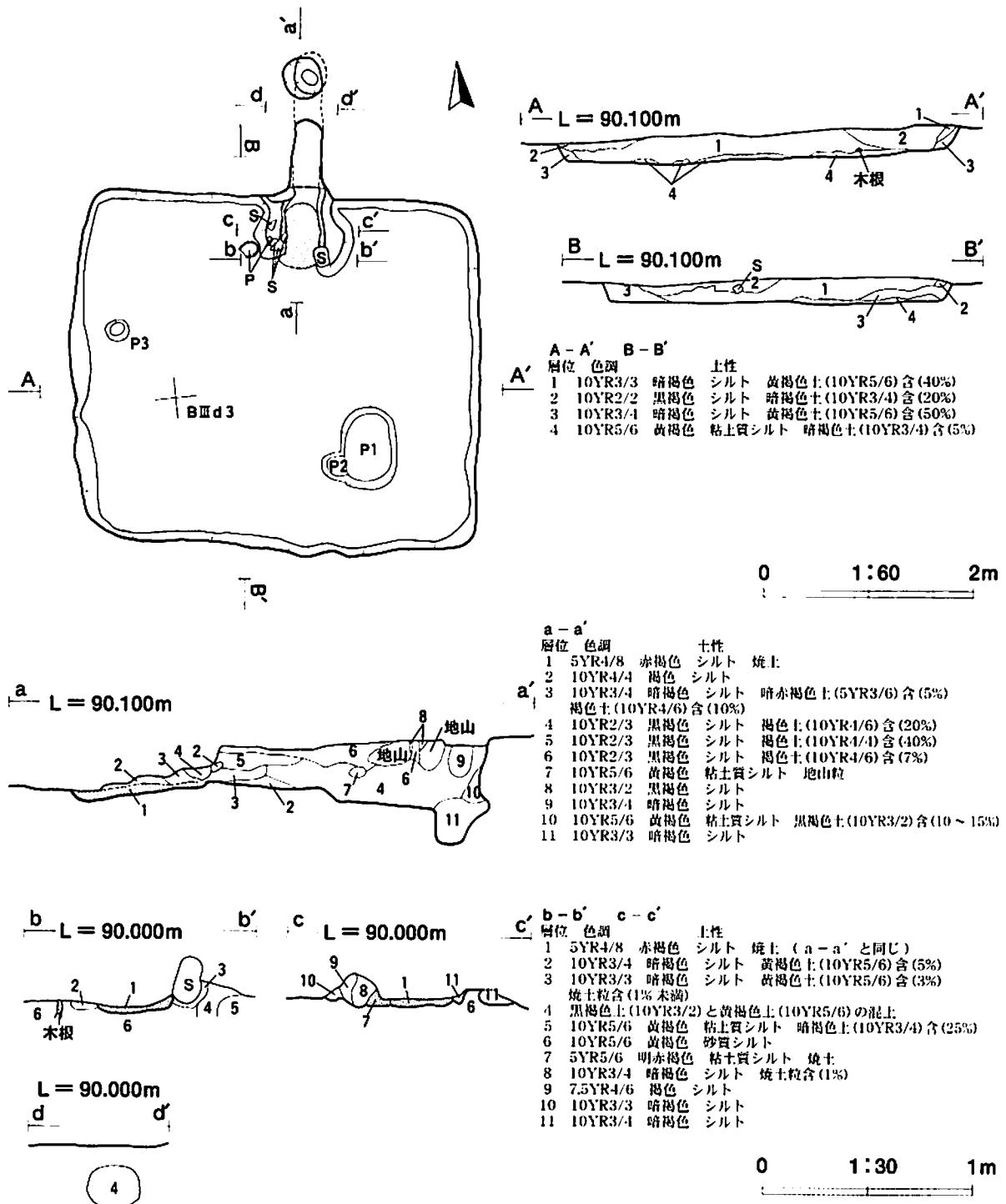
番号	P 1	P 2	P 3
径	54×79	28×-	21×23
深さ	10.2	4.2	10.8

＜カマド＞ 北壁中央部に設置されている。本体は残存せず、袖部の一部が残っている。芯材として礫を使用し、それを粘土質シルトで覆って構築されている。燃焼部の焼土は径33×63cmの梢円形で、厚さは最大で4cmあり、よく焼成している。煙道部は刎り抜き式である。煙道の長さは1mあり、緩やかに下がりながら煙出部へ続いている。煙出部は円形の土坑状で、深さは54.7cmあり、底面は煙道底面より21cmほど低くなっている。

#### 遺物（第37図、写真図版32）

土器89～95が出土している。89～92はロクロ不使用の土師器壺である。89は外傾して立ち上がっており、体部下端部には段を持っている。口縁部は僅かに外方へ折れ、口唇部は丸みを持っている。底部は丸底風である。90は外傾して立ち上がっており、底部は平らに調整されている。91は内湾しながら立ち上がっており、口縁部は垂直気味に立ち上がっており。底部は丸底風である。92は内湾して立ち上がっており、体部に段を持っている。いずれも内面はミガキ後黒色処理されており、89～91は外面もミガキが施されている。

93～95はロクロ不使用の土師器甕である。93は底部の周辺が僅かに突出し、体部は底部から少し外傾しながら立ち上がっており。体部は上半部に体部最大径を持ち、頸部には段を持っている。口縁部は頸部から外



第16図 8号住居跡

反して立ち上がり、口縁端部は外方斜め下へ引き出され、口唇部は小さな丸みを持っている。底部には木葉痕が残っている。外面は煤け、口縁部には炭化物が少量付着している。94は底部周辺が大きく突出し、体部は少し外傾しながら立ち上がり、上半部に体部最大径を持っている。口縁部は頸部から外反し、口唇部は小さな丸みを持っている。底部には木葉痕が残っている。内外両面とも体部上半部及び口縁部が煤けている。

95は体部上半部に体部最大径を持つと考えられ、緩く内湾しながら頸部へ続いており、頸部には段を持っている。口縁部は頸部から2.5cm垂直に立ち上がった後外傾している。内外両面とも煤け、内面には炭化物が少量付着している。

#### 時期

出土遺物から、平安時代前半と考えられる。

### 9号住居跡

#### 遺構（第17図、写真図版13）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB III d 4・d 5・e 4・e 5にまたがって位置する。IV層面でにぶい黄褐色土粒を含む黒褐色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は3.85×4.06mである。

＜埋土＞ 8層に細分される。にぶい黄褐色土粒を含んだ黒褐色土が主体で、堅く締まり、粘性がある。

＜壁＞ 南東壁は外傾しながら立ち上がり、他は垂直に立ち上がっている。壁高は8.7～23.9cmで、北東壁が最も高い。

＜床面＞ 黄褐色土である。小礫を多量に含んでおり、少し凹凸があるが堅く締まっている。

＜柱穴・土坑＞ 検出されなかった。

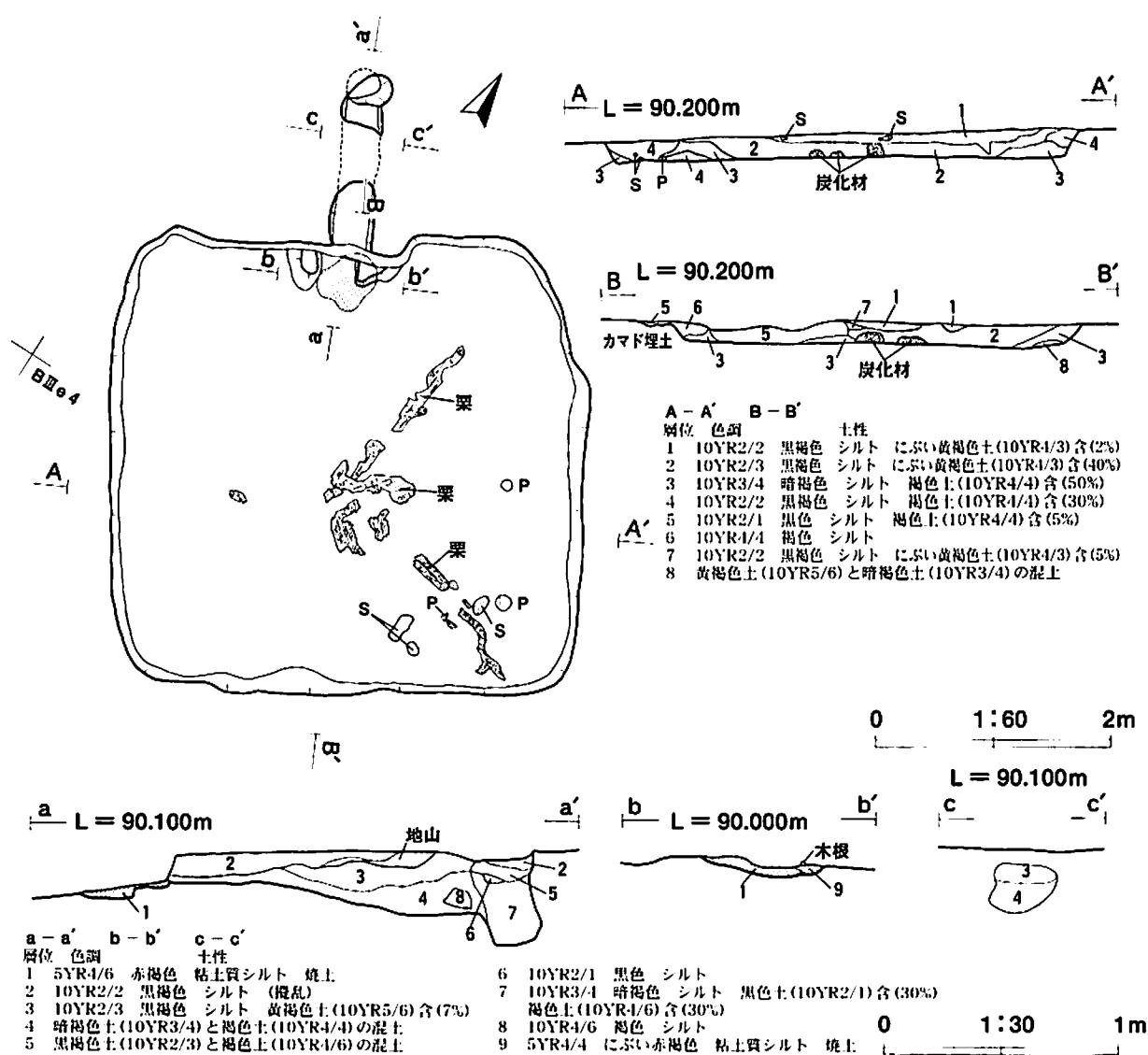
＜カマド＞ 北西壁中央部に設置されている。本体は袖部の一部が残る。燃焼部の焼土は径43×53cmの不整形で、厚さは最大で5cmある。煙道部は刎り抜き式である。煙道は断面形が不整形で、緩やかに下がりながら煙出部へ続いている。煙道の長さは1.26mである。煙出部は円形の土坑状で、深さは44cmあり、底部は煙道底面より16cmほど低くなっている。

#### 遺物（第37・38図、写真図版32～34）

土器96～109が出土している。96・97はロクロ不使用の土師器壊で、どちらも内面はミガキ後黒色処理されている。96は底部が平らに調整されており、体部は底部から内湾しながら立ち上がり、体部中部に段を持っている。黒色処理は口縁部外面3cmまで及んでいる。97は内湾しながら立ち上がっており、体部中部に段を持っている。黒色処理は外面にまで及んでいる。外面もよく磨かれている。98はロクロ不使用の土師器高台付壊である。台部は大きく「八」の字状に開いている。体部は内湾して立ち上がっており、口縁部は若干内湾気味になっている。体部外面中部には段を持っている。黒色処理は口縁部外面5cmにまで及んでいる。

99～108はロクロ不使用の土師器壊である。99・100は底部～口縁部である。99は僅かに内湾気味に立ち上がっており、体部中部に体部最大径を持っている。頸部には段を持ち、口縁部は頸部から大きく外傾し、口縁端部1cm下から小さな「く」の字状に斜め上方へ引き出されている。底部の周辺は大きく突出している。外面は煤け、頸部付近には炭化物が付着している。100は外傾して立ち上がって、体部中部に体部最大径を持ち、内湾しながら頸部へ続いている。頸部には段を持ち、口縁部は頸部から大きく外傾し、口縁端部1cm下から小さな「く」の字状に斜め上方へ引き出されている。底部は平らに調整され、周辺は突出している。内面は体部中部に、外面は体部上半部にそれぞれ炭化物が付着している。

101～104は体部～口縁部である。101は内湾しながら頸部へ続いている。頸部は段を持ち、口縁部は頸部から大きく外傾している。外面は煤けている。102は体部上半部に体部最大径を持ち、「く」の字状に折れ頸部へ続いている。頸部には段を持ち、口縁部は頸部から外傾し、口縁端部はやや肥厚気味である。外面は煤



第17図 9号住居跡

けている。

103は体部から内湾して頸部に続いている。頸部には段を持ち、口縁部は頸部から大きく外傾し、口縁端部1.5cm下から「く」の字状に斜め上方へ引き出されている。外面は煤けている。104は頸部に段を持ち、口縁端部下1cmに沈線が一本巡っている。外面は煤け、口縁部には炭化物が少量付着している。

105~107は底部~体部で、底部の周辺が突出し、体部は外傾(105・106)または内湾気味(107)に立ち上がっている。いずれも外面は煤けており、106には炭化物が付着している。

108・109は小型の壺である。108は底部から内湾して立ち上がり、体部中部に体部最大径を持っている。頸部には小さな段を持ち、口縁部は頸部から外傾し、口縁端部は僅かに外方へ引き出され、やや肥厚気味である。外面は煤けている。109は僅かに外傾して立ち上がっており、頸部に段を持っている。底部は平らに調

整されている。内外両面とも一部焼けている。

#### 時期

出土遺物から、平安時代前半と考えられる。

#### 10号住居跡

遺構（第18～20図、写真図版14・15）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB III d 9・e 9・f 9、B IV d 0・e 0・f 0にまたがって位置する。IV層面で、黒褐色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ 南西部を3号溝跡によって切られている。

＜平面形・規模＞ 南東壁と南西壁の一部が残存せず全体形は明確でないが、隅丸方形と推定され、規模は7.95×(6.5)mである。

＜埋土＞ 11層に細分され、黒褐色土が主体である。全体に堅く締まっている。

＜壁＞ 北西壁はほぼ垂直に立ち上がり、南西壁と南東壁は外傾しながら立ち上がっている。壁高は5.3～22.4cmで、北西壁が最も高い。

＜床面＞ 黄褐色土である。全体に堅く締まっている。南東部は小礫を多量に含んでおり、北西部に比べ10cm程低くなっている。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 21まで21個検出された。平面形は円形や楕円形で、規模は径17×19cm～78×80cm、深さ8.1～42.9cmである。柱穴の配置から、P 1・P 12・P 17・P 19が主柱穴と考えられる。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

単位：cm

番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8
径	32×37	38×46	17×22	23×29	55×71	18×20	69×72	18×20
深さ	42.9	33.9	12.2	17.6	14.5	8.1	15.7	9.9

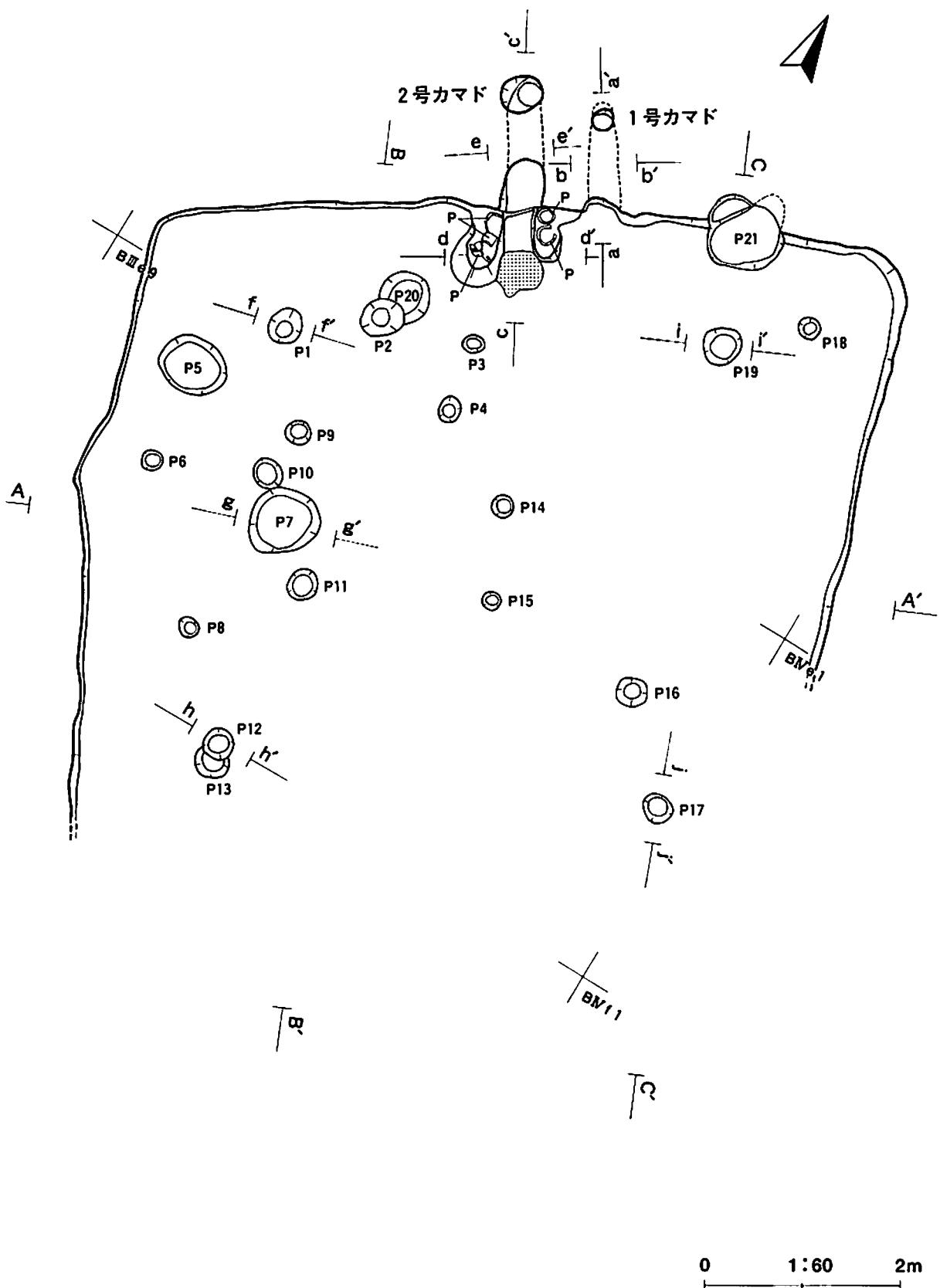
番号	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16
径	27×32	22×23	37×40	28×34	28×32	24×26	28×31	29×31
深さ	23.1	8.3	40.5	39.9	14.3	9.9	17.2	12

番号	P 17	P 18	P 19	P 20	P 21
径	21×24	17×19	48×-	34×-	78×80
深さ	11.3	10	10.7	27.7	23

＜カマド＞ 作り替えである。旧カマドを1号カマド、新カマドを2号カマドとする。

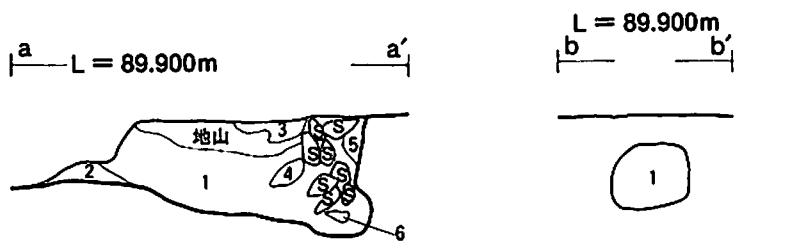
〔1号カマド〕 北西壁中央部に設置されている。本体は残存せず、削り抜き式の煙道部が残っているのみである。煙道は断面形が楕円形で、長さは70cmあり、緩やかに下がりながら煙出部へ続いている。煙出部は円形の土坑状で、深さは47cmあり、底面は煙道底面より7cmほど低くなっている。

〔2号カマド〕 北西壁中央部、1号カマドの左側に設置されている。本体は残存せず、袖部の一部が残っている。芯材として土師器甕を使用し、それを粘土質シルトで覆って構築されている。なお、断面観察から、地山に黒褐色土と黄褐色土の混土を貼り、その上にカマド本体を構築した様子がうかがえる。燃焼部の焼土は径47×48cmの不整形で、厚さは最大で5cmあり、よく焼成している。煙道部は削り抜き式である。煙道は

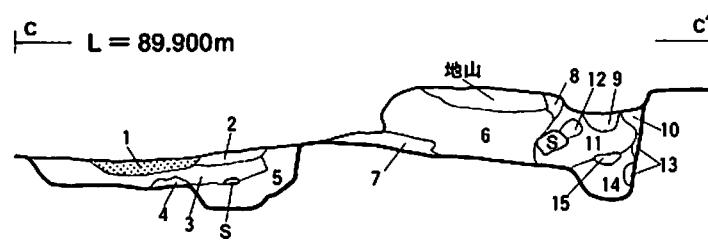


第18図 10号住居跡（1）





層位 色調 上性		
1	10YR2/3	黒褐色 シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(2%) 燃土粒含(3%) 炭化物含(2%)
2	10YR2/2	黒褐色 シルト 燃土粒含(10%) 炭化物含(5%)
3	10YR3/1	黒褐色 シルト
4	10YR4/4	褐色 粘土質シルト 黑褐色土(10YR2/2)含(5%)
5	10YR5/6	黄褐色 粘土質シルト 黑褐色土(10YR2/2)含(1%)
6	5YR4/8	赤褐色 シルト



層位 色調 上性		
1	5YR4/8	赤褐色 粘土質シルト 燃土
2	10YR2/3	黒褐色 シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(5%) 燃土粒含(3%) 炭化物含(1%)
3	黒褐色土(10YR2/2)と黒褐色土(10YR3/2)と黄褐色土(10YR5/6)の混土	
4	10YR5/6	黄褐色 粘土質シルト 地山
5	10YR3/3	暗褐色 シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(10%)
6	10YR2/3	黒褐色 シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(3%)
7	10YR3/2	黒褐色 シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(10%) 炭化物含(1%未満)
8	10YR2/2	黒褐色 シルト 燃土粒含(1%)
9	10YR4/6	褐色 砂質シルト しまりなし 炭化物含(1~2%)
10	黒褐色土(10YR2/3)と黄褐色土(10YR5/6)の混土	
11	10YR2/3	黒褐色 シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(1%) 炭化物含(1%)
12	10YR4/4	褐色 粘土質シルト
13	10YR5/6	黄褐色 粘土質シルト 黑褐色土(10YR2/2)含(2~3%)
14	10YR2/3	黒褐色 シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(5%)
15	5 YR5/8	明赤褐色 砂質シルト (燃土塊)
16	赤褐色土(5YR4/8)と黄褐色土(10YR5/6)の混土	
17	10YR4/4	褐色 粘土質シルト
18	黒褐色土(10YR2/2)と黄褐色土(10YR5/6)の混土	
19	黄褐色土(10YR5/6)と暗褐色土(7.5YR3/3)の混土	炭化物含(1%) 燃土粒含(2%)
20	10YR5/6	黄褐色 粘土質シルト
21	5YR4/6	赤褐色 シルト
22	10YR2/2	黒褐色 シルト 黄褐色土(10YR5/6)含(2%)
23	黄褐色土(10YR5/6)と暗褐色土(7.5YR3/3)の混土	燃土粒含(5%)

0 1:30 1m

第20図 10号住居跡（3）

断面形が逆台形状で、長さは70cmあり、緩やかに下りながら煙出部へ続いている。煙出部は円形の土坑状で、深さは42cmあり、底面は煙道部底面より13cmほど低くなっている。

### 遺物（第39～43図、写真図版34～40）

土器110～151が出土している。110～112は土師器坏で、110・111はロクロ不使用、112はロクロ使用である。110は外傾して立ち上がっており、口縁部はやや肥厚気味である。口縁端部下1cmには小さな段を持っている。111は外傾して立ち上がっており、口縁部は外方へ折れ、口縁端部は肥厚している。底部は磨かれ平らに調整されている。110・111とも内面はミガキ後黒色処理されている。112は外傾して立ち上がっており、内面は半分が煤けている。摩耗していくのはつきりしないが、底部切り離しは回転窓切りと考えられる。

113～115はロクロ使用の須恵器坏である。いずれも外傾して立ち上がっており、113の口縁部はやや肥厚している。113は体部外面の一部が、114は口縁部外面がそれぞれ煤けている。113の底部には、「山」が墨書きされている。底部切り離しはいずれも回転窓切りである。

116～147は土師器兜である。116～121は底部から口縁部である。116は底部から外傾して立ち上がり、その後内湾気味になっている。体部中部に体部最大径を持っている。口縁部は外反気味で短く、口唇部は丸みを持っている。外面は底部から体部上半部にかけて煤けている。底部には木葉痕が残っている。117は底部から僅かに外傾して立ち上がっており、体部上半部に体部最大径を持っている。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁端部は細くなっている。外面全体と内面上半部から口縁部にかけて煤けている。底部には木葉痕が残っている。118は底部から外傾して立ち上がり、体部中部から上半部にかけて体部最大径を持ち、頸部には段を持っている。胎土には径1～5mmの砂粒が含まれている。内面全体と外面の一部は煤け、内面には炭化物が少量付着している。119・120は底部から外傾して立ち上がり、体部上半部に体部最大径を持っている。口縁部は短く、頸部から大きく外反している。内外両面とも煤けている。底部には木葉痕が残っている。121は体部が外傾して立ち上がっており、体部中部に体部最大径を持ち、口縁部は頸部から大きく外反している。内外両面とも一部煤け、外面には炭化物が少量付着している。

122～134は体部下端部から口縁部である。122は体部が大きく膨らんでおり、頸部には段を持っている。口縁部は頸部から外反し、口縁端部はやや肥厚し、口唇部は平らに調整されている。内面下端部は一部煤けている。123は体部最上部に体部最大径を持っている。口縁部は頸部から大きく外傾し、口縁端部はななめ上方へ引き出され、口唇部は小さな丸みを持っている。内外両面とも煤け、下端部には炭化物が少量付着している。124は体部最上部に体部最大径を持っており、頸部には小さな段を持っている。口縁部は頸部から大きく外傾し、口縁端部は僅かにななめ下方へ引き出されている。胎土には径1～2mmの砂粒を多量に含んでいる。外面は一部煤けている。125は頸部に小さな段を持ち、口縁部は大きく外傾している。口縁端部は僅かに肥厚し、口唇部は円状になっている。内外両面とも煤けている。126は頸部に小さな段を持ち、口縁部は大きく外傾し、口唇部は小さな丸みを持っている。127は体部最上部に体部最大径を持ち、口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部はやや肥厚している。内外両面とも一部煤け、外面は体部上部から口縁部にかけて炭化物が少量付着している。128は体部上半部に体部最大径を持つと考えられる。口縁部は外傾し、口縁端部は肥厚している。内外両面とも一部煤けている。129は体部上半部に体部最大径を持ち、口縁部は外傾している。内外両面とも煤け、外面体部下端部には炭化物が少量付着している。130は体部上半部に体部最大径を持っている。口縁部は大きく外傾し、口縁端部は僅かに肥厚している。外面体部中部には炭化物が付着している。131は口縁部が外反気味に立ち上がり、口縁端部は細くなりながら大きく外反している。胎土には径1～3mmの砂粒を多量に含んでいる。内外両面とも一部煤けている。132は頸部に輪積痕が残り、口縁部は肥厚し、口縁端部は僅かにななめ下方に引き出されている。内外両面とも煤け、内面には炭化物が少量付着している。133は口縁部が短く、外方へ大きく折れている。内外両面に炭化物が付着している。134は口縁

部が外傾し、口縁端部は細くなっている。

135～147は底部～体部下端部である。いずれも外傾または内湾して立ち上がっている。135・138・141・142・143・144・147は底部の周辺が突出している。135～140、146は底部に木葉痕が残り、142・143は一部半らに調整されている。

148～150は土師器の鉢形上器である。いずれもロクロ不使用で、内面はミガキ後黒色処理されている。口縁部はいずれも外傾し、148の口唇部は凹状になっており、底部には木葉痕が残っている。

151はロクロ不使用の土師器の瓶である。径5mmの穴が底部に21個、体部下端部に1個穿たれている。体部は一部煤け、底部には木葉痕が残っている。

#### 時期

出土遺物から、平安時代前半と考えられる。

### 11号住居跡

#### 遺構（第21図、写真図版15・16）

＜位置・検出状況＞ 調査区域西部グリッドB IV e 8・e 9にまたがって位置する。IV層面で褐色土粒を含む黒褐色土の広がりとして検出された。遺構の北側半分は調査区域外である。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形と推定され、規模は(2.57)×3.45mである。

＜埋土＞ 6層に細分される。褐色土を含んだ黒褐色土が主体で、全体に堅く、よく締まっている。

＜床面＞ 黄褐色土である。少し凹凸があるが、ほぼ平坦でよく締まっている。

＜壁＞ 外傾しながら立ち上がっている。壁高は1.8～18.8cmで、東壁が最も高い。

＜柱穴・土坑＞ P 1が検出された。平面形は楕円形で、規模は径45×53cm、深さは15cmである。

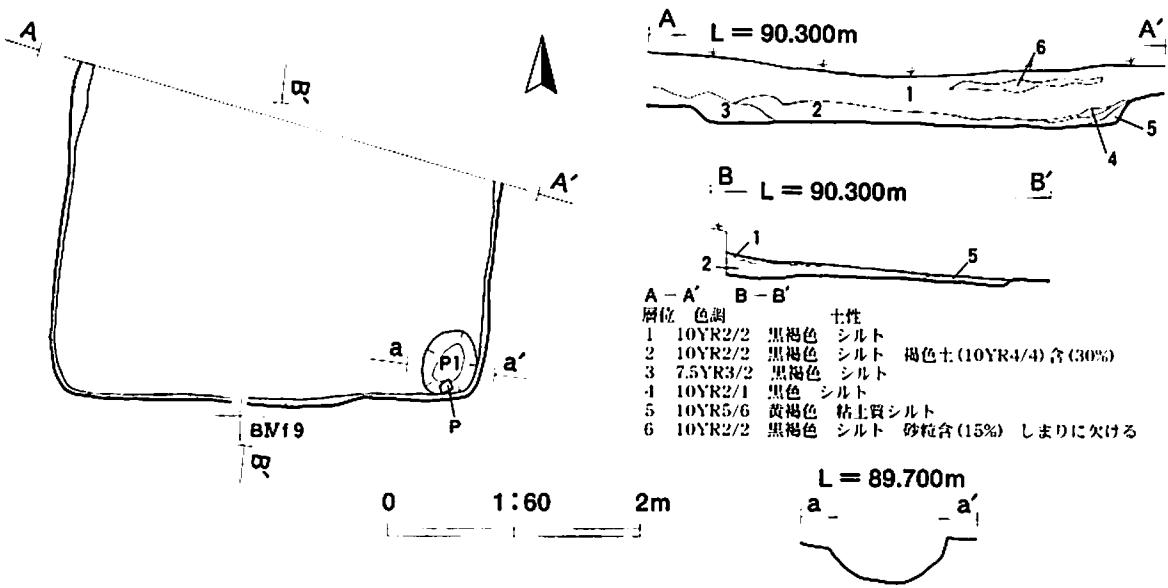
＜カマド＞ 北壁（調査区域外）に設置されている可能性がある。

#### 遺物（第44図、写真図版40）

土器152が床上から出土している。ロクロ使用の土師器壺である。体部はやや内湾気味に立ち上がっており、口縁部は僅かに外方へ折れ、口縁端部はやや肥厚気味である。内面はミガキ後黒色処理され、底部切り離しは回転糸切りである。体部中部には正位で「勝」と墨書きされている。

#### 時期

他の住居跡と検出状況が同じことから、平安時代前半と考えられる。



第21図 11号住居跡

### 12号住居跡

遺構（第22図、写真図版16）

＜位置・検出状況＞ 調査区域東部グリッドB IV d 3に位置する。IV層面で暗褐色土粒を含む黒褐色土の広がりとして検出された。遺構の北側半分は調査区域外である。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形＞ 平面形は隅丸方形と推定され、規模は  $(1.72) \times 3.65\text{m}$  である。

＜埋土＞ 13層に細分される。黒色～黒褐色土が主体で、全体に堅く締まりがある。1層には十和田a降下火山灰が混入している。

＜壁＞ 南壁は外傾しながら立ち上がっており、壁高は16～24.7cmである。東壁と西壁は搅乱を受けており、残存状態が良くない。

＜床面＞ 黄褐色土である。凹凸があり小礫を含んでいる。東壁際は搅乱を受けて済んでいる。

＜柱穴・上坑＞ 検出されなかった。

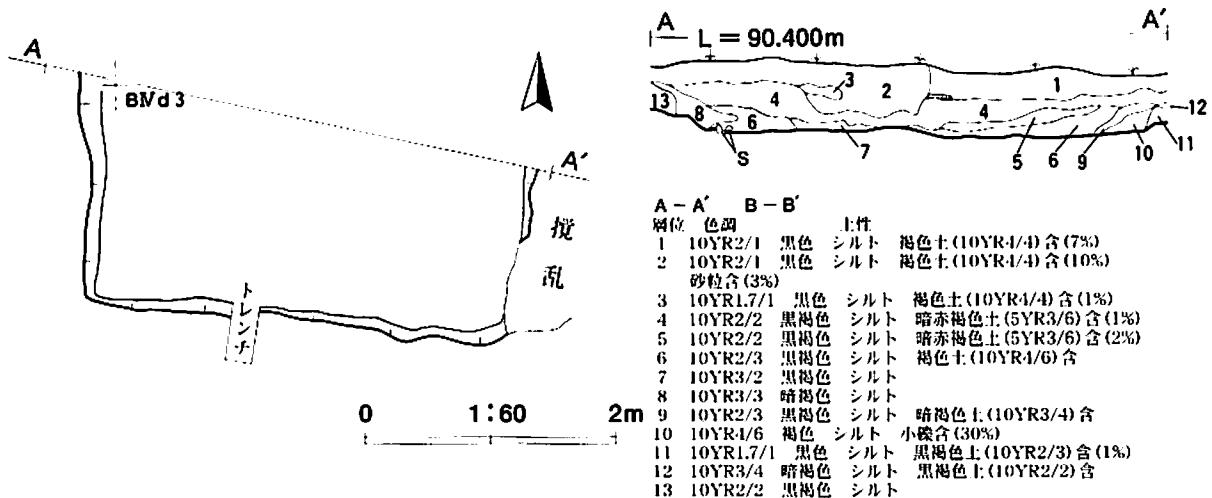
＜カマド＞ 北壁（調査区域外）に設置されている可能性がある。

遺物（第44図、写真図版40）

土器153が出土している。口クロ不使用の土師器壊である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はほぼ直立している。底部はやや上げ底風である。

### 時期

出土遺物から、平安時代前半と考えられる。



第22図 12号住居跡

### 13号住居跡

#### 遺構（第23図、写真図版17）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部B II b 7・b 8・c 7・c 8にまたがって位置する。IV層面で褐色土粒を含む黒褐色土の広がりとして検出された。削平を受けており、壁の一部と掘方のみの検出である。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 削平されており全体形は不明であるが、1辺5mの隅丸方形と推定される。

＜埋土＞ 掘方埋土を岡化したのは一部であるが、黄褐色土粒を含む黒褐色土で、全体によく締まり、粘性がある。

＜壁＞ 西壁と北壁の一部が残存するのみである。掘方面からの高さは西壁で最大12.9cm、北壁で12.3cmである。

＜床面＞ 黄褐色土である。凹凸があり、堅く締まっている。

＜柱穴・土坑＞ P 1からP 8まで8個検出された。平面形は円形や楕円形で、規模は径20×21cm～55×98cm、深さ11.7～38.2cmである。柱穴配置からP 3・P 4・P 6・P 7が主柱穴と考えられる。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

#### 柱穴計測表

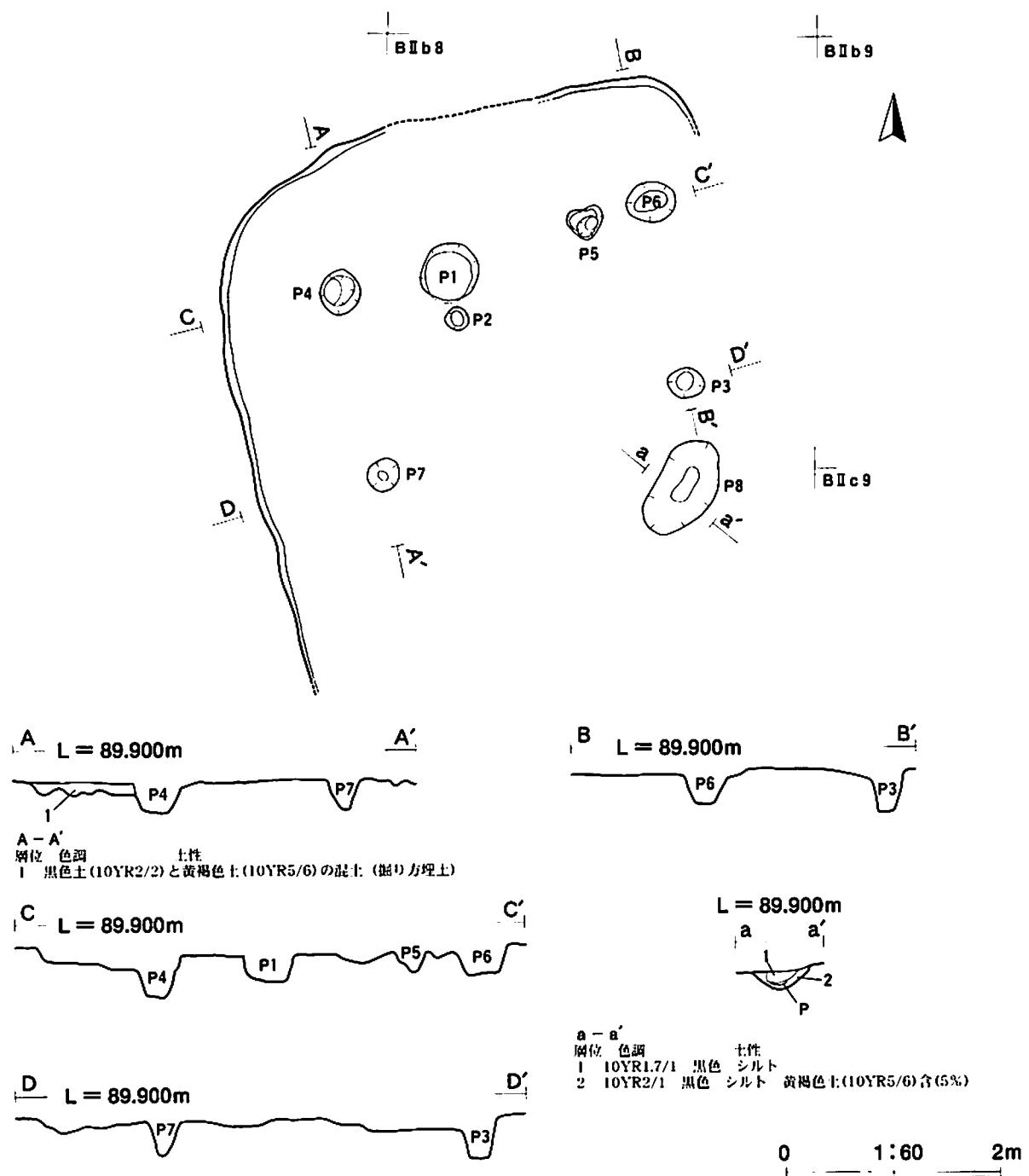
単位：cm

番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8
径	52×55	20×21	27×35	37×42	40×55	38×46	30×32	55×98
深さ	28.5	11.7	38.2	25.8	20.6	31.3	30.5	32.2

＜カマド＞ 残存していない。

#### 遺物（第44図、写真図版40）

土器154・155が出土している。いずれもP 8からの出土で、口クロ使用の土師器坏である。154は底部が高さ5mm位の高台状になっており、体部はやや内湾気味に立ち上がっている。口縁部は僅かに肥厚し、口唇部は丸みを持っている。内面はミガキ後黒色処理されており、底部切り離しは回転糸切りである。口径に比べ



第23図 13号住居跡

底径が小さい。155は大きく外傾して立ち上がっており、口唇部は小さな丸みを持っている。底部切り離しは回転糸切りである。

#### 時期

他の住居跡と同じ平安時代前半と考えられる。

## (2) 住居状遺構

遺構（第24図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB III c 7・c 8・d 7・d 8にまたがって位置する。IV層面で黄褐色土粒を含む黒色土の広がりとして検出された。南西部は攪乱を受けており残存しない。

＜重複関係＞ 遺構の中央部分を南北に走る3号溝によって切られている。又、床面下から1号陥し穴状遺構が検出されている。

＜平面形＞ 平面形は隅丸方形で、規模は3.0×3.15mと推定される。

＜埋土＞ 7層に細分される。黄褐色土粒を含む黒色土が主体である。粘性はあるが、やや締まりに欠ける。

＜壁＞ 外傾して立ち上がっている。壁高は2.9~18.6cmで、東壁と西壁が高い。

＜床面＞ 黄褐色土である。凹凸が多いが、よく締まっている。

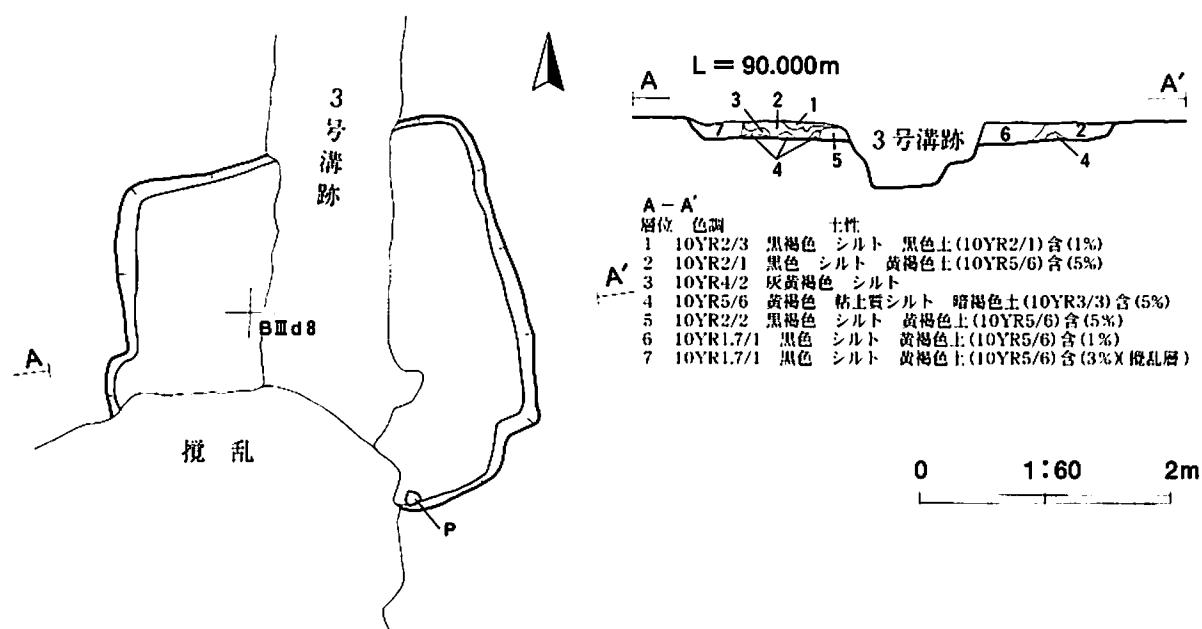
＜柱穴・土坑＞ 検出されなかった。

遺物

出土していない。

時期

検出状況から平安時代前半と考えられる。



第24図 住居状遺構

### (3) 焼土遺構

#### 1号焼土（第25図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB II b 8に位置する。IV層面で検出された。植生根により一部搅乱を受けている。

＜平面形・規模＞ 平面形は径52×57cmの不整形である。焼土は明赤褐色で良く焼成しており、厚さは最大で6cmである。

＜出土遺物＞ なし。

＜時期＞ 不明である。

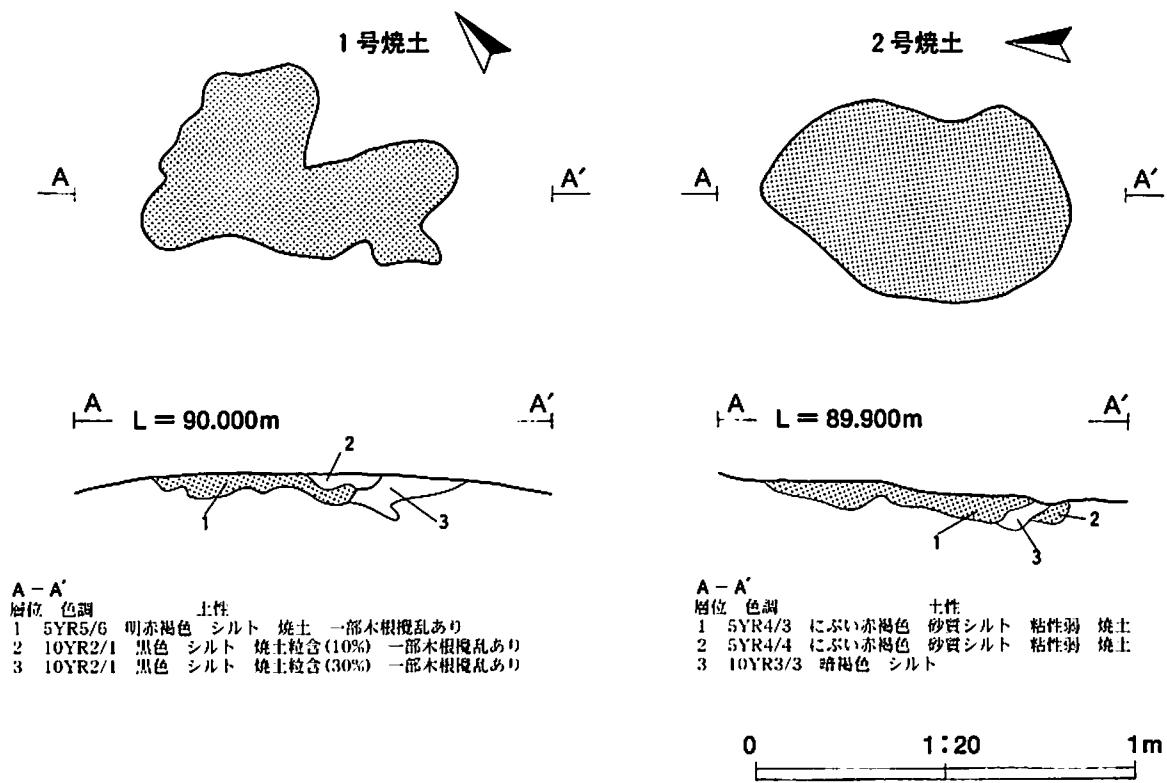
#### 2号焼土（第25図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞ 調査区域東部グリッドB IV d 3に位置する。IV層面で検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は径51×82cmの不整形である。焼土はにぶい赤褐色で良く焼成しており、厚さは最大で6cmである。

＜出土遺物＞ なし。

＜時期＞ 不明である。



第25図 1号・2号焼土遺構

#### (4) 溝跡

3条検出された。調査区域中央部から東部にかけての検出である。

##### 1号溝跡

遺構（第26図、写真図版19）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部グリッドB III a 0・b 0・c 0・d 0に位置する。IV層面で黄褐色土粒を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜規模・平面形＞ 北端のあるグリッドB III a 0から南へ延び、南端はグリッドB III d 0で搅乱のため残存しない。全長は約14mで、上幅35~50cm、下幅16~30cm、深さは10.3~24.4cmである。本溝跡は北端が調査区域外へ延びている。

＜断面形・壁・底面＞ 断面形は逆台形状で、壁は緩く外傾しながら立ち上がっている。底面は黄褐色土で、凹凸が多いが堅く締まっている。

＜埋土＞ 上部は黒色土、下部は黒色土と黄褐色土の混土で、いずれも堅く締まり、粘性もある。

遺物（第44図、写真図版40）

土器156が出土している。ロクロ使用の須恵器壺である。底部から外傾して立ち上がるものと考えられる。底部切り離しは回転糸切りである。

##### 時期

平安時代の遺物が出土しているが、流入した可能性も考えられることから時期は特定できない。

##### 2号溝跡

遺構（第27図、写真図版19・20）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部南側に位置する。IV層面で黄褐色土粒を含む黒褐色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ グリッドB II e 6で4号住居跡を、グリッドB II f 8で6号住居跡を切っている。

＜規模・平面形＞ 西端のあるグリッドB II e 6から東へ延び、グリッドB II e 8で南へ向きを変え、南端のあるグリッドB II g 8に延びている。全長は約11mで、上幅30~55cm、下幅12~42cm、深さは5~16.3cmである。本溝跡は両端とも調査区域外へ延びている。

＜断面形・壁・底面＞ 断面形は逆台形状や浅皿状で、壁は外傾しながら立ち上がっている。底面は黄褐色土で、凹凸が多いが堅く締まっている。

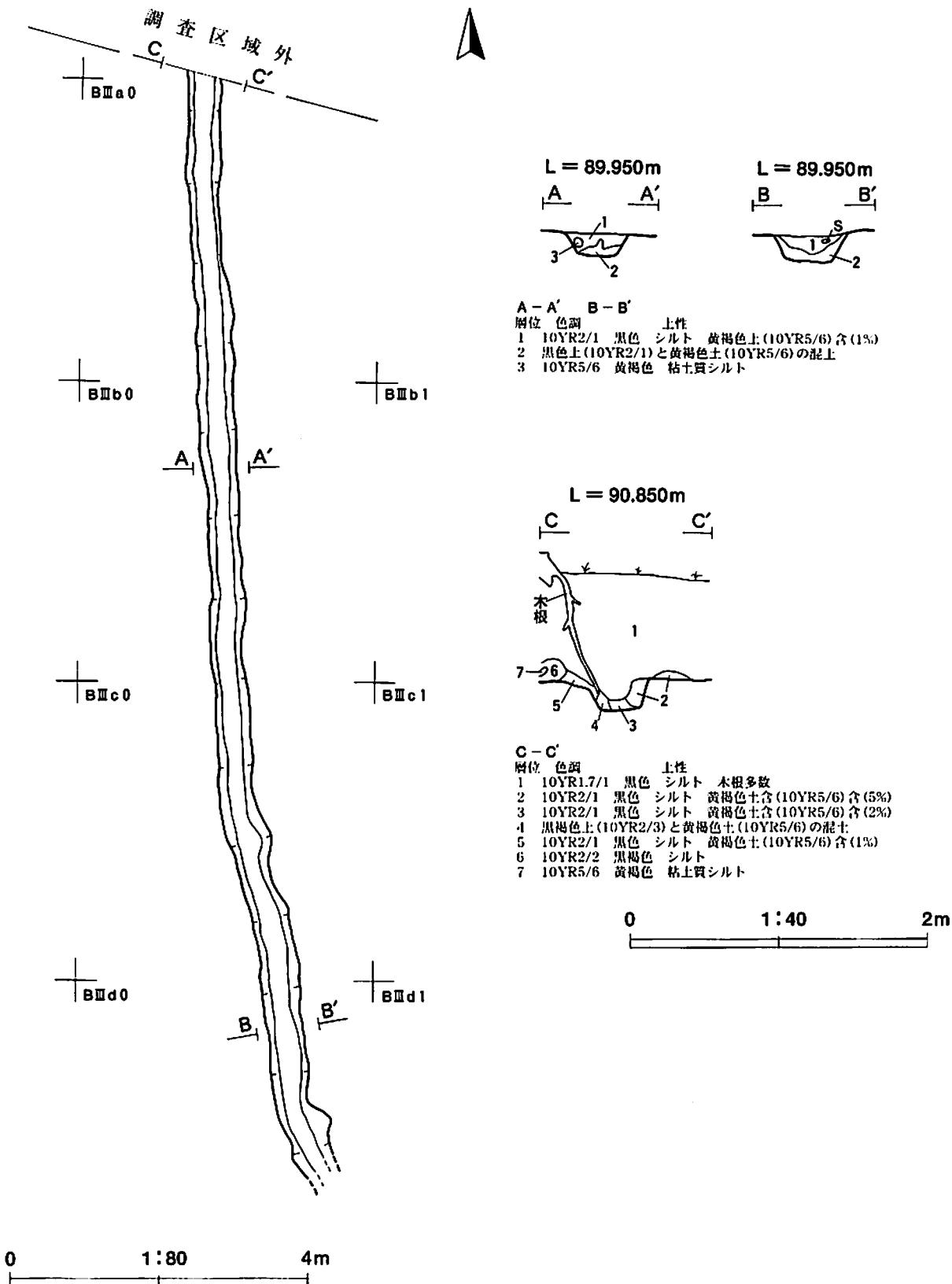
＜埋土＞ 黒褐色土が主体で、全体によく締まり粘性もある。

##### 遺物

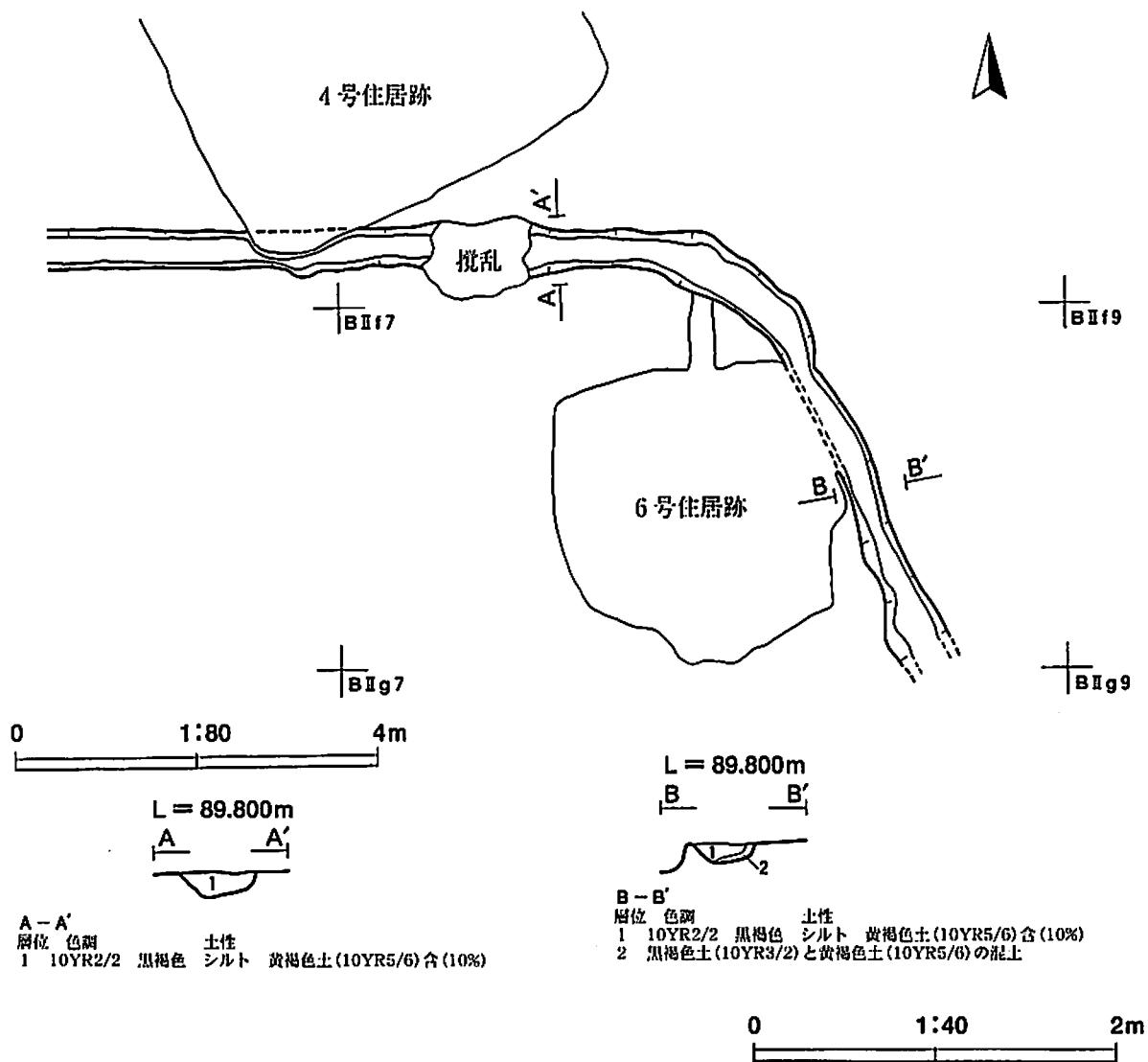
出土していない。

##### 時期

平安時代の遺物が出土しているが、流入した可能性も考えられることから時期は特定できない。



第26図 1号溝跡



第27図 2号溝跡

### 3号溝跡

遺構（第28図、写真図版20・21）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部から東部にかけて位置する。IV層面で黒色土や黒褐色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ グリッドB III d 8付近で住居状遺構と陥し穴状遺構を切っている。また、B III d 8・e 8で搅乱を受けている。更に、B IV f 0で10号住居跡を切っている。

＜規模・平面形＞ 北端のあるグリッドB III c 8から南へ延び、B III f 8で直角気味に東に向きを変えている。東端はグリッドB III f 9で切れている。全長は59mで、上幅42～122cm、下幅22～58cm、深さは6.8～74.7cmである。

＜断面形・壁・底面＞ 断面形は箱築研堀で、一部浅いU字状になっている。壁は外傾して立ち上がっていいる。底面は北から南に延びている部分は黄褐色土で、堅く締まり平坦である。西から東に延びている部分は黄褐色土で、途中から礫層になっている。

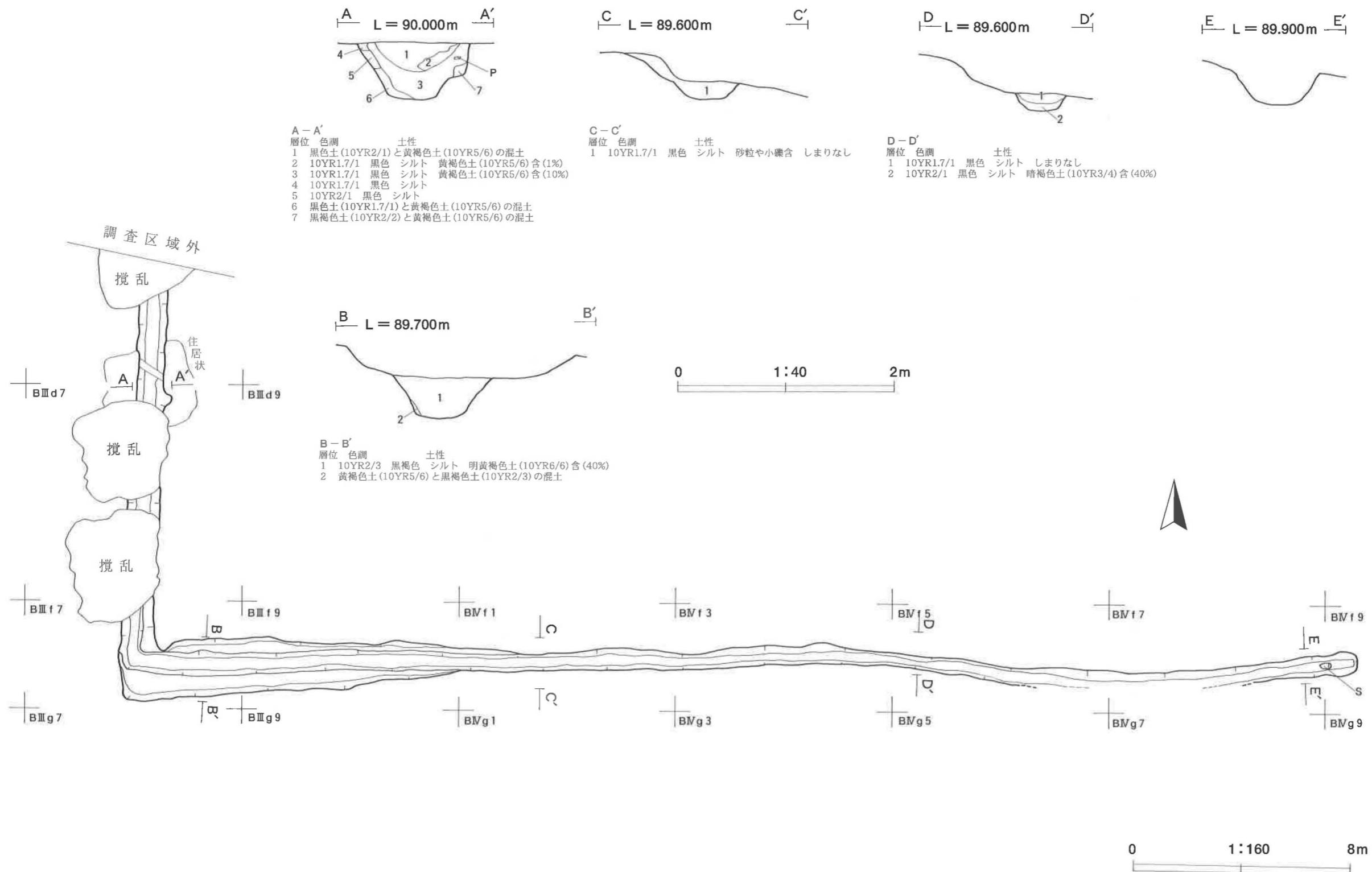
＜埋土＞ 北から南へ延びている部分は黒色土や黒褐色土で、よく締まり粘性がある。西から東へ延びている部分は小礫を含む黒色土で、粘性に欠け、締まりもない。

遺物（第44図、写真図版40）

土器157・158が出土している。157はロクロ使用の土師器壺の口縁部で、口唇部は小さな丸みを持っている。158は壺の体部で、内外面ともナデが施されている。

時期

平安時代の住居跡を切っていることから、同時代もしくはそれより新しいと考えられる。



第28図 3号溝跡

### 3. 遺構外の出土遺物

遺構外の出土遺物は、縄文土器、弥生土器、上師器、須恵器、陶器、鉄製品である。ここでは、(a) 縄文時代の土器、(b) 弥生時代の土器、(c) 古代の土器、(d) 陶器、(e) 鉄製品に分けて記述する。

#### (a) 縄文時代の土器 (第44・45図、写真図版40)

159～161の出土で、いずれも深鉢である。159は胸部が張り、内湾しながら口縁部に続いている。口縁部は波状をなし、波頭部分では渦巻き文が構成されている。底部には径  $6 \times 8$  cm の楕円形状の穿孔がある。160は体部から口縁部で、体部は内湾して頸部へ続き、口縁部は頸部から僅かに外傾して立ち上がっている。口唇部には指頭状の圧痕が残っている。地紋は L R 単節縄文横回転と斜め回転である。161は体部で、地紋は L R 単節縄文横回転である。外面は煤け、炭化物が付着している。

159は中期中葉（大木 8 b 式相当）、160・161は晩期末と考えられる。

#### (b) 弥生時代の土器 (第44図、写真図版40・41)

162～168の出土である。162～166は鉢型土器で、162～165は口縁部、166は体部である。162は外面に 2 本、内面は口縁部に沿って沈線が 1 本巡っている。163は外面に 5 本、内面に 1 本の沈線が巡り、164は 2 個一対の貼瘤を持つ変形工字文を持っている。165は頂部に刻みを有する山形突起を持ち、166は沈線が 4 本巡っており、変形工字文の一部と考えられる。

167は高杯の脚部で、下部が僅かに開き気味である。下端部に沈線が 2 本巡っており、胎土には金雲母が含まれている。

168は壺の体部である。R L 単節の原体によって縞縄文が施されている。

162～167は弥生時代初頭（一部晩期末の可能性あり）、168は弥生時代後半～末期と考えられる。

#### (c) 古代以降の土器 (第44・46・47図、写真図版41・42)

169～188の出土である。169～179はロクロ使用の上師器壺である。169は底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は僅かに肥厚している。体部には正位で「寛」と墨書きされている。内外両面とも煤けている。170は外傾して立ち上がり、口唇部は小さな丸みを持っている。体部には墨書きされているが判読できない。171は内湾気味に立ち上がっている。内面はミガキ後黒色処理され、外面も一部ミガキが施され、黒色処理は口縁部外面 1 cm に及んでいる。172は底部が 7 mm の高台状になっており、体部は外傾して立ち上がっている。口縁部は僅かに肥厚している。173は外傾して立ち上がっており、外面体部下端部から底部にかけて一部煤けている。174は口縁部が肥厚し、内面は底部と口縁部に炭化物が付着している。175は火烈を受け、一部煤けている。176は口縁部が外方へ折れ、端部は肥厚し大きな丸みを持っている。177は外面が煤け、内外両面とも炭化物が付着している。178は外傾して立ち上がっている。全体に摩耗しており、胎土には径 3 mm の砂粒を少量含んでいる。179は口縁部が僅かに肥厚し、内面はミガキ後黒色処理されている。体部には正位で「乍（本）」と刻書きされている。178・179以外は底部切り離しは回転糸切りである。

180は高台付壺の台部で、「八」の字状に開いている。

181・182はロクロ使用の小型壺である。181は外傾して立ち上がり、その後内湾して頸部に続いている。口縁部は頸部から外傾した後垂直気味に立ち上がり、口唇部は丸みを持っている。内外両面とも煤け、頸部か

ら口縁部にかけて炭化物が付着している。また、胎土には径1~2mmの砂粒を多量に含んでいる。182は底部から外傾して立ち上がっている。外面は煤け、体部下端部に炭化物が付着している。

183・184はロクロ不使用の壺である。183は底部で、繊維圧痕が見られる。184は体部で、外面に敲き目痕が、内面に当て具痕がそれぞれ残っている。

185はロクロ不使用の土師器瓶である。外傾して立ち上がっており、口縁部は僅かに外傾し、口唇部は一部平らに調整されている。口縁部下2cmに小さな段を持ち、体部下端部には径6mmの穴が穿たれている。内外両面とも一部煤け、胎土には径2mmの砂粒を含んでいる。

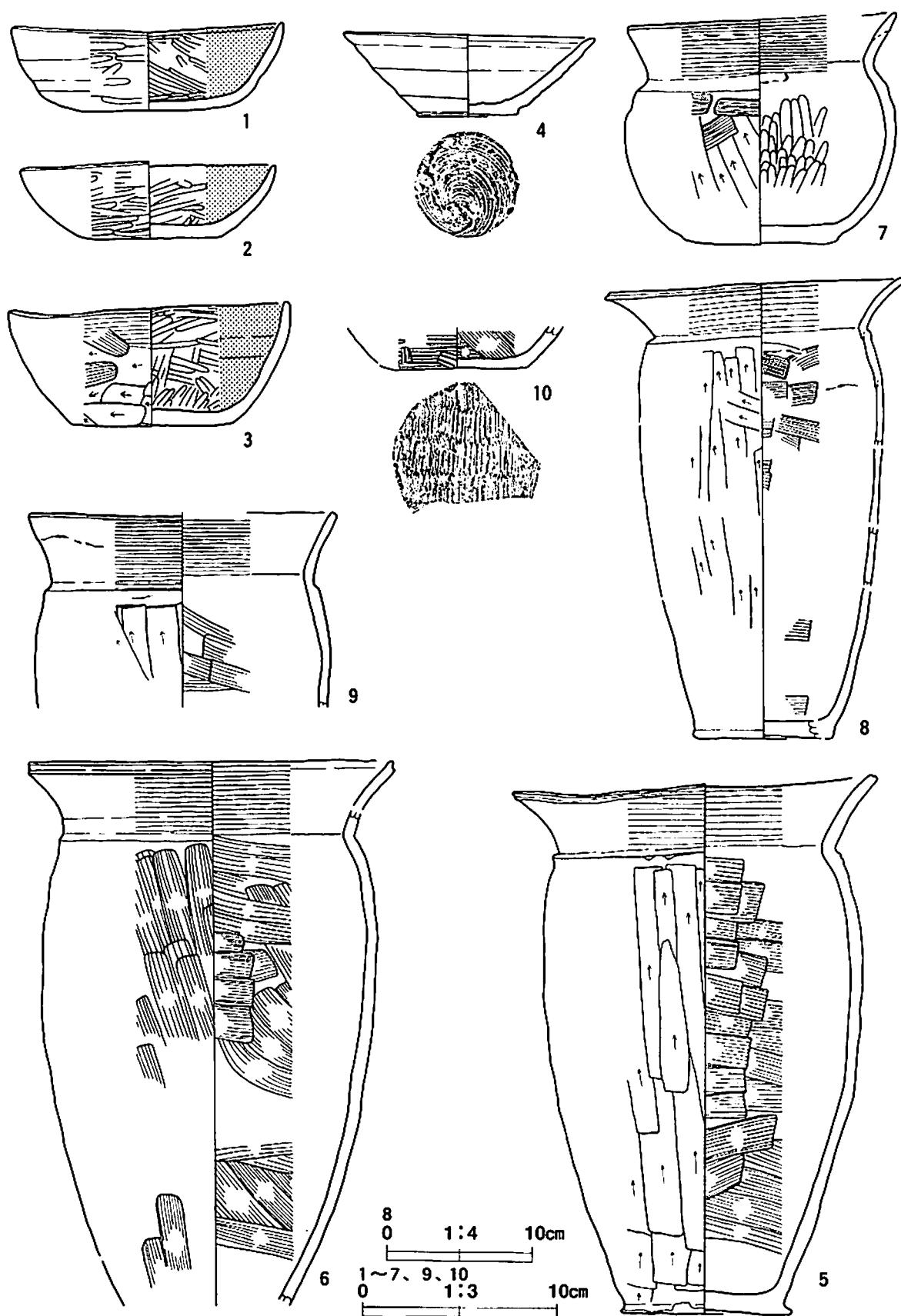
186~188は須恵器である。186はロクロ使用の壺で、外傾して立ち上がるものと考えられる。底部切り離しは回転糸切りである。187・188は壺と考えられる。187は肩部で、内外両面とも上部にロクロ痕が、内面下部には当て具痕、外面下部には敲き目痕がそれぞれ残っている。188は底部で、高台が「八」の字状に開き、底部には工具痕が残っている。

#### (d) 陶器 (第47図、写真図版42)

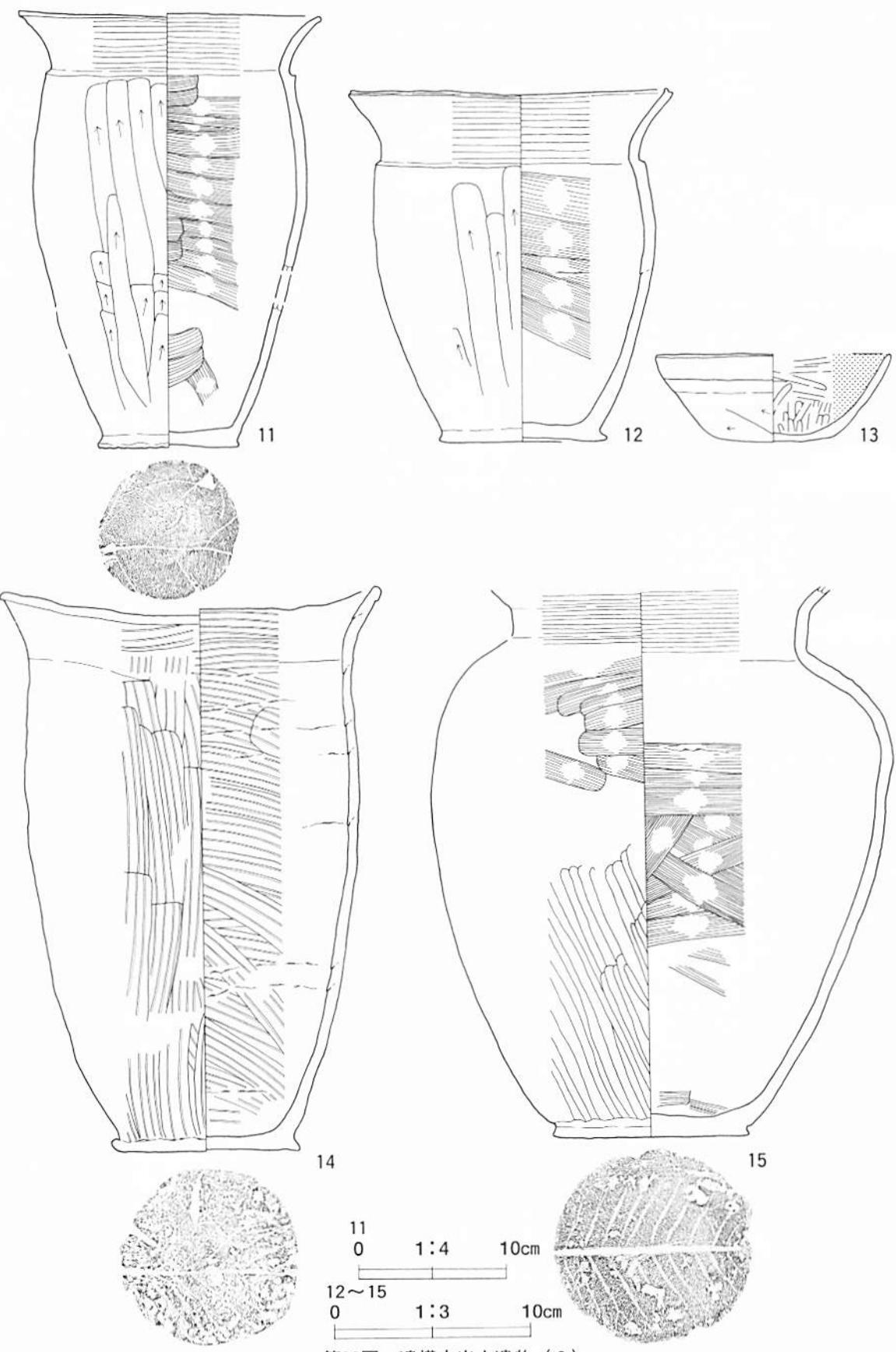
189・190は灰釉長頸瓶の肩部と底部で、接合しないが同一個体の可能性がある。189は内湾しながら頸部へ続いており、外面には灰釉が認められる。190は高台が若干「八」の字状に開き、高台の内側にはかえりがついている。体部は外傾して立ち上がっている。両者とも胎土には径1mmの砂粒が少量含まれている。内面は胎土中の鉄分が変色し、黒い斑点状になって残っている。

#### (e) 鉄製品 (第47図、写真図版42)

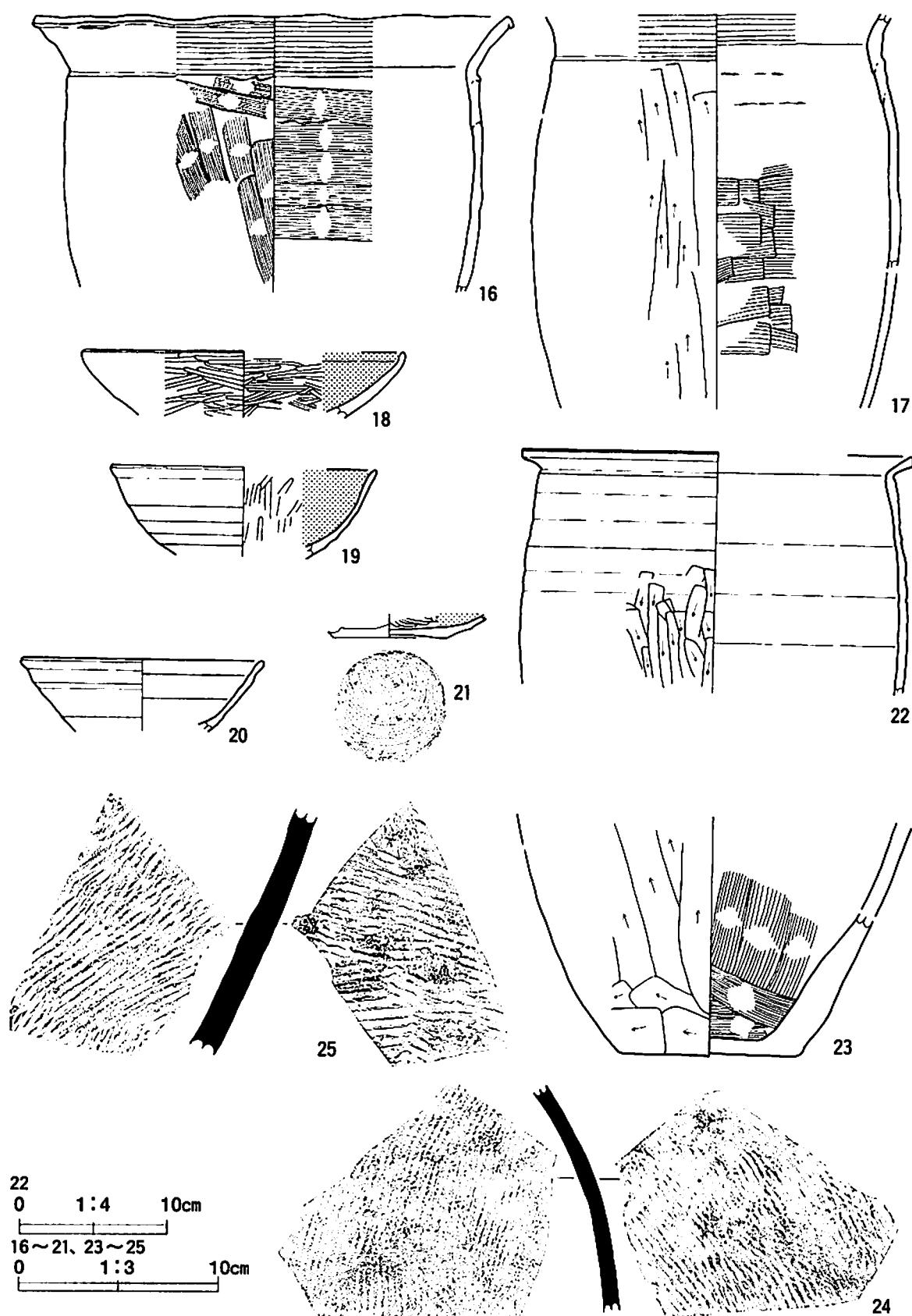
191は刀子の柄の部分と考えられる。残存長4.9cm、幅1.2cm、厚さ5mmである。断面形は台形状である。



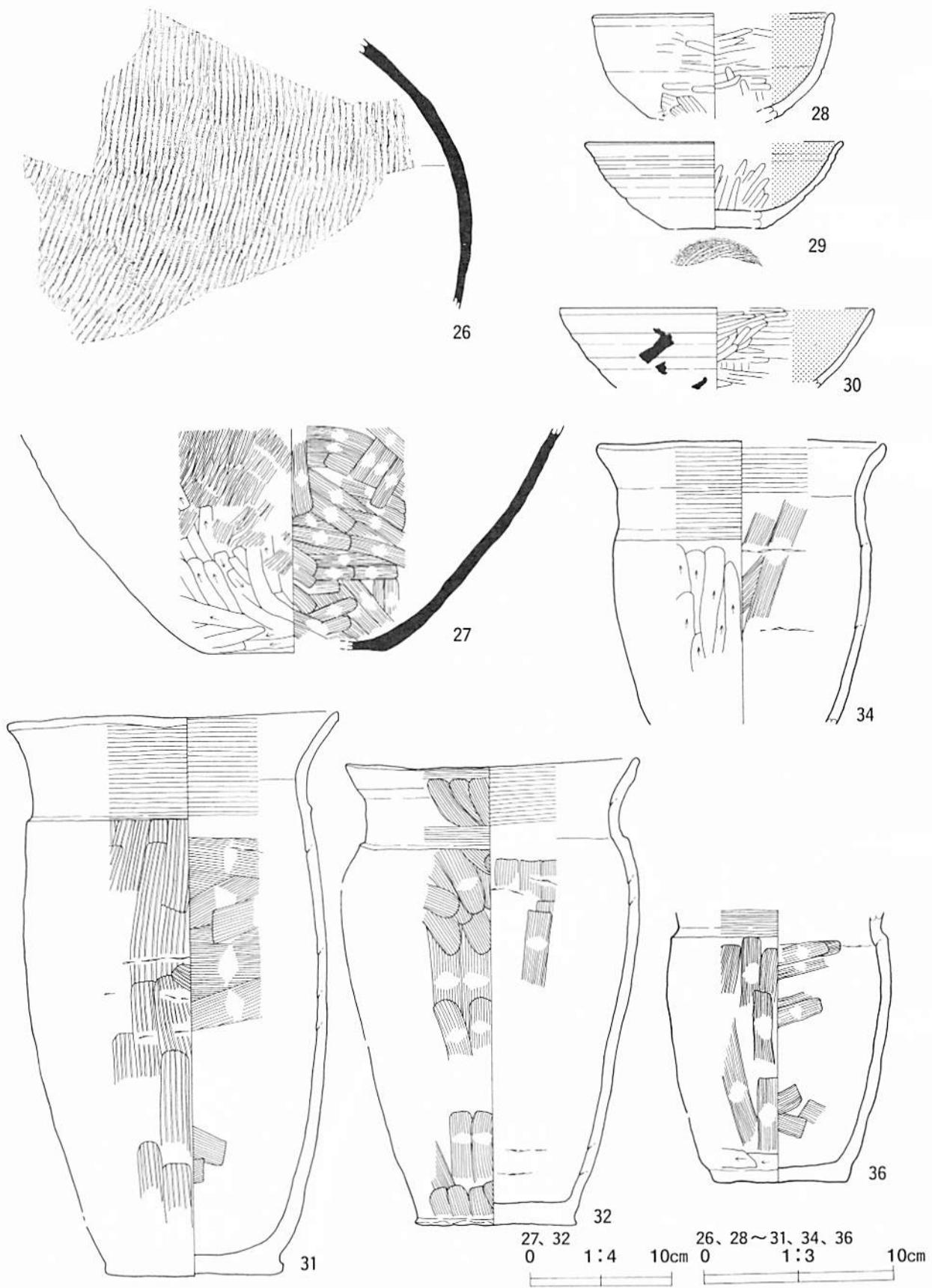
第29図 遺構内出土遺物（1）



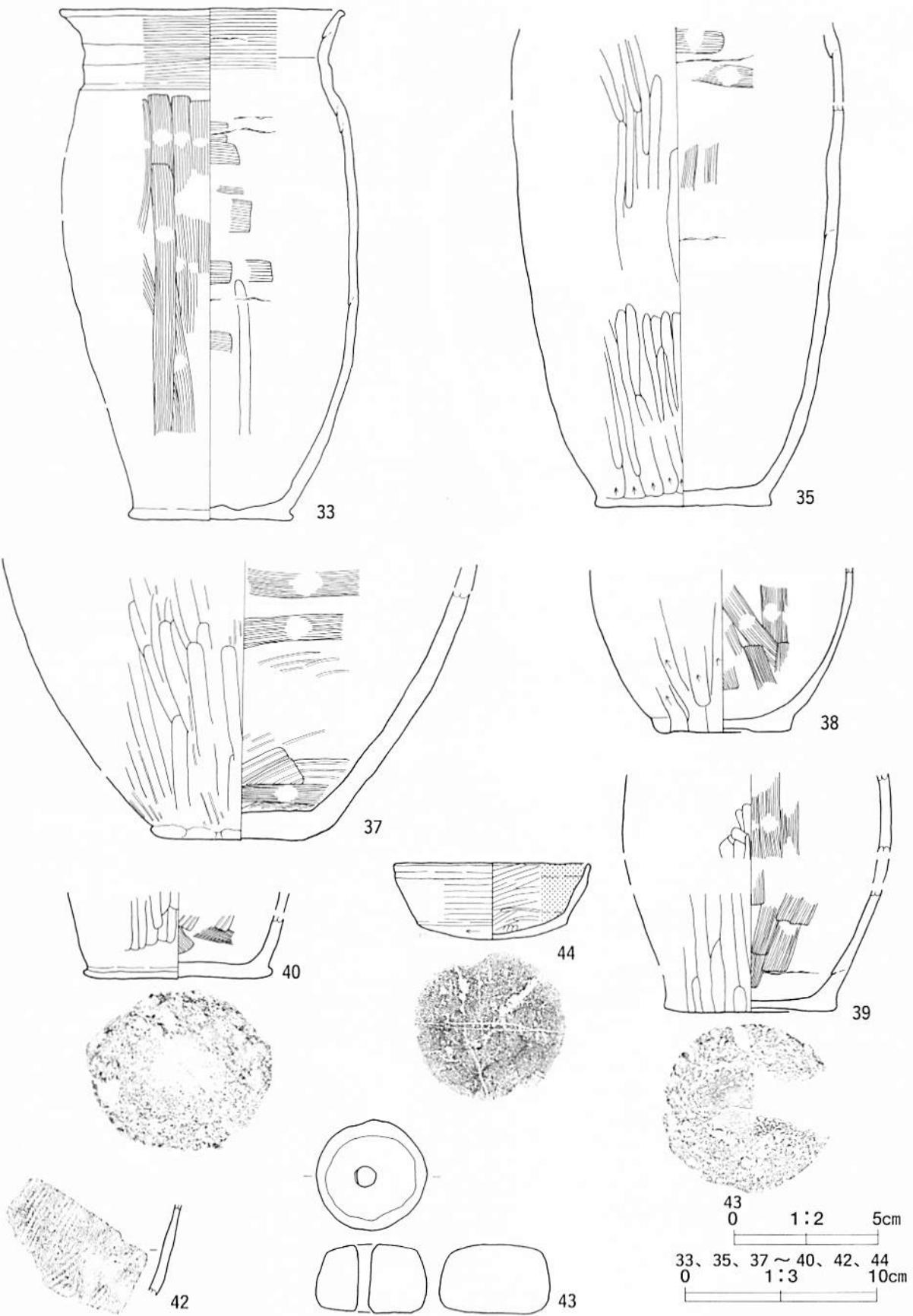
第30図 遺構内出土遺物（2）



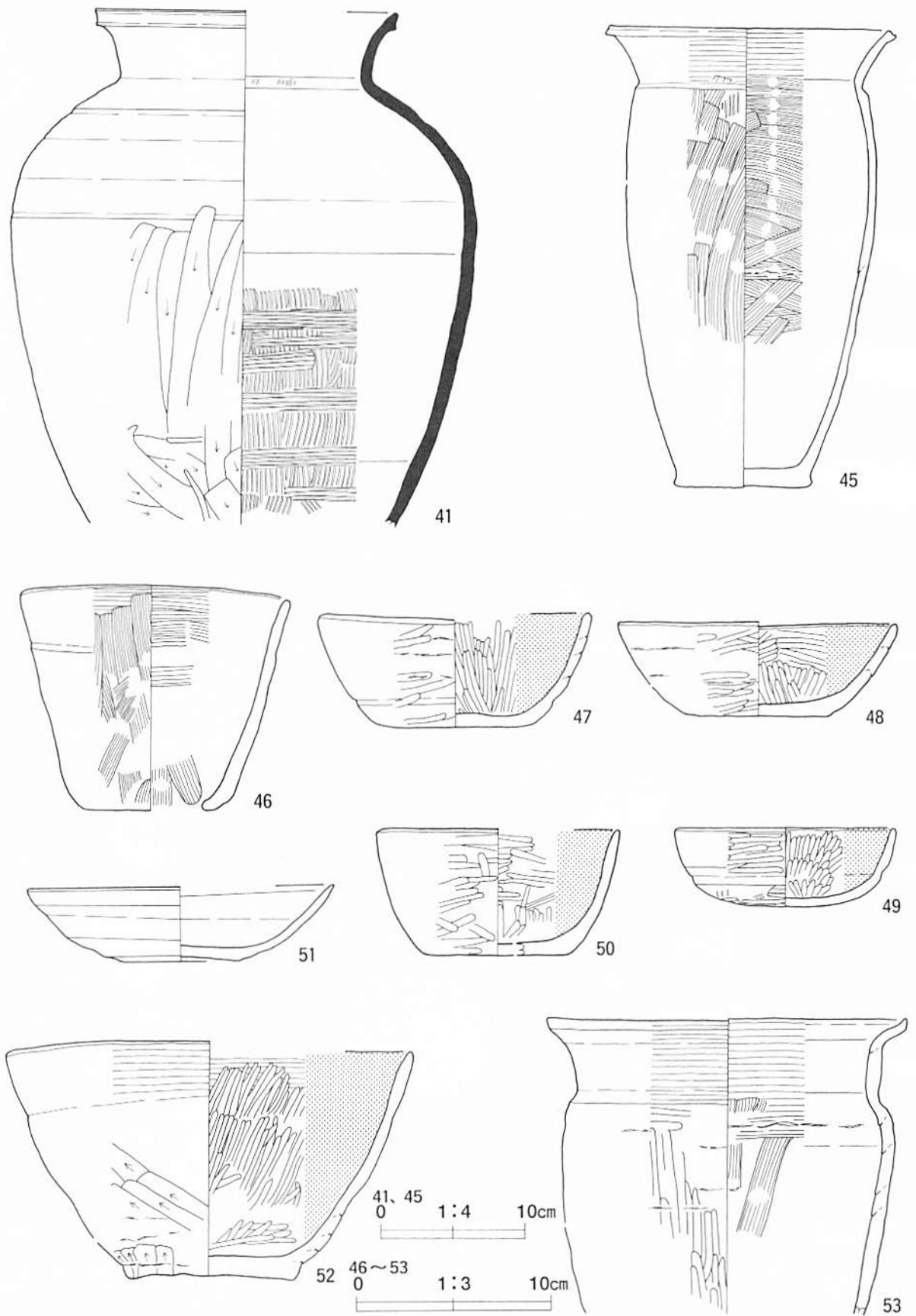
第31図 遺構内出土遺物（3）



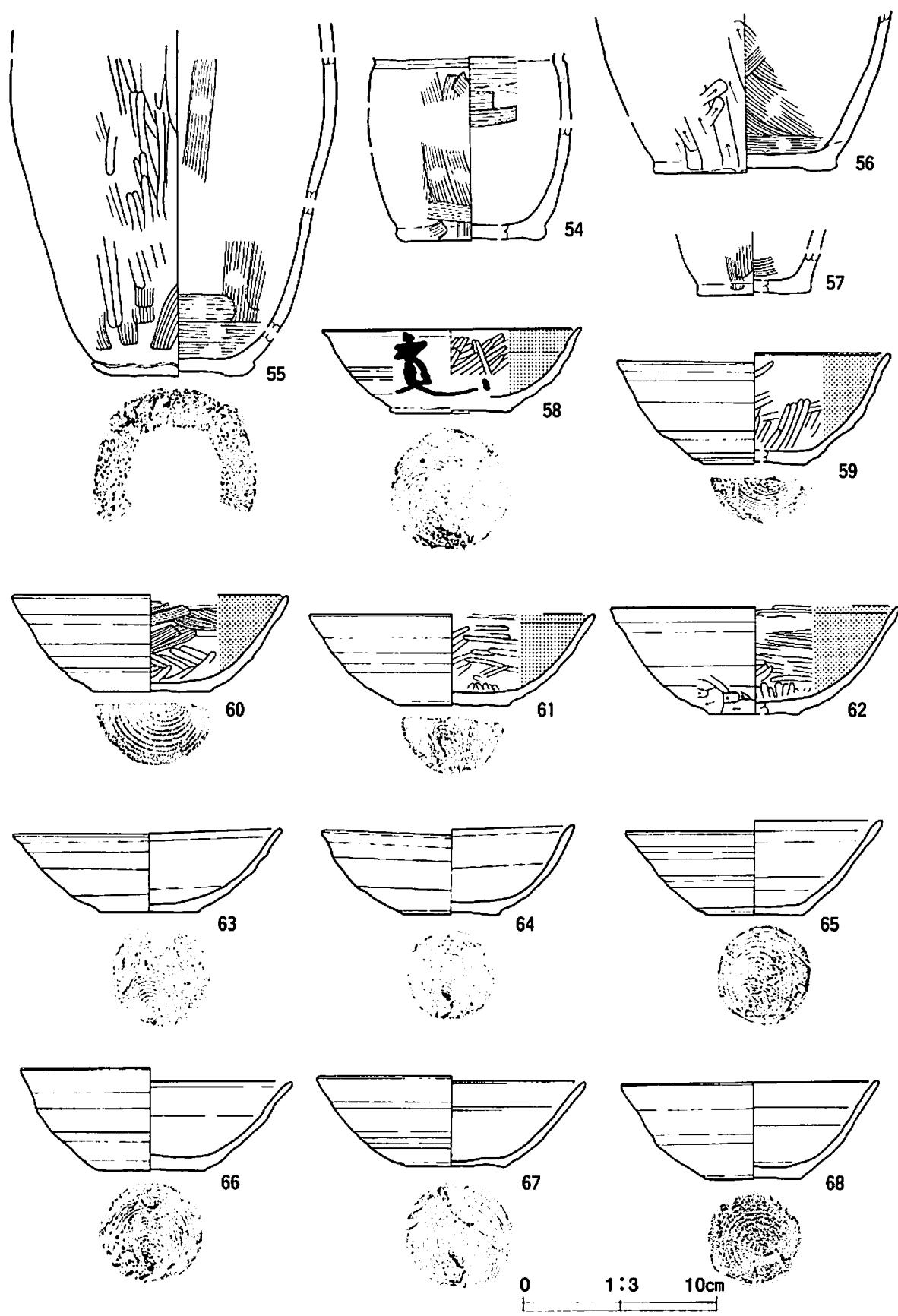
第32図 遺構内出土遺物 (4)



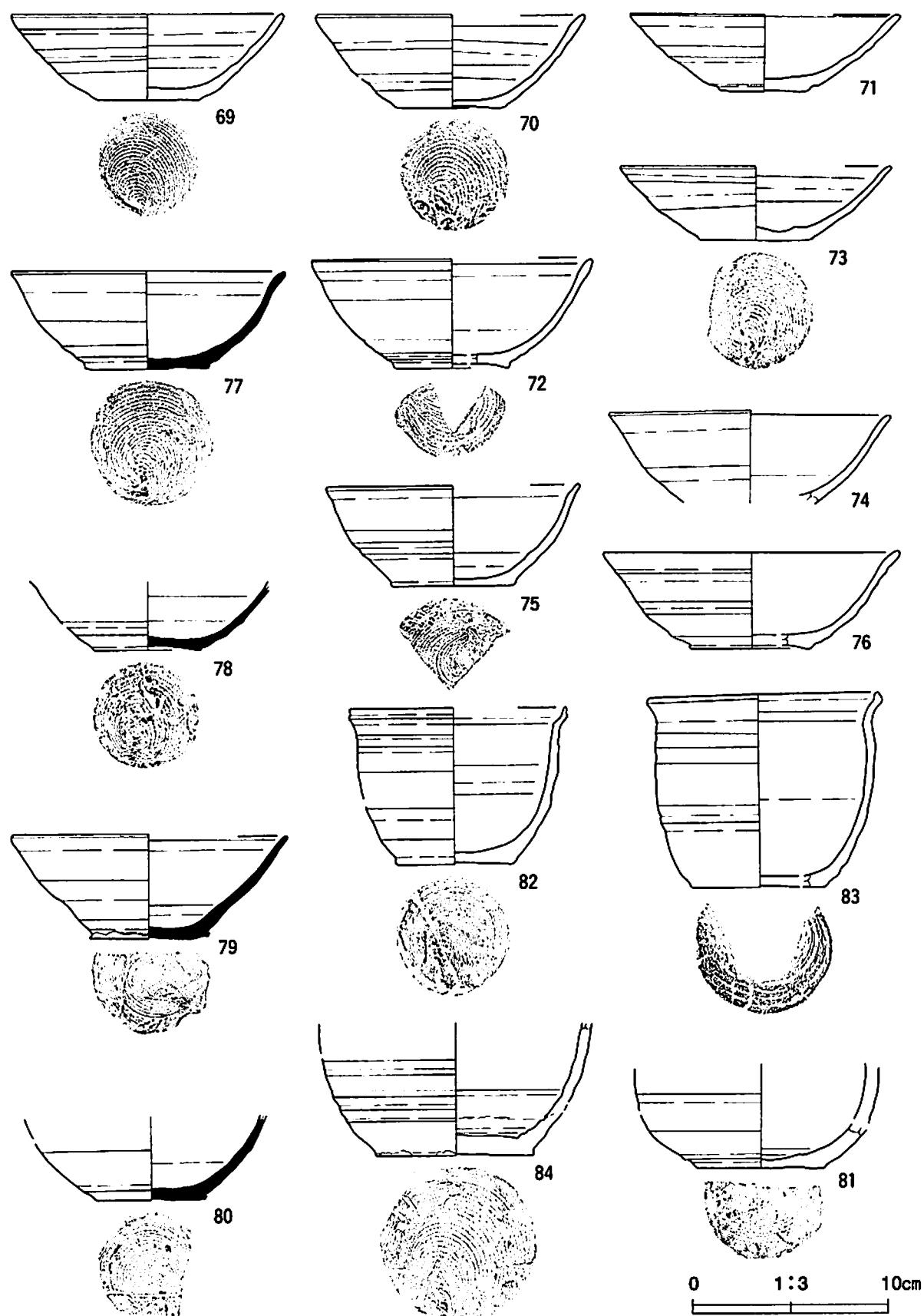
第33図 遺構内出土遺物（5）



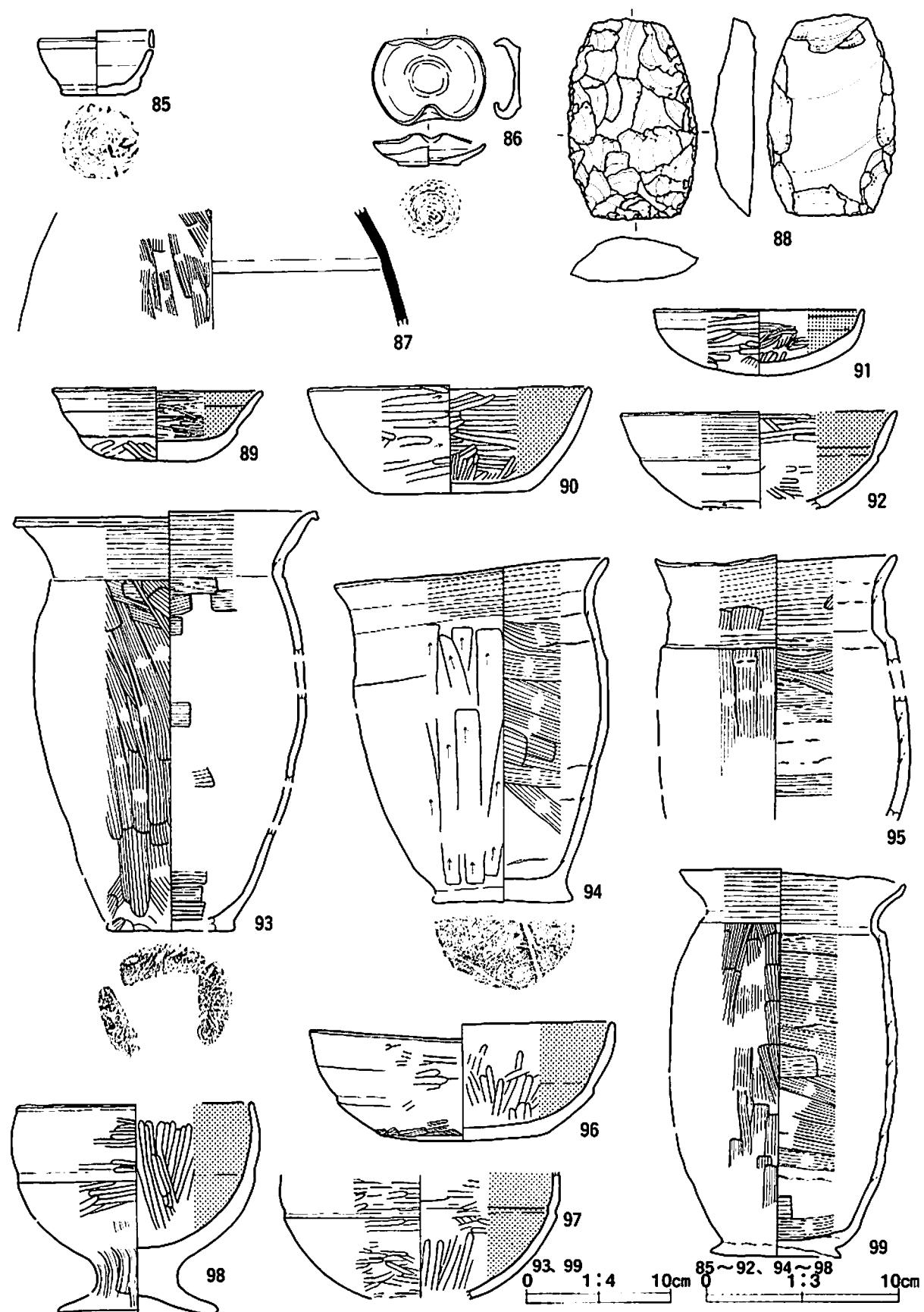
第34図 遺構内出土遺物（6）



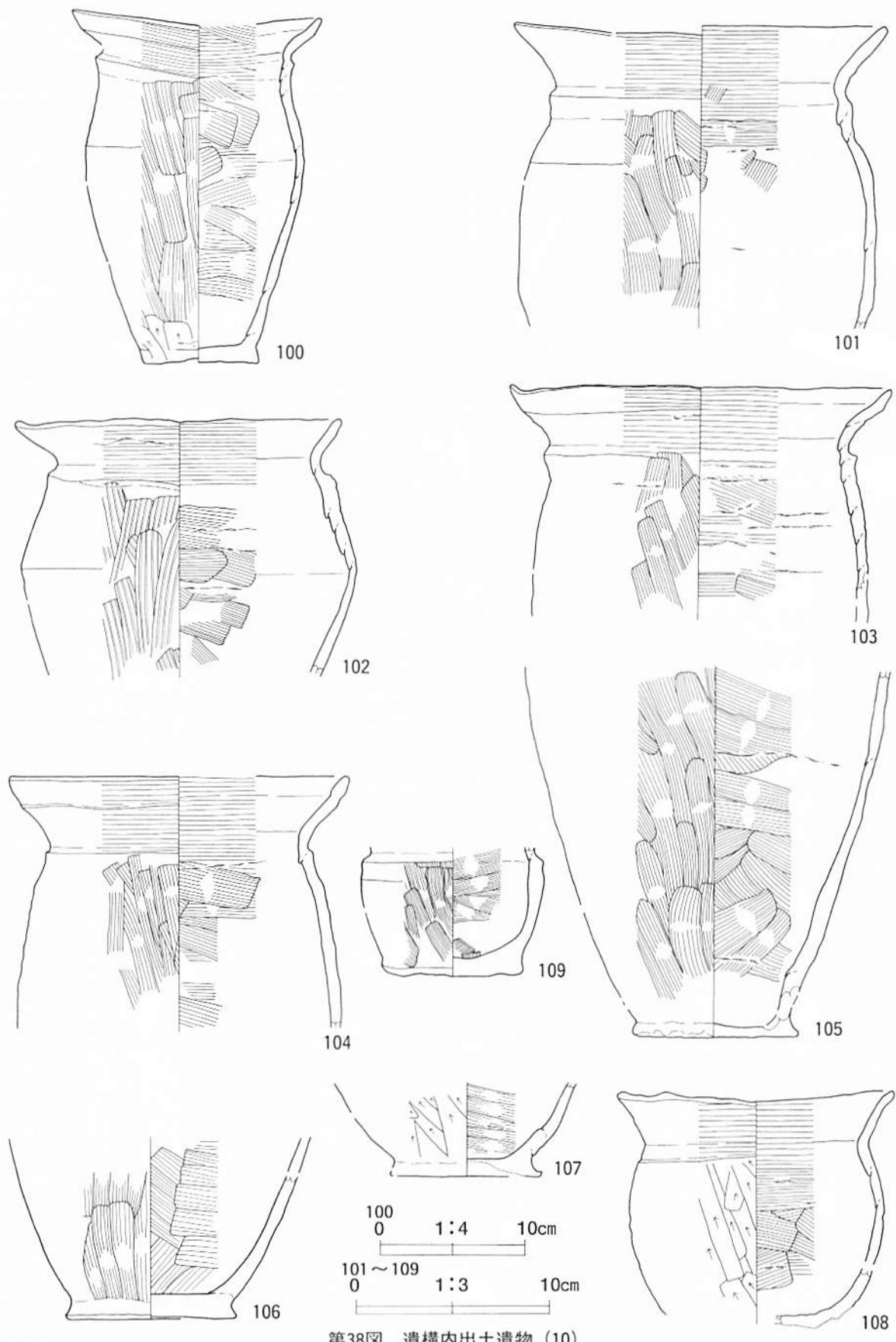
第35図 遺構内出土遺物 (7)



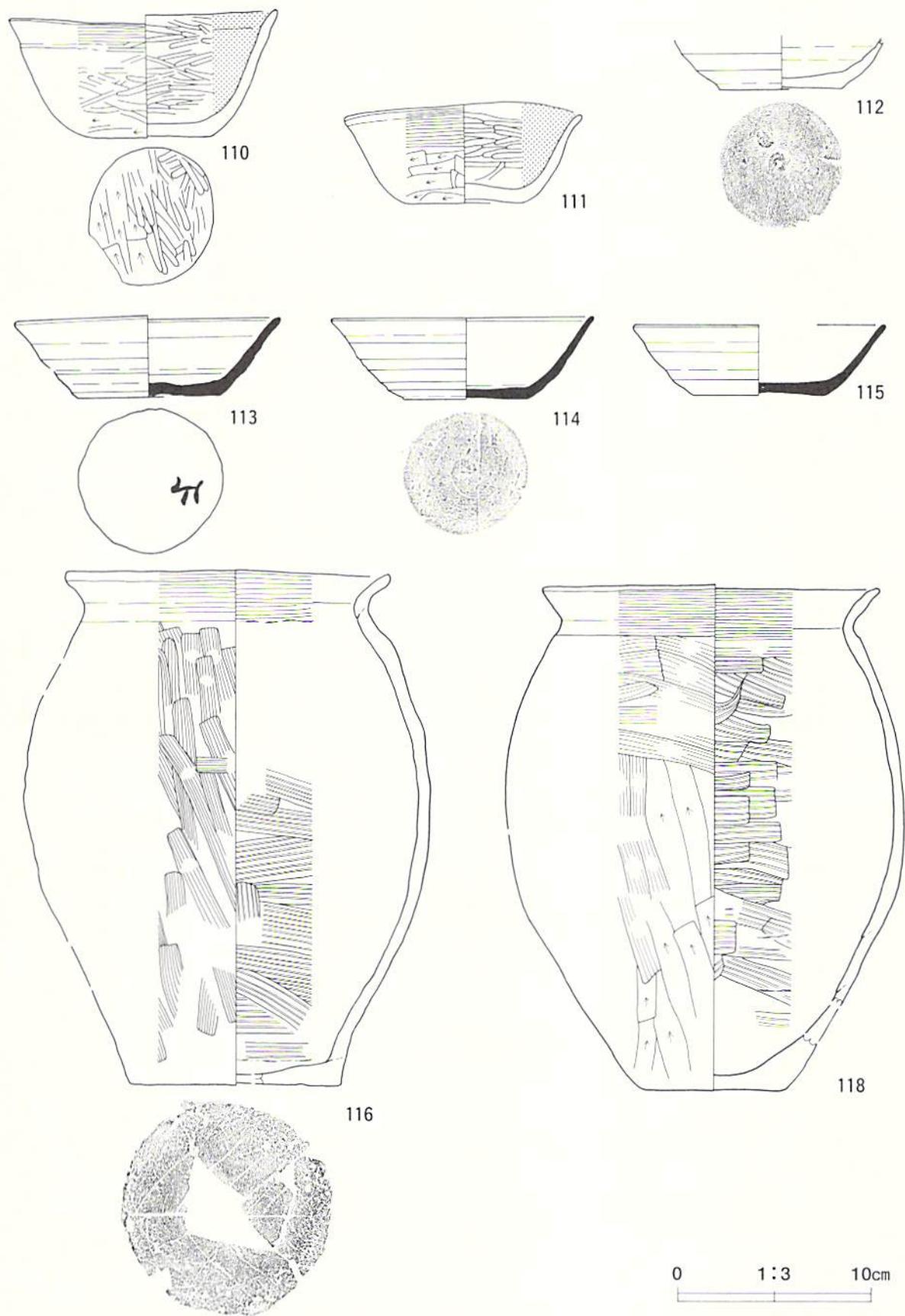
第36図 遺構内出土遺物（8）



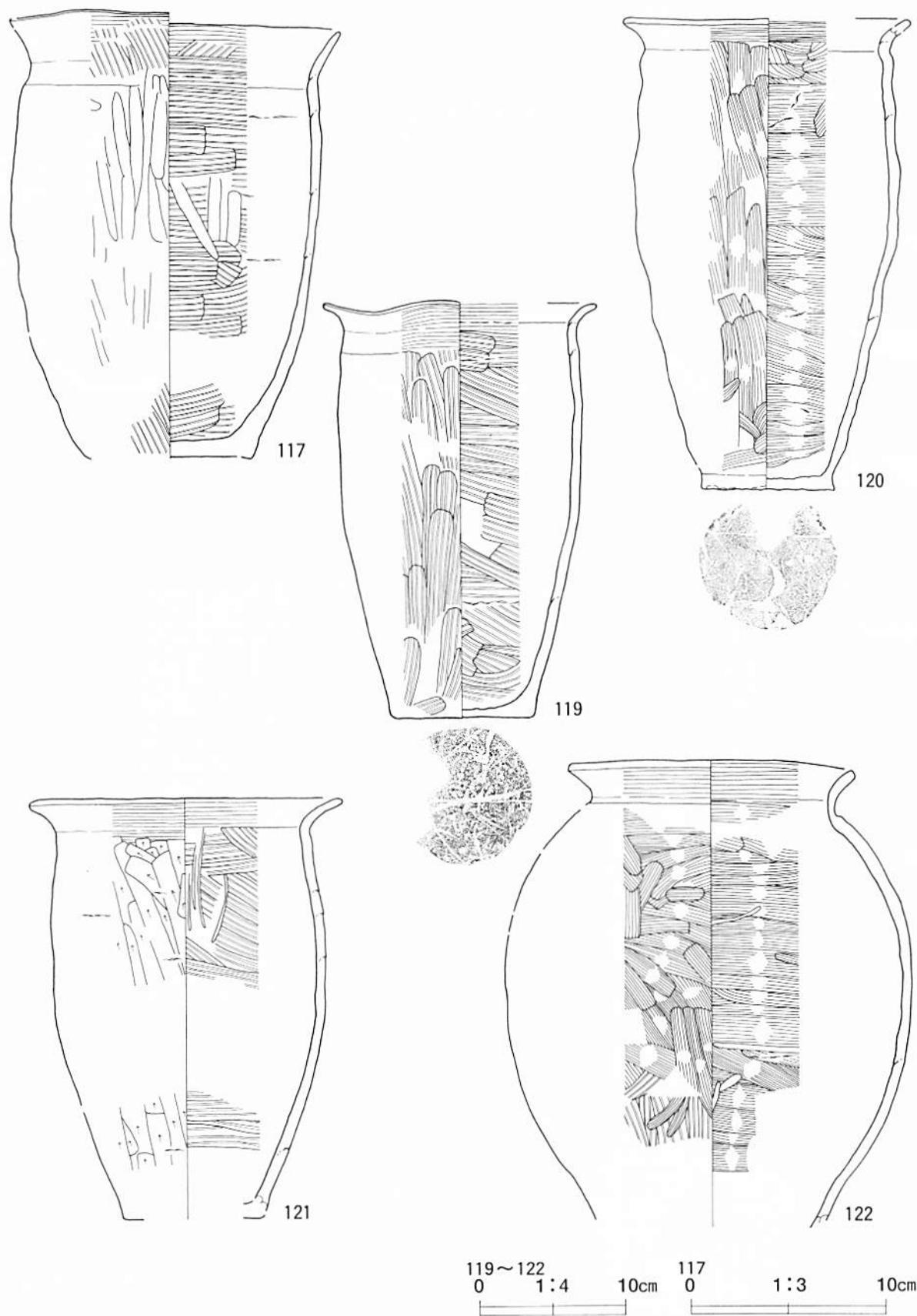
第37図 遺構内出土遺物 (9)



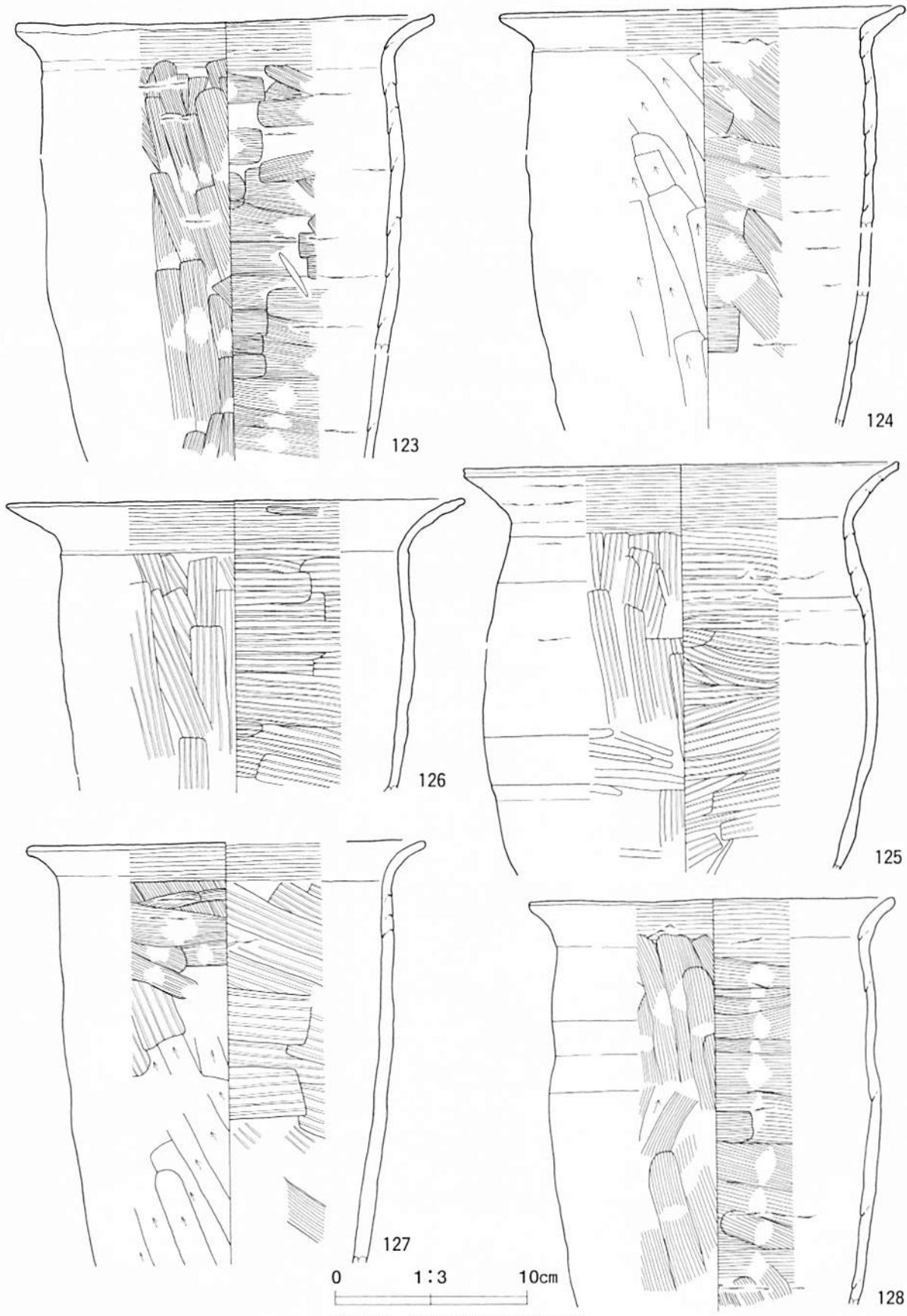
第38図 遺構内出土遺物 (10)



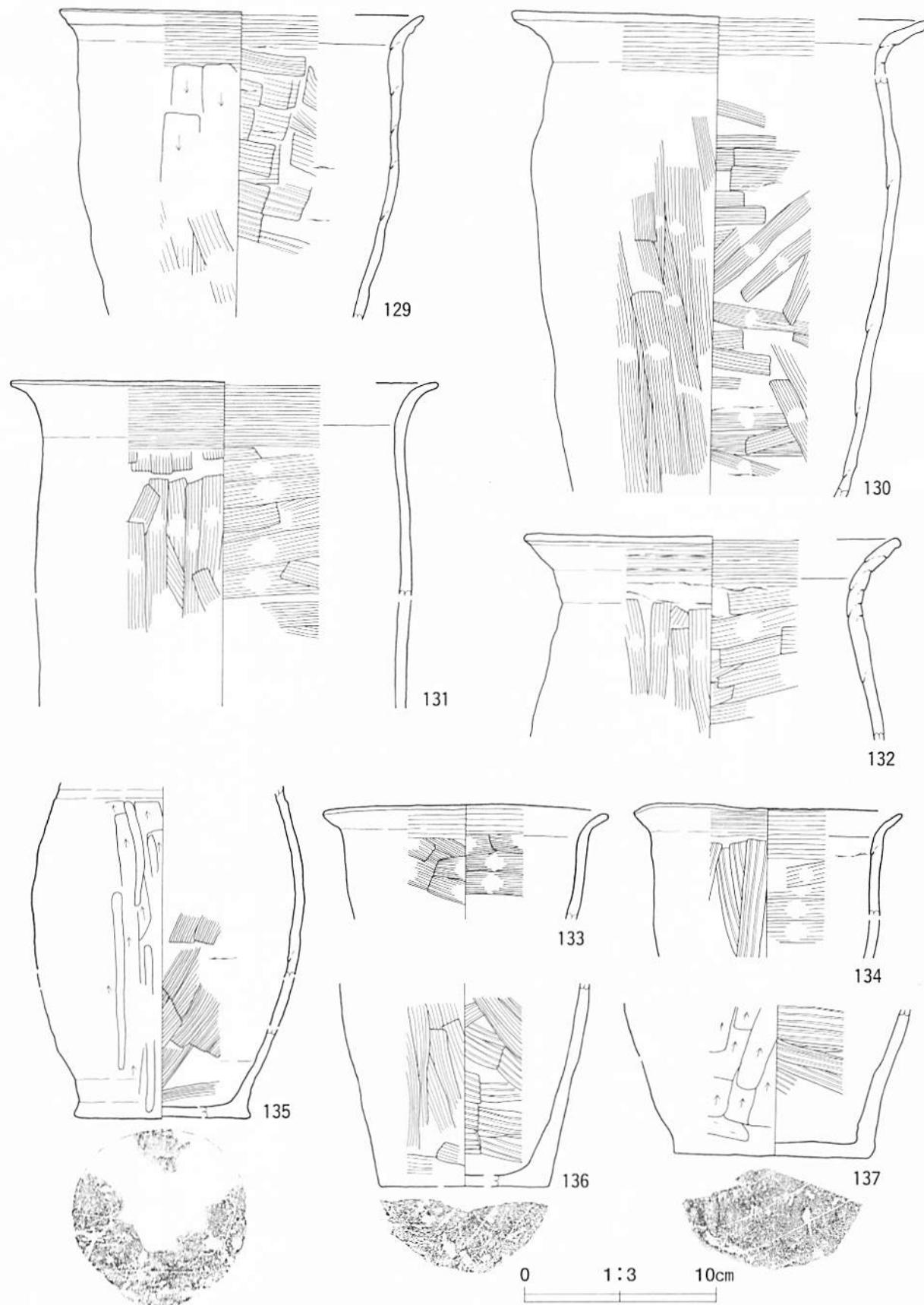
第39図 遺構内出土遺物 (11)



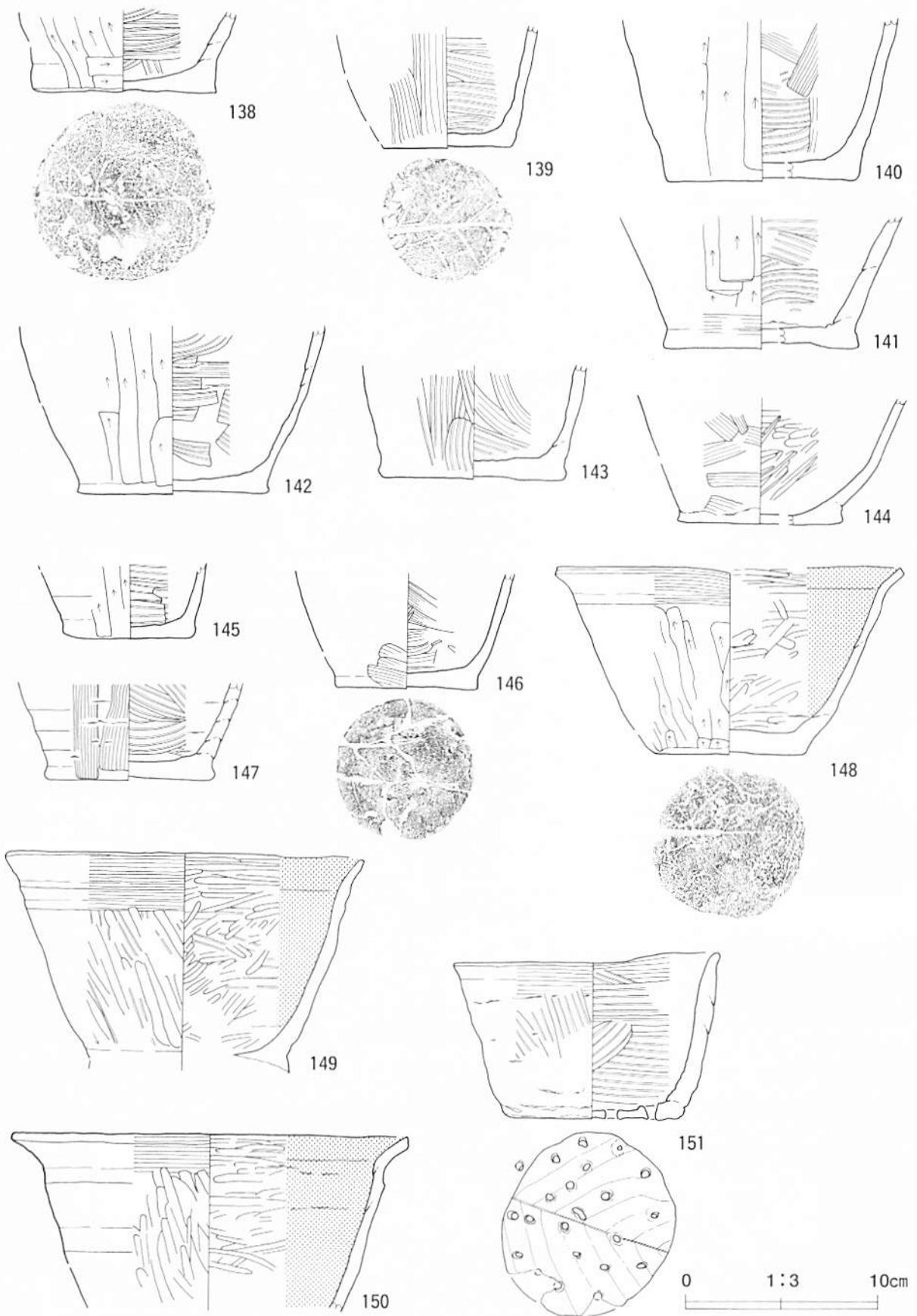
第40図 遺構内出土遺物 (12)



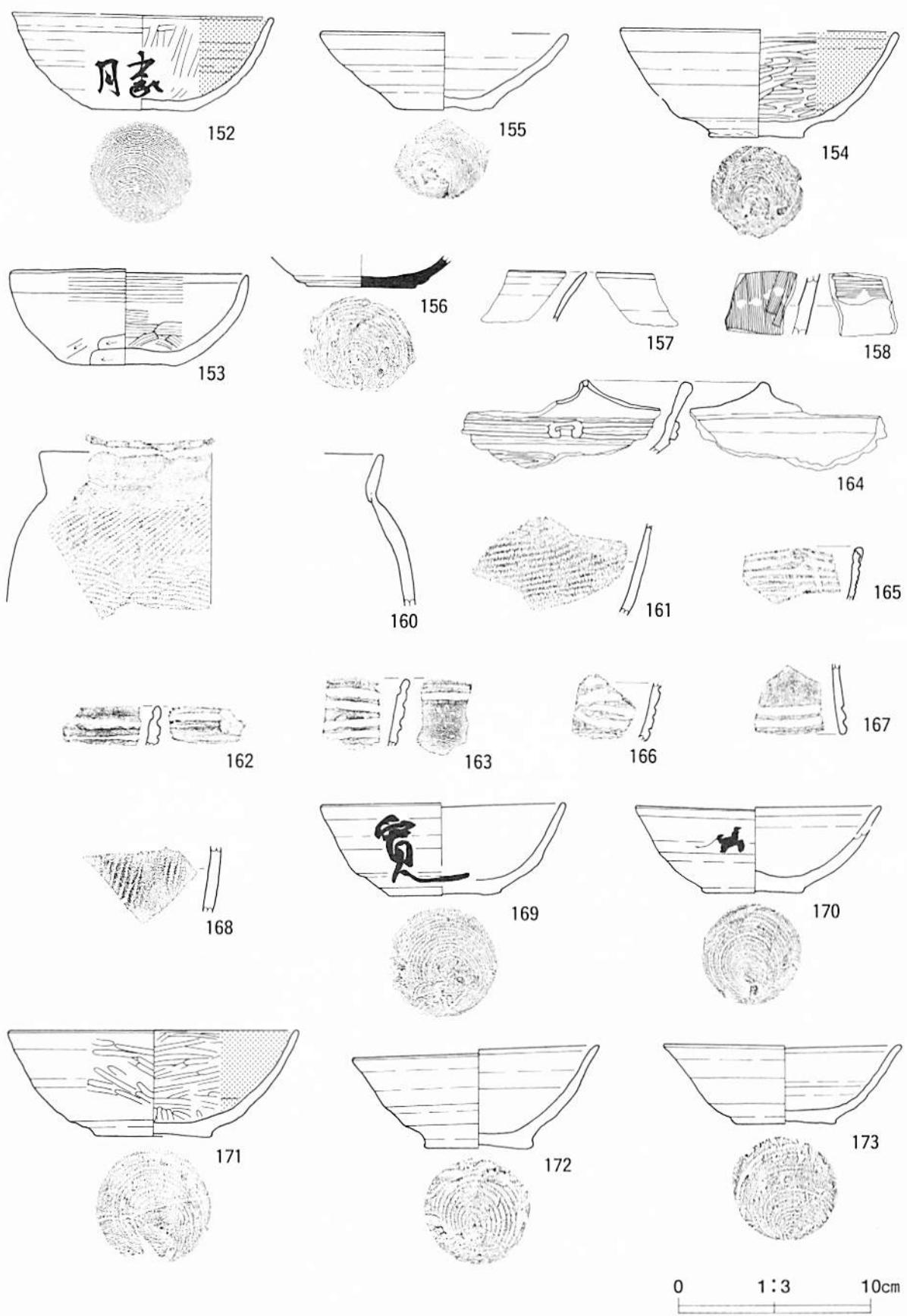
第41図 遺構内出土遺物 (13)



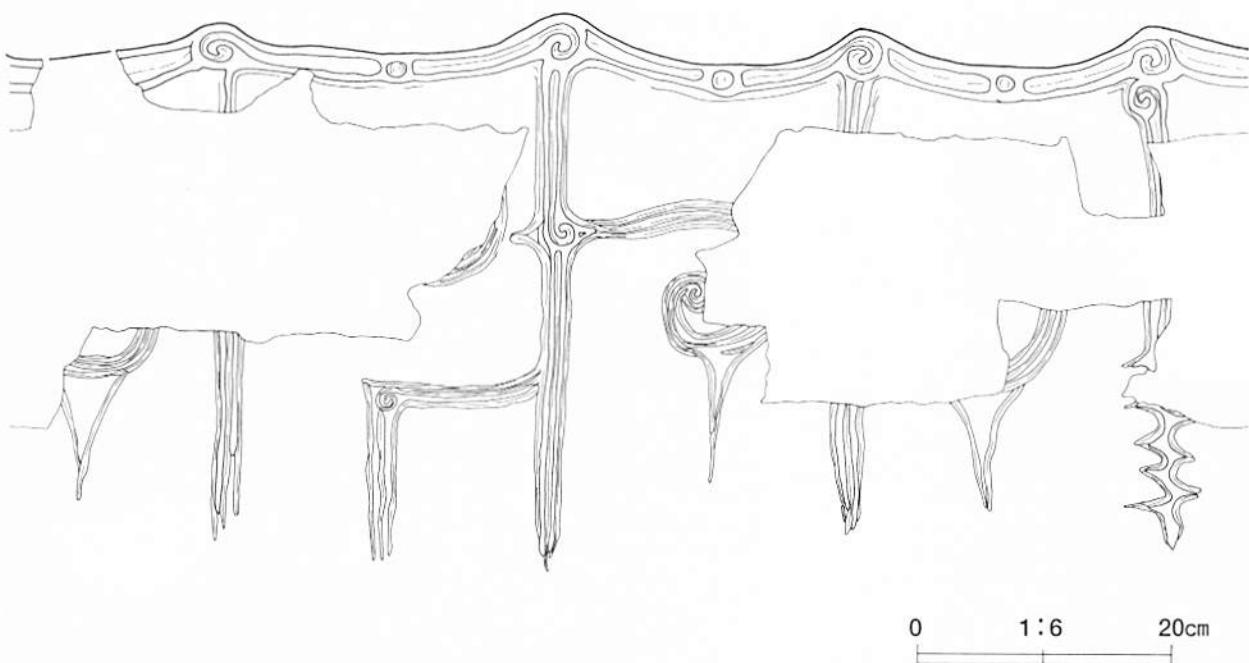
第42図 遺構内出土遺物 (14)



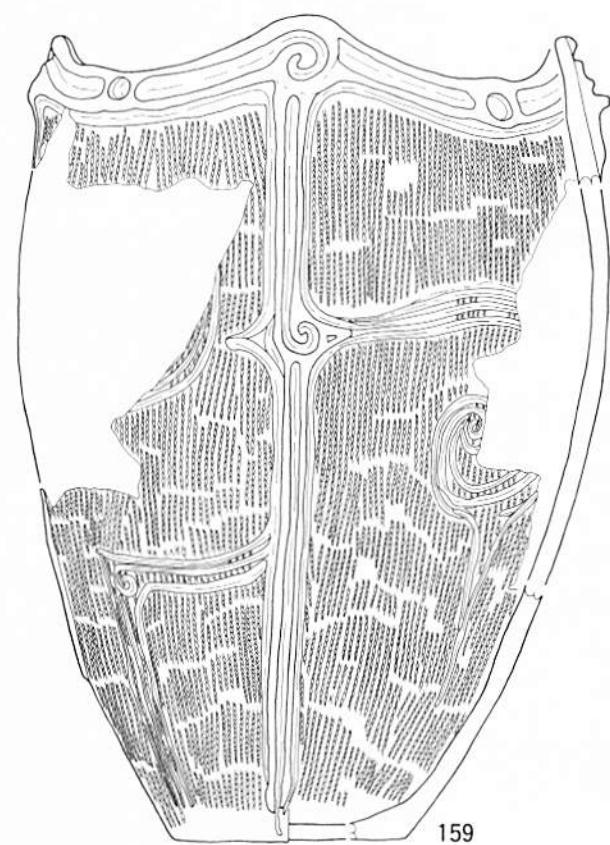
第43図 遺構内出土遺物 (15)



第44図 遺構内出土遺物 (16)・遺構外出土遺物 (1)

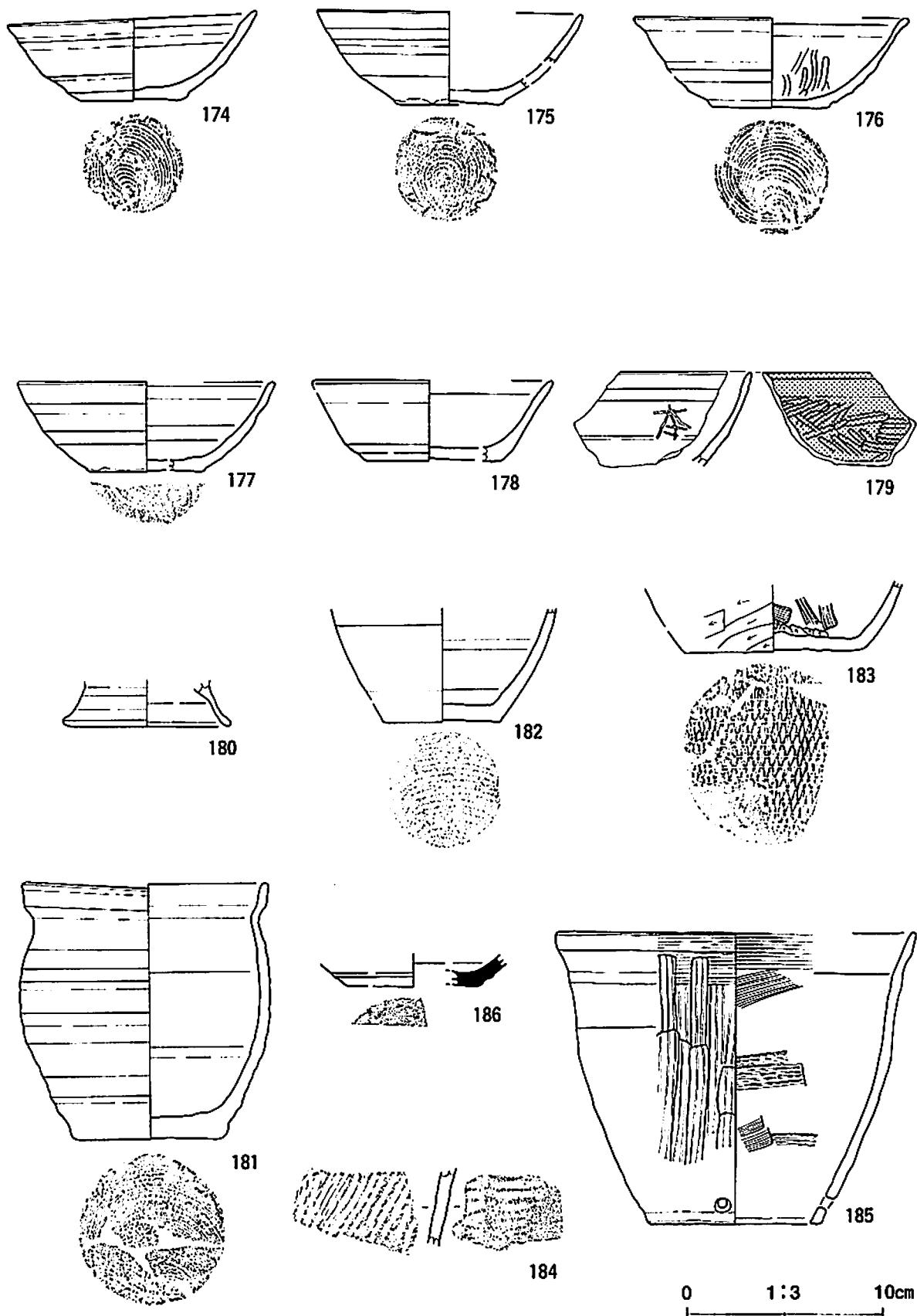


0 1:6 20cm

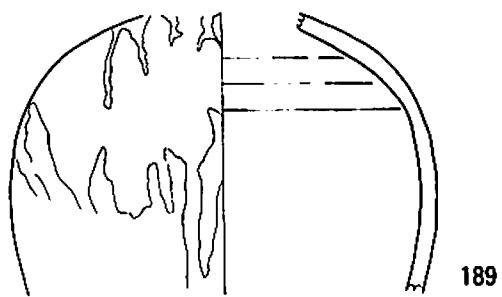
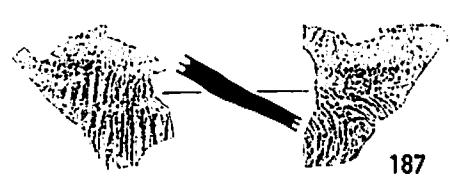


0 1:4 10cm

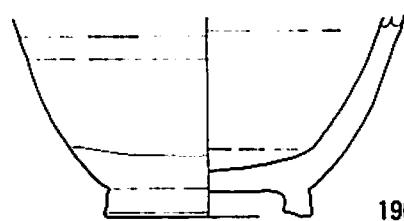
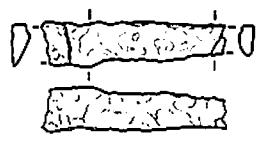
第45図 遺構外出土遺物（2）



第46図 遺構外出土遺物（3）



188



190

0 1:3 10cm

第47図 遺構外出土遺物 (4)

第2表 繩文土器観察表

掲載番号	出土地点・層位	器種	文様(原体)の特徴等	胎土	遺物図版	写真図版
159	B IV区・II層	深鉢	撚糸(大木8b式)	砂粒を含む	45	40
160	B IV区・II層	深鉢	L R単節横回転と斜め回転、II唇部指頭圧痕(晩期末)	金雲母を含む	44	40
161	B II区・一括	深鉢	L R単節横回転、炭化物付着(晩期末)	砂粒を含む	44	40

第3表 弥生土器観察表

掲載番号	出土地点・層位	器種	文様(原体)の特徴等	胎土	遺物図版	写真図版
42	4号住居跡・埋土(Q 2)	甕	縞繩文(R L単節)(弥生後期～末期)	砂粒を含む	33	25
162	B II区・一括	鉢	沈線が巡る(外面2本、内面1本)(弥生初頭)		44	41
163	B II区・一括	鉢	沈線が巡る(外面5本、内面1本)(弥生初頭)	金雲母を含む 砂粒を含む	44	41
164	B II区・III層	鉢	2個一对の貼瘤を持つ変形工字文(弥生初頭)	金雲母を含む	44	40
165	B IV区	鉢	頂部に刻みを持つ山形突起、内面は口縁部に沿って沈線1本(弥生初頭)		44	41
166	B II区・I～II層	鉢	外面の沈線は変形工字文の一部か?(弥生初頭)	砂粒を含む	44	41
167	B II区・I～II層	高坏	脚部下端部に沈線が1本巡る。(弥生初頭)	金雲母を含む	44	41
168	B III区・一括	甕	縞繩文(R L単節)(弥生後期～末期)	砂粒を含む	44	41

第4表 土師器・須恵器観察表 M:ミガキ YN:ヨコナデ N:ナデ H:ハケメ K:ケズリ T:敲き目痕 A:当て具痕 ( )内は推定値 [ ]内は残存値

掲載番号	出土地点	種類・器種	外 面 調 整		内 面 調 整		底 面	成 形	法 量(cm)			遺 物 図 版	写 真 図 版
			口縁部	体 部	口縁部	体 部			口 径	底 径	器 高		
1	1号住居跡・埋土(Q 3)	土師器坏	M	M	M	M	平らに調整	内面黒色処理	14	6.8	4.5	29	22
2	1号住居跡・東壁際床上	土師器坏	M	M	M	M	平らに調整	内面黒色処理	(13)	7.5	[4]	29	22
3	1号住居跡・カマド脇	土師器坏	YN	N・K	M	M	平らに調整	内面黒色処理	14.4	8.2	6.4	29	22
4	1号住居跡・南西隅床上	土師器坏					回転糸切り	ロクロ	12.9	5.4	4.4	29	22
5	1号住居跡・埋土	土師器甕	YN	K	YN	N			18.2	8.8	27.2	29	23
6	1号住居跡・カマド袖付近	土師器甕	YN	N	YN	N			19		28.5	29	22
7	1号住居跡・埋土	須恵器甕	YN	YN・K	YN	M			(13.8)	7.9	11.8	29	22
8	1号住居跡・埋土(Q 3)	須恵器甕	YN	K	YN	N			20.2	9.5	31.5	29	22
9	1号住居跡・P11埋土	須恵器甕	YN	K	YN	N			(15.8)		[10]	29	22
10	1号住居跡・床上	須恵器甕		H		N	機維圧痕			(7)	[2.2]	29	22
11	1号住居跡・カマド脇	須恵器甕	YN	K	YN	N	木葉痕		20.5	9.6	29.2	30	22
12	1号住居跡・カマド埋土	須恵器甕	YN	K	YN	N	平らに調整		16.2	8.4	17.8	30	23
13	2号住居跡・埋土(Q 2・3)	土師器坏			M	M	丸底	内面黒色処理	(11.8)		4.5	30	23
14	2号住居跡・埋土(Q 3)	須恵器甕	H	H	H	H	木葉痕		19	9.5	28.5	30	23

15	2号住居跡・床上	土師器甕	YN	N	YN	N	木葉痕		(17.1)	10	[27.9]	30	24
16	2号住居跡・埋土(Q3)	土師器甕	YN	N	YN	N			(24.4)		[13.5]	31	23
17	2号住居跡・カマド脇	土師器甕	YN	K	YN	N					[19.8]	31	23
18	3号住居跡・P1埋土	土師器坏	M	M	M	M		内面黒色処理	(16.4)		[3.3]	31	24
19	3号住居跡・P1埋土	土師器坏				M		口クロ 内面黒色処理	(13.5)		[4.5]	31	24
20	3号住居跡・埋土上部	土師器坏						口クロ		12.2	[3.6]	31	24
21	3号住居跡・埋土(Q2)	土師器坏				M	回転糸切り	口クロ 内面黒色処理		5.7	[1.1]	31	24
22	3号住居跡・カマド	土師器甕		K				口クロ	(26.2)		[16.1]	31	24
23	3号住居跡・埋土	土師器甕		K		N				9.2	[12]	31	24
24	3号住居跡・P1埋土	須恵器甕		T		A					[11.5]	31	25
25	3号住居跡・P1埋土	須恵器甕		T		A					[12.5]	31	24
26	3号住居跡・埋土(Q2)	須恵器甕		T		A					[14.5]	32	25
27	3号住居跡・P1埋土	須恵器甕		T・K		N			(12.7)		[15.7]	32	24
28	4号住居跡・埋土	土師器坏		M		M		内面黒色処理	(12.6)		[5.5]	32	25
29	4号住居跡・埋土(Q4)	土師器坏				M	回転糸切り	口クロ 内面黒色処理	(13.6)	(5.4)	4.6	32	25
30	4号住居跡・埋土	土師器坏			M	M		口クロ 内面黒色処理 墨書き	(16.6)		[4.2]	32	25
31	4号住居跡・カマド脇	土師器甕	YN	H	YN	N			17.5	9	29.3	32	26
32	4号住居跡・カマド脇	土師器甕	YN	N	YN	N			15.6	8.6	24.6	32	26
33	4号住居跡・埋土	土師器甕	YN	N	YN	N	木葉痕		14.5	(8.6)	26.7	33	26
34	4号住居跡・P1埋土	土師器甕	YN	K	YN	N			(15.3)		[15]	32	25
35	4号住居跡・カマド脇	土師器甕		M		N			9.2	[24.7]	33	26	
36	4号住居跡・カマド脇	土師器甕	YN	N		N	ケズリ調整		7	[14.3]	32	25	
37	4号住居跡・P21埋土	土師器甕		M		N・H				(9.6)	[14.5]	33	27
38	4号住居跡・カマド袖	土師器甕		K		N	砂底			(7)	[8.4]	33	25
39	4号住居跡・埋土(P2)	土師器甕		M		N	砂底			8.8	[12.4]	33	27
40	4号住居跡・カマド	土師器甕		K		N・H	砂底			9.5	[4.5]	33	25
41	4号住居跡・埋土(Q1)	須恵器甕		K		H		口クロ	(20.8)		[35.4]	34	27
44	5号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏	YN	YN	M	M	丸底 線刻	内面黒色処理	10.1		3.9	33	27
45	5号住居跡・埋土(Q2)	土師器甕	YN	N	YN	N			19.5	9.5	31.9	34	27
46	5号住居跡・埋土	土師器瓶	YN	N	YN	N			13.8	6.7	11.7	34	27
47	6号住居跡・床上	土師器坏	M	M	M	M	平底	内面黒色処理	(14.2)	7.8	5.9	34	28
48	6号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏	M	M	M	M	平底	内面黒色処理	14.3	7.4	4.9	34	28
49	6号住居跡・埋土	土師器坏	M	M	M	M	丸底	内面黒色処理	11.4		4	34	28
50	6号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏	M	M	M	M	平底	内面黒色処理	(12.6)	(7.6)	6.6	34	28
51	6号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏					回転糸切り	口クロ	15.8	6.2	3.9	34	28
52	6号住居跡・埋土	土師器鉢	YN	K	YN・M	M		内面黒色処理	(21)	8.7	12.4	34	29
53	6号住居跡・床上(Q3)	土師器甕	YN	M	YN	N			18.5		[15.3]	34	29

54	6号住居跡・埋土(Q4)	土師器甕		N		YN・N				7.8	[9.6]	35	28
55	6号住居跡・埋土(Q2)	土師器甕		M・N		N	砂底			8.5	[18]	35	28
56	6号住居跡・床土(Q1)	土師器甕		K		N				9.4	[8.2]	35	28
57	6号住居跡・埋土(Q4)	土師器甕		N		N				6	[3.2]	35	28
58	7号住居跡・P1埋土	土師器坏			M	M	回転糸切り	口クロ 内面黒色処理 墨書き	13.5	6.3	4.4	35	29
59	7号住居跡・埋土下位	土師器坏			M	M	回転糸切り	口クロ 内面黒色処理	14.2	5.4	5.8	35	29
60	7号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏			N・M	M	回転糸切り	口クロ 内面黒色処理	(14.3)	6.4	4.9	35	29
61	7号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏			M	M	回転糸切り	口クロ 内面黒色処理	(14.7)	(6)	4.7	35	29
62	7号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏		K	M	M	再調整	口クロ 内面黒色処理	(14.8)	(4.7)	5.6	35	29
63	7号住居跡・P1埋土	土師器坏					回転糸切り	口クロ	14	5.2	4.4	35	29
64	7号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏					回転糸切り	口クロ	13.1	5.1	4.7	35	29
65	7号住居跡・埋土(Q2)	土師器坏					回転糸切り	口クロ	13.4	5	4.9	35	30
66	7号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏					回転糸切り	口クロ	14.2	5.6	5.3	35	30
67	7号住居跡・埋土下位	土師器坏					回転糸切り	口クロ	14	5.5	4.6	35	30
68	7号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏					回転糸切り	口クロ	13.4	5	5	35	30
69	7号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏					回転糸切り	口クロ	14	5	4.4	36	30
70	7号住居跡・埋土(Q2)	土師器坏					回転糸切り	口クロ	(13.9)	5.6	4.8	36	30
71	7号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏					不明	口クロ	(14)	4.5	4	36	30
72	7号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏					回転糸切り	口クロ	(14.6)	(5.9)	5.6	36	30
73	7号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏					回転糸切り	口クロ	(14)	5.8	3.8	36	30
74	7号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏					不明	口クロ	(14.4)		[4.8]	36	30
75	7号住居跡・埋土下位	土師器坏					回転糸切り	口クロ	(13.1)	(6.4)	5.1	36	31
76	7号住居跡・埋土(Q1)	土師器坏					回転糸切り	口クロ	(15.4)	(6.2)	5	36	30
77	7号住居跡・P2埋土	須恵器坏					回転糸切り	口クロ	14.1	6.4	5.2	36	30
78	7号住居跡・埋土下位	須恵器坏					回転糸切り	口クロ		5.4	[3.6]	36	31
79	7号住居跡・埋土下位	須恵器坏					回転糸切り	口クロ	(14.2)	6	5.3	36	31
80	7号住居跡・埋土下位	須恵器坏					回転糸切り	口クロ		5.4	[4.3]	36	31
81	7号住居跡・P2埋土	土師器碗					回転糸切り	口クロ		6.6	[5.2]	36	31
82	7号住居跡・P2埋土	土師器鉢					回転糸切り	口クロ	11.2	5.9	8.1	36	31
83	7号住居跡・埋土下位	土師器鉢					回転糸切り	口クロ	11.8	6.8	10	36	31
84	7号住居跡・埋土(Q1)	土師器甕					回転糸切り	口クロ		8.1	7	36	31
85	7号住居跡・P1埋土	土師器坏					回転糸切り	口クロ	(5.9)	4.1	3.4	37	31
86	7号住居跡・東壁際	土師器耳皿					回転糸切り	口クロ	5.8	3.2	1.6	37	31
87	7号住居跡・埋土(Q2)	須恵器甕		N				口クロ			[8.3]	37	31
88	8号住居跡・埋土	土師器坏	YN	YN・M	M	M	丸底風平底	内面黒色処理	11	4.5	3.9	37	32
89	8号住居跡・カマド袖脇	土師器坏	K・M	K・M	M	M	平底	内面黒色処理	(14.8)	8.3	5.6	37	32

91	8号住居跡・埋土(Q4)	土師器壺	M	M	M	M	丸底	内面黒色処理	11		3.5	37	32
92	8号住居跡・埋土(Q1)	土師器壺	YN	K	M	M		内面黒色処理	(14.2)		[5]	37	32
93	8号住居跡・埋土(Q2)	土師器壺	YN	N	YN	N	木葉痕		21	9	29.1	37	32
94	8号住居跡・埋土(Q2)	土師器壺	YN	K	YN	N	木葉痕		14.3	7.2	17.9	37	32
95	8号住居跡・埋土(Q1)	土師器壺	YN	N	YN	N			12.5		[13.8]	37	32
96	9号住居跡・埋土(Q4)	土師器壺	M	M	M	M	平底	内面黒色処理	15.7	8.5	6.1	37	32
97	9号住居跡・埋土(Q2)	土師器壺		M		M		内面黒色処理			[6.7]	37	33
98	9号住居跡・床上(Q4)	土師器壺	M	M	M	M		内面黒色処理 高台	(12.4)	8	11	37	33
99	9号住居跡・埋土(Q2)	土師器壺	YN	N	YN	N			15.7	9.1	27	37	33
100	9号住居跡・床上(Q4)	土師器壺	YN	N·K	YN	N			(17.3)	8	24.3	38	33
101	9号住居跡・床上(Q4)	土師器壺	YN	N	YN	N			19.2		[15.8]	38	33
102	9号住居跡・カマド右脇	土師器壺	YN	H	YN	N			16.7		[13.3]	38	33
103	9号住居跡・カマド右脇	土師器壺	YN	N	YN	N			19.7		[13.1]	38	33
104	9号住居跡・埋土(Q2)	土師器壺	YN	N	YN	N			(17.5)		[13.1]	38	33
105	9号住居跡・埋土(Q2)	土師器壺		N		N				8.6	[19.2]	38	34
106	9号住居跡・埋土(Q2)	土師器壺		N		N				8.8	[9.4]	38	34
107	9号住居跡・埋土(Q4)	土師器壺		K		N				(7.8)	[4.8]	38	34
108	9号住居跡・埋土(Q2)	土師器壺	YN	K	YN	N			14.4		[12.2]	38	34
109	9号住居跡・埋土(Q2)	土師器鉢		N		N				6.7	7.3	38	34
110	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器壺	YN	M	M	M	調整痕	内面黒色処理	13.8	6.5	6.5	39	34
111	10号住居跡・埋土(Q2)	土師器壺	YN	YN·K	M	M		内面黒色処理	12.2	6.4	5.2	39	34
112	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器壺					回転窓切り	ロクロ		6.4	[2.6]	39	34
113	10号住居跡・床上(Q3隔)	須恵器壺					回転窓切り	ロクロ 黒苔	14.2	7.4	3.9	39	34
114	10号住居跡・埋土(Q3)	須恵器壺					回転窓切り	ロクロ	13.5	6.3	4.2	39	34
115	10号住居跡・埋土(Q3)	須恵器壺					回転窓切り	ロクロ	(13)	(6.8)	3.6	39	34
116	10号住居跡・カマド脇	土師器壺	YN	N	YN	H	木葉痕		16.6	11	26.7	39	35
117	10号住居跡・カマド右脇	土師器壺	YN·M	M	YN·H	H	木葉痕		16.9	8.4	22.8	40	35
118	10号住居跡・カマド左脇	土師器壺	YN	N·K	YN	H			(17.4)	7.5	26	39	36
119	10号住居跡・カマド上	土師器壺	YN	H	YN	H	木葉痕		(18.8)	9.3	28.6	40	36
120	10号住居跡・埋土(Q2)	土師器壺	YN	N	YN	N	木葉痕		(19.2)	9.2	32.2	40	36
121	10号住居跡・埋土	土師器壺	YN	YN·K	YN	H			21.6	(9.8)	28.8	40	36
122	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器壺	YN	N·H	YN	N			19.8		[32]	40	35
123	10号住居跡・床上(Q3)	土師器壺	YN	N	YN	N			22		[23]	41	36
124	10号住居跡・カマド左袖	土師器壺	YN	K	YN	N			21		[21.6]	41	37
125	10号住居跡・カマド右脇	土師器壺	YN	H·M	YN	H			22.8		21.2	41	37
126	10号住居跡・カマド煙出	土師器壺	YN	H	YN	H			(24)		[15.2]	41	37
127	10号住居跡・カマド右脇	土師器壺	YN	N·H·K	YN	H			(20.8)		[22]	41	37
128	10号住居跡・カマド左袖	土師器壺	YN	N·K	YN	N			(18.9)		[21.4]	41	37

129	10号住居跡・埋土(Q3闇)	土師器甕	YN	N·K	YN	H			(18.8)		[15.8]	42	37	
130	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器甕	YN	N	YN	N			(21.6)		[24.9]	42	38	
131	10号住居跡・カマド上	土師器甕	YN	N	YN	N			(22.2)		[16.9]	42	38	
132	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器甕	YN	N	YN	N			(19.6)		[10.5]	42	38	
133	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器甕	YN	N	YN	N			15		[6]	42	38	
134	10号住居跡・Q1掘方	土師器甕	YN	H	YN	N			(14)		[8]	42	38	
135	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器甕		K		N	木葉痕			9.2	[17.3]	42	38	
136	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器甕		N		H	木葉痕			(8.8)	[10.5]	42	38	
137	10号住居跡・埋土	土師器甕		K		H	木葉痕			(10.2)	[7.7]	42	38	
138	10号住居跡・カマド上	土師器甕		K		H	木葉痕			9.4	[4.3]	43	38	
139	10号住居跡・カマド右	土師器甕		N		H	木葉痕			6.6	[6]	43	39	
140	10号住居跡・カマド右脇	土師器甕		K		N·H	木葉痕			(8.8)	[8.3]	43	39	
141	10号住居跡・カマド上	土師器甕		K·N		H				(10.2)	[6.8]	43	39	
142	10号住居跡・カマド袖	土師器甕		K		H				(10)	[8.8]	43	39	
143	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器甕		H		H·N				(9.8)	[5.9]	43	39	
144	10号住居跡・カマド上	土師器甕		N		M				8.6	[6.5]	43	39	
145	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器甕		K		H				6.7	[3.9]	43	39	
146	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器甕		N		N	木葉痕			7.4	[5.8]	43	39	
147	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器甕		N		H				(8.9)	[5.1]	43	39	
148	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器鉢	YN	K	M	M	木葉痕	内面黒色処理	(18)	8	9.7	43	39	
149	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器鉢	YN	M	M	M		内面黒色処理	18.6		[11.4]	43	39	
150	10号住居跡・埋土(Q3)	土師器鉢	YN	M	M	M		内面黒色処理	20.6		[9.2]	43	40	
151	10号住居跡・カマド右脇	土師器鉢	YN	H	YN	H	木葉痕			13.7	9.3	8.7	43	40
152	11号住居跡・床上(Q1闇)	土師器坏			M	M	回転糸切り	口クロ 内面黒色処理 墨書	13.8	5	4.8	44	40	
153	12号住居跡・東隅埋土	土師器坏	YN	K	YN	N			12.2	5.3	4.9	44	40	
154	13号住居跡・P8埋土	土師器坏			M	M	回転糸切り	口クロ 内面黒色処理	(14.3)	5	5.6	44	40	
155	13号住居跡・P8埋土	土師器坏					回転糸切り	口クロ	(12.8)	(5)	4	44	40	
156	1号溝跡埋土	須恵器坏					回転糸切り	口クロ			(5.4)	[1.7]	44	40
157	3号溝跡埋土	土師器坏						口クロ				[2.8]	44	40
158	3号溝跡埋土	土師器甕		N		N						[3.4]	44	40
169	BⅢ区一括・IV層	土師器坏					回転糸切り	口クロ 墨書	12.7	5.7	4.8	44	41	
170	BⅡ区一括	土師器坏					回転糸切り	口クロ 墨書	(12.7)	5.2	4.5	44	41	
171	BⅢ区	土師器坏	一部M	一部M	M	M	回転糸切り	口クロ 内面黒色処理	15	6	5.5	44	41	
172	BⅤ区一括	土師器坏					回転糸切り	口クロ	12.8	5.6	5.3	44	41	
173	BⅡ区一括	土師器坏					回転糸切り	口クロ	12.3	5.3	4.2	44	41	
174	BⅢd8・IV層	土師器坏					回転糸切り	口クロ	12.7	5.3	4.6	46	41	
175	BⅣ区	土師器坏					回転糸切り	口クロ	13.4	5.5	4.8	46	41	

176	B III区	土師器坏					回転糸切り	口クロ	(13.9)	5.8	4.7	46	41
177	B II区・括	土師器坏					回転糸切り	口クロ	(13)	(5.8)	4.5	46	41
178	B IV区・II層	土師器坏					不明	口クロ	(12)	6.6	4.1	46	42
179	B II b 9・c 9	土師器坏			M	M		ロクロ 刻書 内面黒色處理	(14)		[4.8]	46	42
180	B III区・括	土師器坏						ロクロ 高台付坏		(8.3)	[2.4]	46	42
181	B III d 8・IV層	土師器壺					回転糸切り	ロクロ	12.4	7.5	13.2	46	42
182	B IV区	土師器壺					静止糸切り	ロクロ		6	[6]	46	42
183	B III d 8・IV層	土師器壺	K		N・K	鐵維圧痕				9.1	[3.7]	46	42
184	B IV区	土師器壺	T		A						[4.2]	46	42
185	B III・B IV区	土師器瓶	YN	H	YN	N			(18.2)	(8.8)	14.8	46	42
186	B IV区	須恵器坏					回転糸切り	ロクロ		(7.8)	[1.6]	46	42
187	B IV区	須恵器壺	T		A			ロクロ			[5.6]	47	42
188	B II区・III層	須恵器壺								(11.8)	[2]	47	42

第5表 土製品観察表

〔〕内は残存値

掲載番号	出土地点	器種	法量(cm)			重さ(g)	特徴・備考	遺物図版	写真図版
			長さ	幅	厚さ				
43	4号住居跡・P16埋土	紡錘車	3.9	3.85	2.45	43.9	胎土に金雲母含む。	33	25

第6表 陶器観察表

〔〕内は残存値

掲載番号	出土地点	器種	外而調整		内面調整		底面	成形	法量(cm)			遺物図版	写真図版
			口縁部	体部	口縁部	体部			口 径	底 径	器 高		
189	B III d 9・I層	長頸瓶						ロクロ			[10.9]	47	42
190	B III d 9・I層	長頸瓶						ロクロ 高台		8.3	[7.8]	47	42

第7表 鉄製品観察表

( )内は推定値 [ ]内は残存値

掲載番号	出土地点	器種	計算値(cm)			重さ(g)	特徴・備考	遺物図版	写真図版	
			長さ	幅	厚さ					
191	B IV区・II層	刀子(柄部～身部)	(4.9)	1.2	0.5				47	42

第8表 石器観察表

〔〕内は残存値

掲載番号	出土地点	器種	計算値(cm)			重さ(g)	特徴・備考	石材	産地	遺物図版	写真図版
			長さ	幅	厚さ						
88	7号住居跡・埋土下位	石範	6.9	4.5	1.5	56.3		頁岩	奥羽山脈?	37	32

# V まとめ

## 1. 遺構

### (1) 縄文時代の遺構

#### 陥し穴状遺構

全部で3基検出された。いずれも溝状の陥し穴状遺構で、住居状遺構の床面下（1基）とその南西部（2基）での検出である。規模等については第9表にまとめてある。

埋土は黒色土や黒褐色土が主体である。出土遺物はなく、時期については不明である。

第9表 陥し穴状遺構一覧表

（ ）は推定値又は推定形

遺構名	開口部径(cm)	底部径(cm)	深さ(cm)	短軸断面形	長軸断面形	長軸方向
1号陥し穴	30×256	18×255	38~46	長方形	フ拉斯コ	北西-南東
2号陥し穴	53×(105)	23×(150)	57~70	逆台形	(フ拉斯コ)	北西-南東
3号陥し穴	44×(72)	24×(100)	50~70	長方形	(フ拉斯コ)	北西-南東

### (2) 古代以降の遺構

#### ① 平安時代の堅穴住居跡

13棟の検出である。各堅穴住居跡（以下住居跡と略記）の位置については第48図に記してある。また、平面形や規模等については第10表にまとめてある。

＜占地＞ 調査区域中央部から東部にかけて位置しているものが多い。いずれも距離を持って存在しており、重複はない。

＜平面形・規模＞ 検出された13棟のうち9棟は隅丸方形である。残り4棟のうち3棟は遺構の一部が調査区域外であるが、平面形は隅丸方形と推測され、もう1棟も堀り方の一部だけの検出であるが、隅丸方形と推測される。規模別の棟数は、一辺が3~4mのもの7棟、4~5mのもの5棟、7~8mのもの1棟で、小型の住居跡が多い。

＜埋土＞ 黄褐色土粒を含んだ黒色土や黒褐色土が主体で、全体によく締まっている。13棟のうち5棟には、埋土中部から下部にかけて十和田a降下火山灰が含まれている。

＜壁・床面＞ 壁は垂直気味又は外傾して立ち上がりつており、壁高は1.8~32.7cmの範囲にある。床面は粘土質の黄褐色土でよく締まり、多少の凹凸があるがほぼ平坦である。

＜柱穴・柱穴配置＞ 柱穴が検出されたのは10棟である。そのうち柱穴配置を確認できたのは3棟で、いずれも4本柱と考えられる。

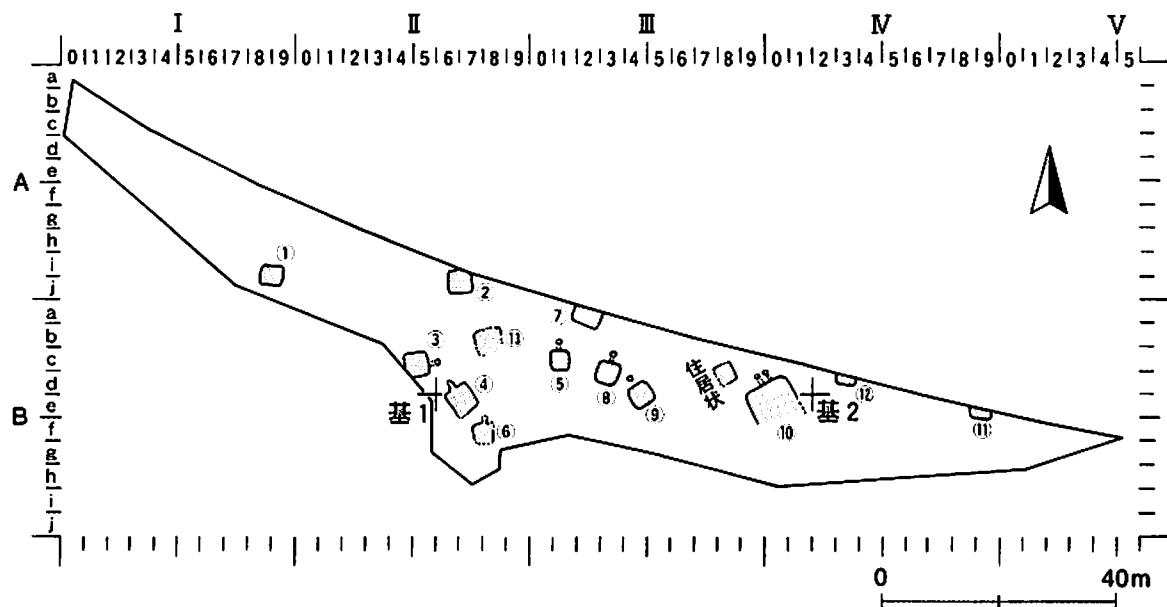
＜カマド＞ カマドが検出されたのは9棟である。設置場所は北壁（5棟）、北西壁（3棟）、東壁（1棟）で、壁の中央部に設置されているのがほとんどである。カマド本体が原型を保っているものはない。袖部は芯材として礫や土器を使用し、粘土質シルトで被覆して構築されている。煙道部は掘り込み式（1棟）と刳り抜き式（5棟）のものがあり、刳り抜き式のものが多い。

＜時期＞ 出土した土器と住居跡の埋土に十和田a降下火山灰が含まれていることから、平安時代前半と考えられる。

第10表 平安時代の住居跡一覧表

( ) は推定値又は推定形

番号	遺構名	平面形	規模 (m)	壁高 (cm)	カマド位置	煙道部	備考
①	1号住居跡	隅丸方形	3.4 × 3.9	2.9 ~ 24.1	北壁中央	不明	
②	2号住居跡	隅丸方形	3.2 × 3.45	15.4 ~ 29	北壁中央	調査区域外	
③	3号住居跡	隅丸方形	4.05 × 4.07	17.9 ~ 31.6	東壁南寄り	刎り抜き式	
④	4号住居跡	隅丸方形	4.5 × 4.68	15.4 ~ 29.7	北西壁中央	掘り込み式	墨書き器・紡錘車出土
⑤	5号住居跡	隅丸方形	3.3 × 3.65	17.4 ~ 29.3	北壁中央	刎り抜き式	
⑥	6号住居跡	隅丸方形	3.15 × 3.23	2.8 ~ 18.9	北壁中央	不明	
⑦	7号住居跡	(隅丸方形)	(2.55) × 4.9	19.1 ~ 32.7		調査区域外	墨書き器・耳皿出土
⑧	8号住居跡	隅丸方形	3.35 × 3.92	7.2 ~ 26.6	北壁中央	刎り抜き式	
⑨	9号住居跡	隅丸方形	3.85 × 4.06	8.7 ~ 23.9	北西壁中央	刎り抜き式	
⑩	10号住居跡	隅丸方形	7.95 × (6.5)	5.3 ~ 22.4 (作り替え)	北西壁中央	刎り抜き式	墨書き器出土
⑪	11号住居跡	(隅丸方形)	(2.57) × 3.45	1.8 ~ 18.8		調査区域外	墨書き器出土
⑫	12号住居跡	(隅丸方形)	(1.72) × 3.65	16 ~ 24.7		調査区域外	
⑬	13号住居跡	(隅丸方形)	(5m前後)				掘り方のみ



第48図 住居跡、住居状遺構

### ② 住居状遺構

調査区域中央部から1棟検出された。1号陥し穴状遺構及び3号溝跡と重複し、南西部は搅乱を受け残存しない。平面形は隅丸方形である。

検出状況から平安時代前半と考えられる。

### ③ 焼土遺構

調査区域中央部と東部からそれぞれ1基ずつ検出された。平面形はどちらも不整形で、よく焼成を受けている。出土遺物はなく、時期や性格は不明である。

### ④ 溝跡

調査区域中央部から東部にかけて3条検出された。そのうち1条は他の2条に比べ規模が大きく、北から南へ延び、途中から東へ向きを変えており、区画溝の様相を呈している。北端が調査区域の北側にどのように延びているか、今後の調査によって明らかになることを期待したい。

3条のうち2条は住居跡を切っていることから、住居跡と同時代もしくはそれより新しいと考えられる。

## 2. 遺物

### (1) 縄文時代の遺物

土器は遺構外から縄文時代中期（大木8b式）の深鉢片がほぼ1個体分と、縄文時代晩期末の深鉢片が2点出土している。特に、中期の深鉢は底部に径6×8cmの梢円形状の穿孔があることから、甕棺の可能性があるが詳細は不明である。石器は住居跡の埋土中から石範が1点出土している。

### (2) 弥生時代の遺物

弥生時代初頭の鉢（口縁部、体部）や高坏（脚部）、弥生時代後半から末期にかけての甕（体部）が出土している。いずれも細片で、特に出土地点にまとまりはない。

### (3) 古代以降の遺物

遺構内を中心に土師器、須恵器、土製品、陶器、鉄製品が出土している。

土師器は坏、甕が主体である。坏はロクロ不使用とロクロ使用とがあり、その割合は約1対2である。

ロクロ不使用の坏は底部が平らに調整されているものが11点、丸底風のものが5点である。外面は体部に段を持つものが11点、ミガキが施されているものは17点ある。内面はミガキ後黒色処理されているものがほとんどである。また、底部に線刻されたものが1点出土しているが、これについては別項で触ることにする。

ロクロ使用の坏は、底部の切り離しはほとんどが回転糸切りであるが、回転範切りと静止糸切りのものもいくつかある。回転糸切りのものはほとんどが無調整である。また、墨書き土器（5点）、刻書き土器（1点）が出土しているが、これらについても別項で触ることにする。

甕はロクロ使用のものが1点で、それ以外はロクロ不使用である。ロクロ不使用のものでは底部に木葉痕と纖維圧痕が残るものがいくつかある。纖維圧痕についても別項で触ることにする。鉢、瓶、耳皿も出土している。特に、瓶は無底式のもの2点、多孔式のもの1点である。

須恵器は壺と甕で、土師器に比べ出土数は少ない。壺では墨書き土器が1点出土している。

陶器は灰釉長頸瓶の底部と肩部で、10号住居跡付近からの出土である。これについても別項で触ることにする。

土製品は紡錘車が住居跡の柱穴内から1点出土しており、機織りが行われていたことが推測される。鉄製品は刀子が1点出土している。

### ① 墨書き土器について

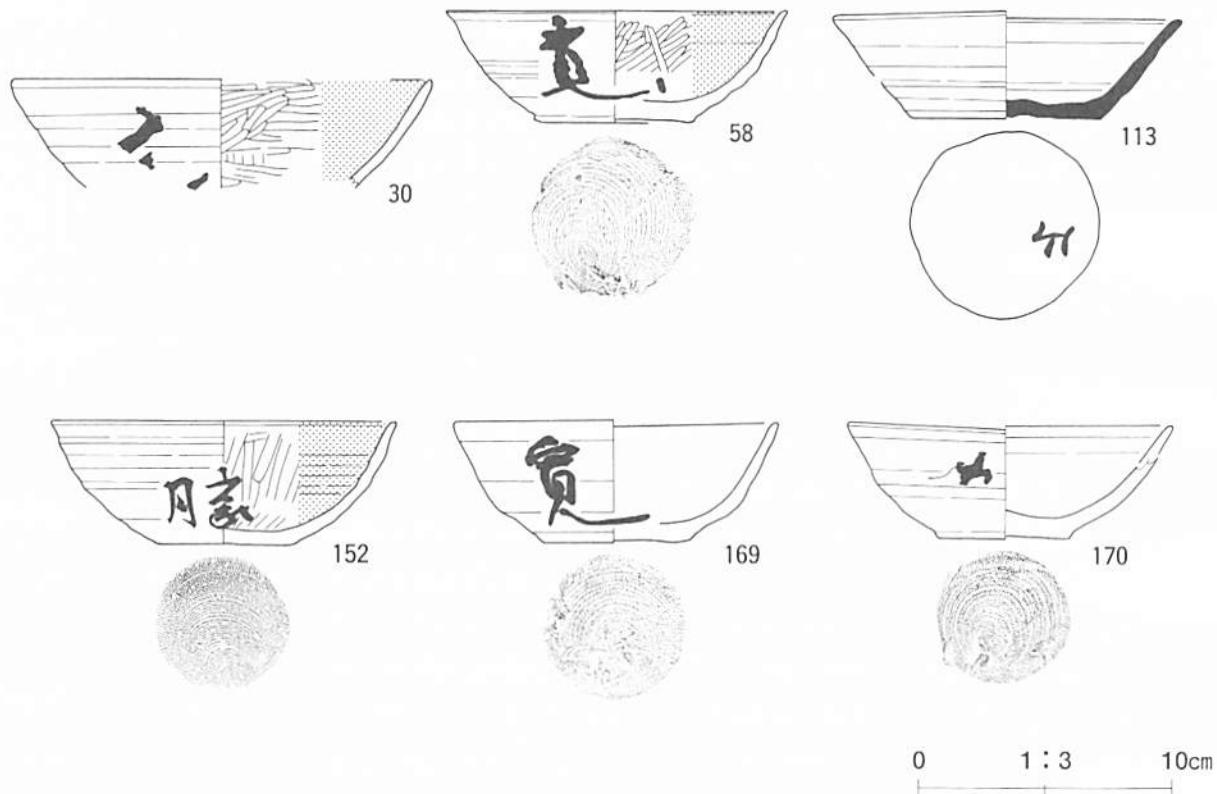
本遺跡からは墨書き土器が計6点(30・58・113・152・169・170)出土している。住居跡の柱穴内から1点、床上から2点、埋土中から1点、遺構外から2点である。

墨書き土器の器種は全てロクロ使用の土師器壺で、3点は内面がミガキ後黒色処理されている。また、底部が残存しているものが5点あるが、そのうち4点が底部切り離しは回転糸切りである。墨書きされている部位は、底部が1点、体部が5点である。体部に墨書きされているもののうち3点は正位に墨書きされており、他は不明である。なお、出土した墨書き土器については第11表と第49図にまとめて示してある。

墨書き土器には地名、人名、所属、吉祥句等が記されるといわれる。本遺跡で出土した墨書き土器には、「寛」(58、169)、「勝」(152)、「山」(113)<sup>註1</sup>の文字が認められる。これらは地名とは考えにくく、人名又は吉祥句の可能性が考えられるが詳細は不明である。

第11表 墨書き土器一覧表

番号	出 土 地 点	種類・器種	墨書き文字	部 位	備 考
30	4号住居跡・埋土	土師器壺	不明	体部	ロクロ 内面黒色処理
58	7号住居跡・P1埋土	土師器壺	寛	体部、正位	ロクロ 回転糸切り 内面黒色処理
113	10号住居跡・床上(Q3隅)	須恵器壺	山	底部	ロクロ 回転範切り
152	11号住居跡・床上(東隅)	土師器壺	勝	体部、正位	ロクロ 回転糸切り 内面黒色処理
169	BⅢ区一括・IV層	土師器壺	寛	体部、正位	ロクロ 回転糸切り
170	BⅡ区一括	土師器壺	不明	体部	ロクロ 回転糸切り



第49図 貝の淵I遺跡出土墨書き土器

### ② 刻書き土器について

遺構外から1点(179)出土している。器種はロクロ使用の土師器坏である。体部に正位で「本(本)」と刻書されている。細い工具で、「大」を刻み、次に「本」を刻んでいる。刻まれた順序から考え、文字を知っている者が刻んだとは考えにくい。吉祥区と考えられるが、詳細は不明である。

なお、近年石鳥谷町内で調査が行われた「稻荷遺跡」(奈良・平安時代の集落跡)の発掘調査では、「小田」と刻書された坏が2点出土している。いずれもロクロ使用の坏で、底部は回転糸切り、内面は黒色処理されている。詳細は不明であるとしている。

### ③ 底部線刻された土器について

遺構外から1点(44)出土している。器種はロクロ不使用の土師器坏で、内面はミガキ後黒色処理されている。底部は丸底風で、体部下端部に段を持っており、国分寺下層式併行と考えられる。線刻は底部外面に先端の鋭い工具で「×」形に施されている。

岩手県内では、底部線刻された坏の出土例が、百目木遺跡、太田方八丁遺跡、飯岡才川遺跡、熊堂B遺跡(以上盛岡市)、石田I・II遺跡(水沢市)、扇畑I遺跡、上の山VII遺跡(以上安代町)で報告されている。このうち、国分寺下層式併行の底部線刻された坏は、石田I・II遺跡、百目木遺跡、熊堂B遺跡において見られる。4遺跡とも線刻のモチーフが「×」を基調としている点は同じであるが、「丸底・体部有段」(石田

I・II遺跡、百目木遺跡)と「平底・体部有段」(熊堂B遺跡)という点で異なる。

本遺跡出土の底部線刻された坏は、「×」をモチーフとし、「丸底・体部有段」という点から、石田I・II遺跡、百目木遺跡と同じといえる。

#### ④ 繊維圧痕のある土器について

古代の土器の底部圧痕としては木葉痕が一般的であるが、編み物または織物の繊維圧痕を持つものもある。これらはムシロ底と呼ばれているが、本遺跡ではそのムシロ底を持つ土器が2点(10・183)出土している。どちらもロクロ不使用の甕である。

稻野(1995)によれば、東北地方の古代の繊維圧痕には3種類あるとされる。すなわち、A種:タタミに類似したもの、B種:アンギンに類似したもの、C種:スダレ、タワラに類似したものである。更に、A種は東北地方全域に分布し、9世紀前葉のものが東北地方南半部に、9世紀後半から10世紀前葉のものが南半部と中央部に、10世紀から11世紀のものが津軽地方に分布するとしている。

本遺跡出土の2点はいずれもA種に相当すると考えられる。また、本遺跡は時期が平安時代前半(9~10世紀)と考えられることから、分布時期もほぼ合致しているといえる。

岩手県内でこれまで繊維圧痕のある土器が出土しているのは、大曲遺跡(石鳥谷町)、下谷地A遺跡、金成遺跡(以上北上市)などである。特に大曲遺跡は、本遺跡の北北東約800mにあることと時期が9世紀後半代であることから、本遺跡と何らかの関連が考えられる。

#### ⑤ 灰釉陶器について

遺構外から2点(189・190)出土している。どちらも長頸瓶で、接合しないが同一個体と考えられる。よく焼成しており、内面には鉄分が変色して黒い斑点状にみられる。これは大戸窯(福島県会津若松市)で焼かれたものにみられる特徴であることから、この2点は同窯で焼かれた可能性がある。

岩手県内でこれまで、古代、特に平安時代前半までの遺跡で灰釉陶器が出土したのは、白井坂Ⅱ遺跡(皿、椀)、胆沢城(椀、皿、三耳壺)(以上水沢市)、小十文字遺跡(椀)、要害遺跡(長頸瓶)(以上胆沢町)、徳丹城(紫波町)がある。

灰釉陶器は、当時一般民衆が持ち得なかつたものであり、これが出土したことから、当時、本遺跡に有力者—例えば胆沢城や徳丹城と何らかの関係を持っていた人物—が存在していた可能性がある。<sup>註3</sup>

#### 註

1 墨書き器の文字判読は石崎高臣((財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)が行った。

2 飯岡才川遺跡の報告では、報告者は線刻された土器については特に触れていないが、実測図と写真から坏(遺物掲載番号9)の底部に「×」形に線刻されているのが認められる。当該遺物はロクロ使用の土師器坏で、内面は黒色処理され、底部切り離しは回転糸切りである。時期は平安時代前期(9世紀代)としている。

3 濑戸市埋蔵文化財センター・藤澤良祐氏のご教示による。また、愛知県陶磁資料館・井上喜久男氏にも本遺物を実見していただいたところ、東海地方の上で造られたものではないという指摘を受けている。このことから、本遺跡で出土した灰釉長頸瓶は大戸窯で焼かれた可能性があるとした。

#### 引用・参考文献

- 稻野 彰子（1995）：「いわゆるムシロ底について」 北上市立博物館『北上市立博物館研究報告』第10号
- 岩手県立博物館（1982）：「岩手の土器」
- 都南村（現盛岡市）教育委員会（1980）：「百日木遺跡発掘調査報告書」
- 盛岡市教育委員会（1979）：「太田方八丁遺跡」
- 岩手県教育委員会（1982）：「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」 岩手県文化財調査報告書34集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1981）：「二戸郡安代町扇畠Ⅰ遺跡」 岩埋文第17集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1983）：「岩手県安代町上の山田遺跡発掘調査報告書」  
岩埋文第60集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1988）：「石川Ⅱ・寺領・西光田Ⅰ遺跡発掘調査報告書」  
岩埋文第130集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2002）：「熊堂B遺跡第10次発掘調査報告書」 岩埋文第377集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2002）：「大向Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 岩埋文第378集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2002）：「飯岡才川遺跡第3次発掘調査報告書」 岩埋文第393集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2002）：「福荷遺跡発掘調査報告書」 岩埋文第408集

写 真 図 版



遺跡遠景（南から）

写真図版 1 遺跡遠景



遺跡近景（北西から）



遺跡近景（東から）

写真図版 2 遺跡近景

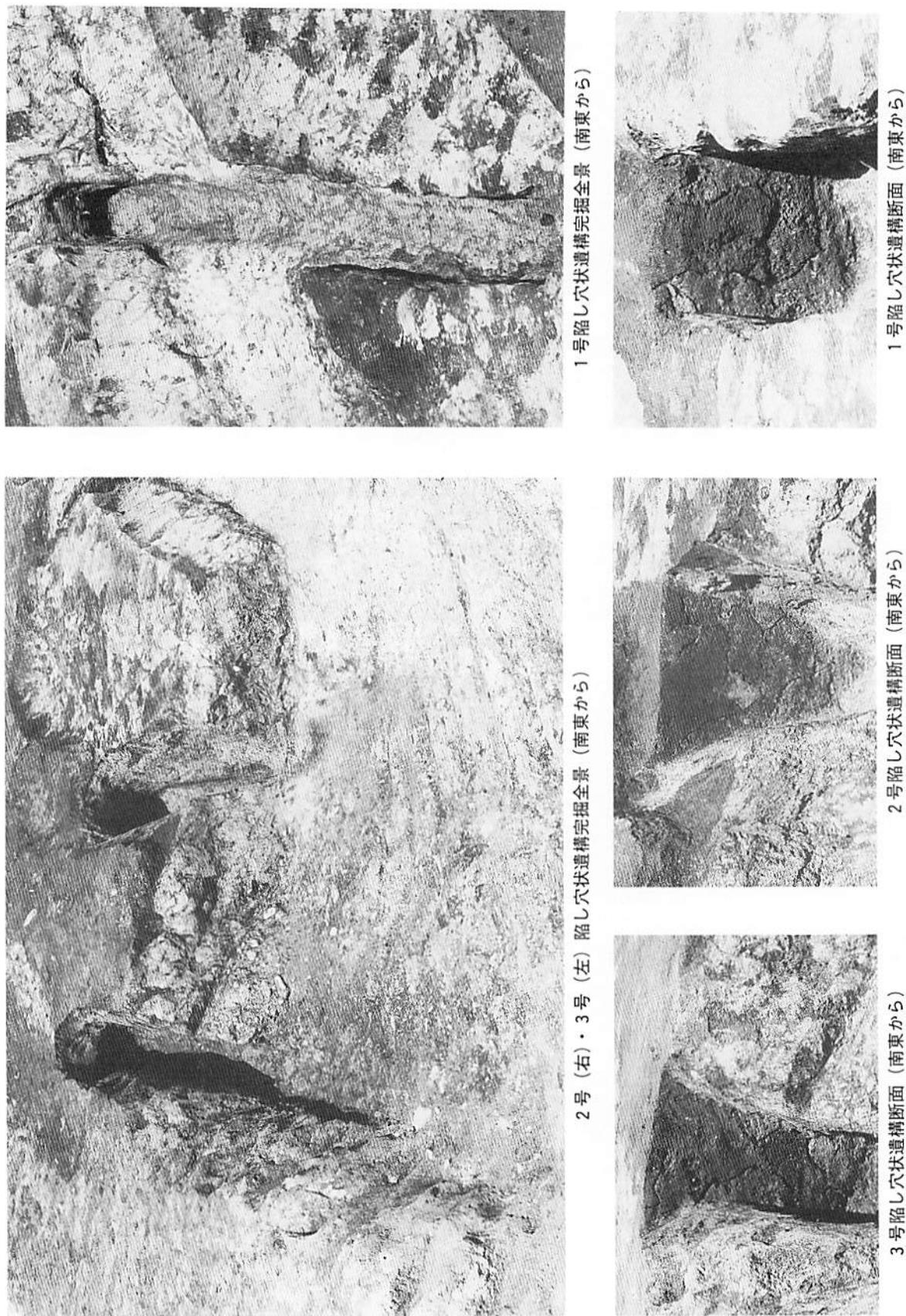


遺跡全景（南西から）



土層断面（西から）

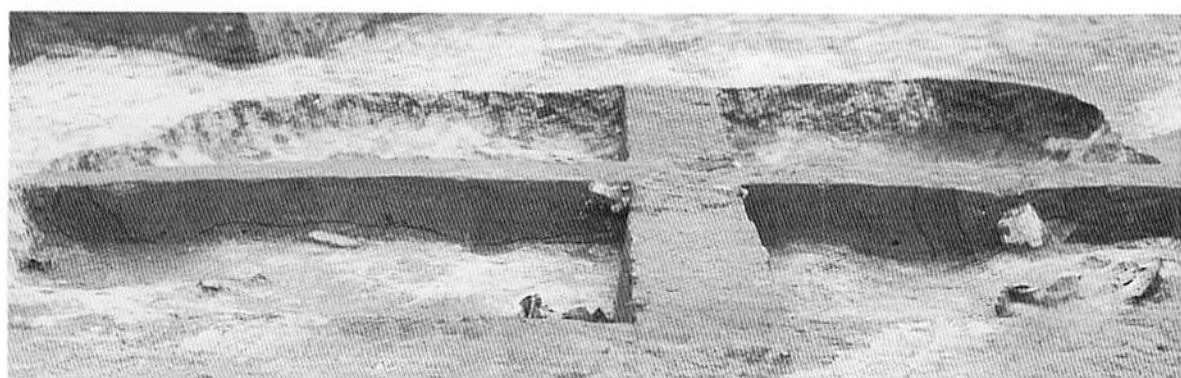
写真図版3 遺跡全景、土層断面



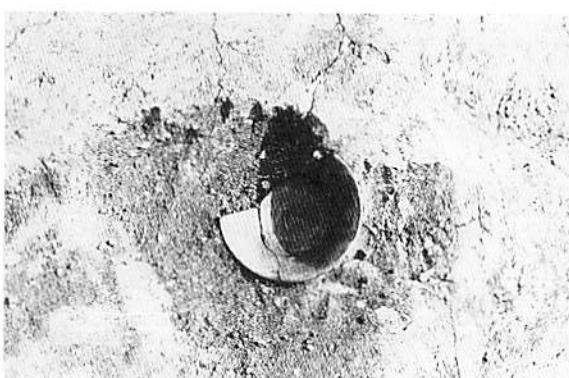
写真図版4 1号・2号・3号陷し穴状遺構



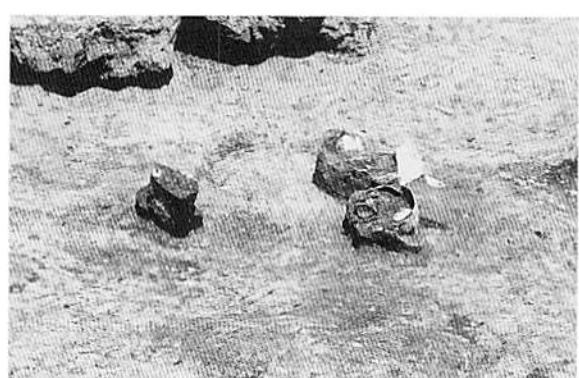
1号住居跡完掘全景（南から）



1号住居跡断面（東から）



遺物出土状況（北から）

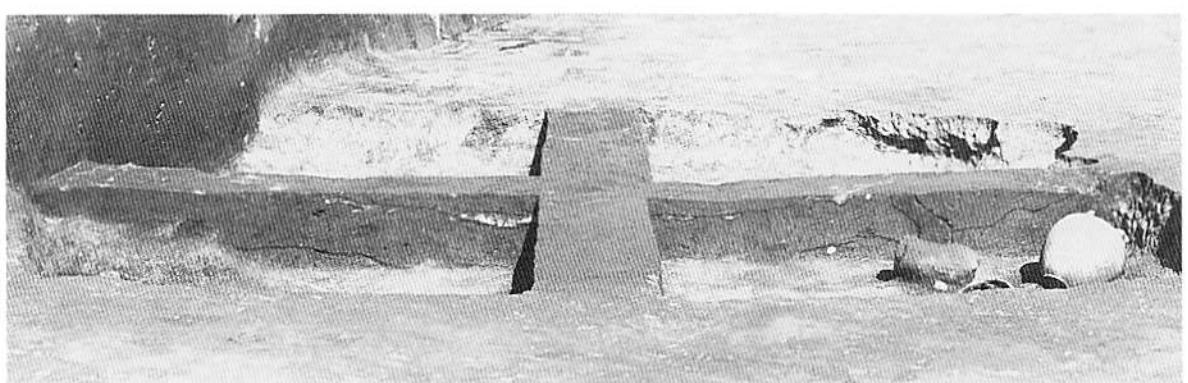


カマド検出状況（南から）

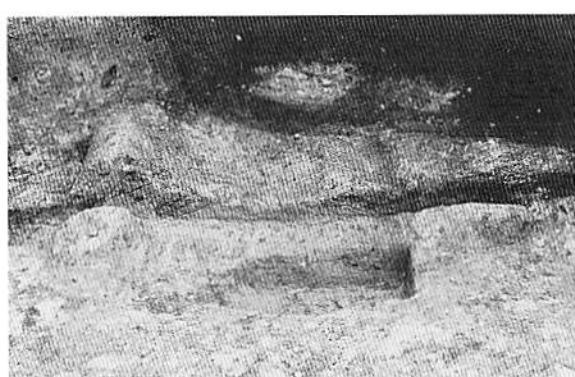
写真図版5 1号住居跡



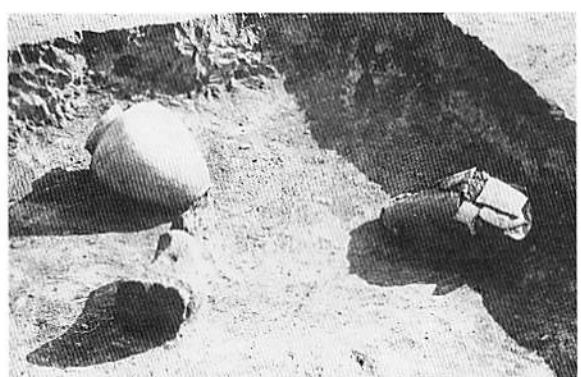
2号住居跡完掘全景（南から）



2号住居跡断面（西から）



カマド燃焼部焼土断面（南から）



遺物出土状況（北東から）

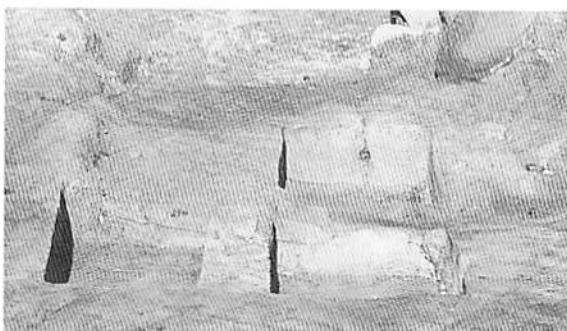
写真図版 6 2号住居跡



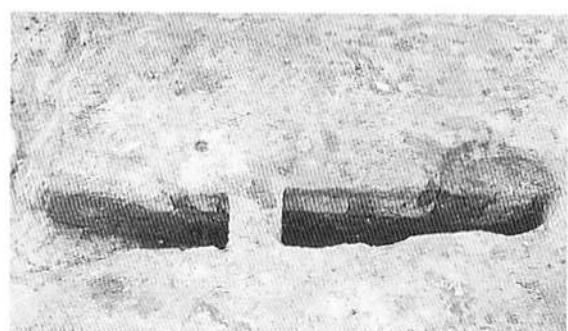
3号住居跡完掘全景（西から）



3号住居跡断面（北から）



カマド燃焼部焼土断面（西から）

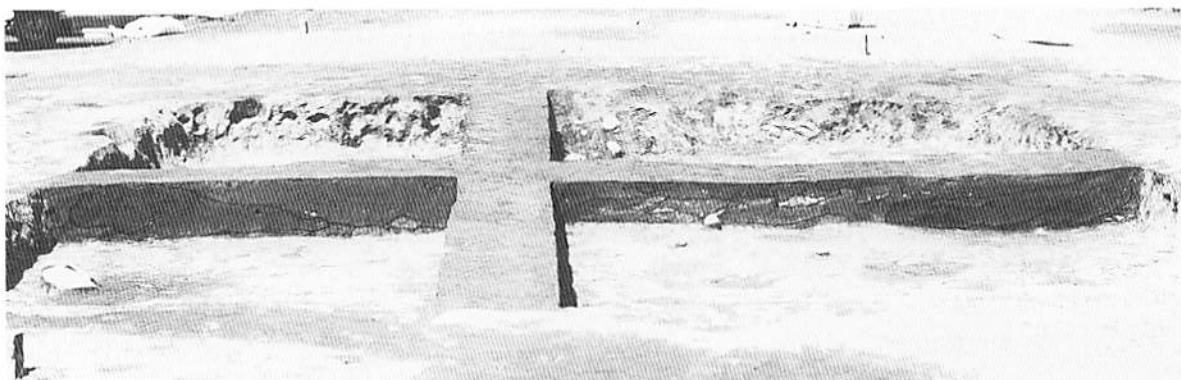


カマド煙道部断面（南から）

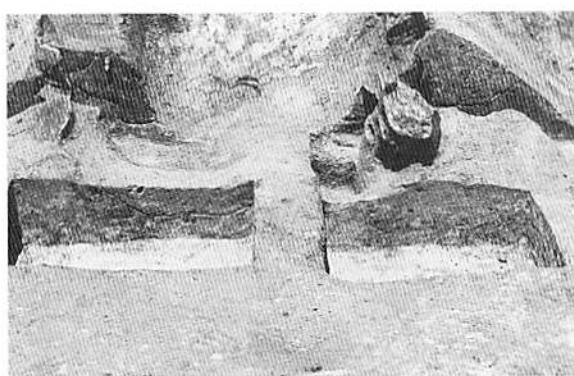
写真図版7 3号住居跡



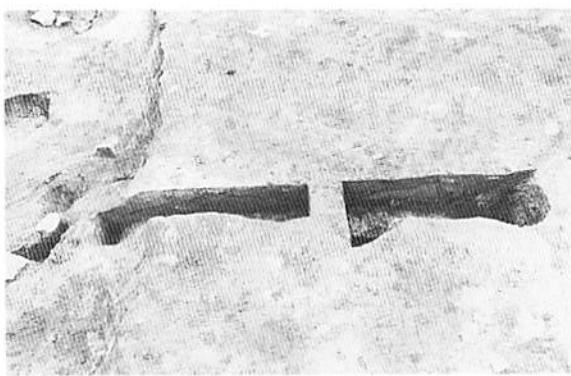
4号住居跡完掘全景（南から）



4号住居跡断面（南から）



カマド燃焼部焼土断面（南から）

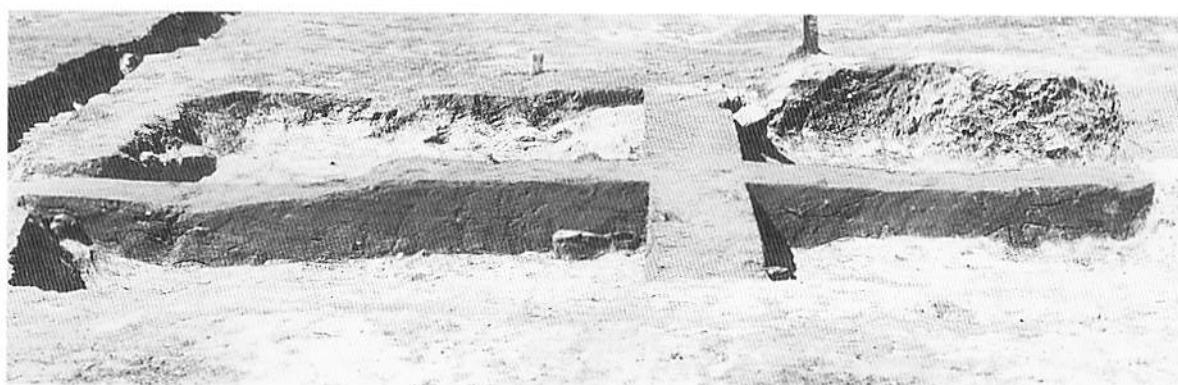


カマド煙道部断面（東から）

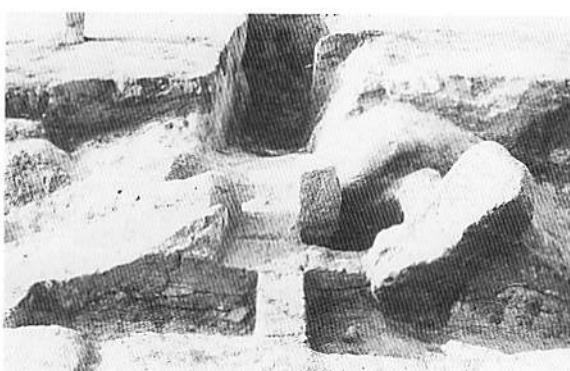
写真図版 8 4号住居跡



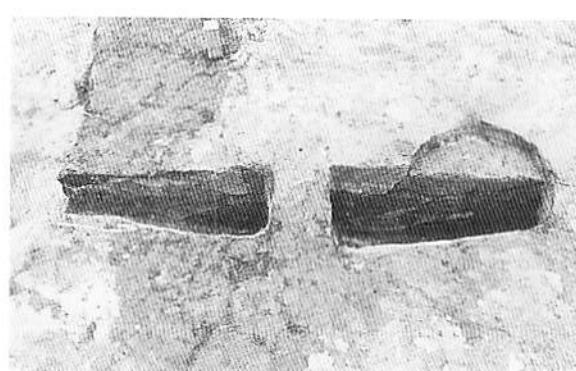
5号住居跡完掘全景（南から）



5号住居跡断面（南から）



カマド燃焼部焼土断面（南から）

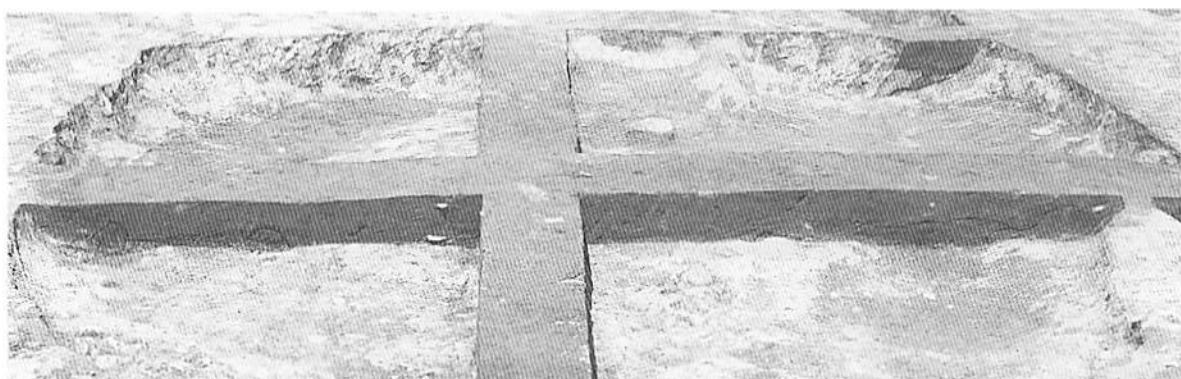


カマド煙道部断面（東から）

写真図版9 5号住居跡



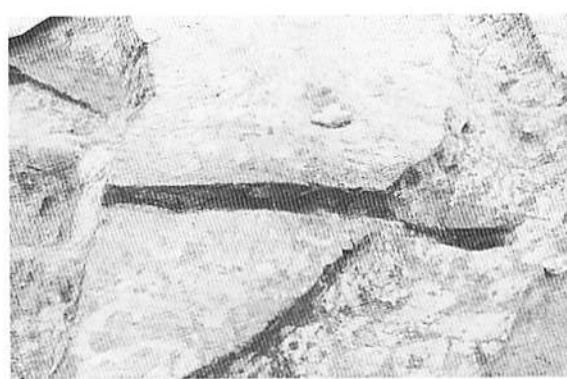
6号住居跡完掘全景（南から）



6号住居跡断面（南から）



カマド燃焼部焼土断面（南から）

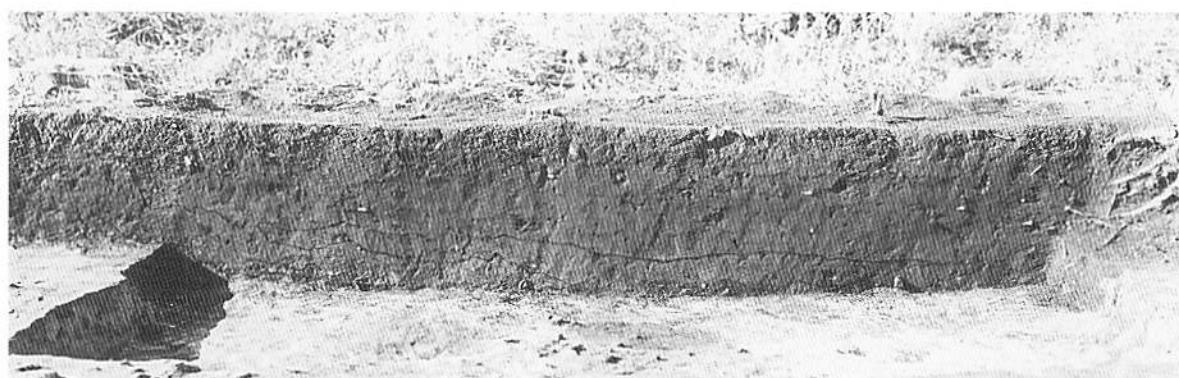


カマド煙道部断面（東から）

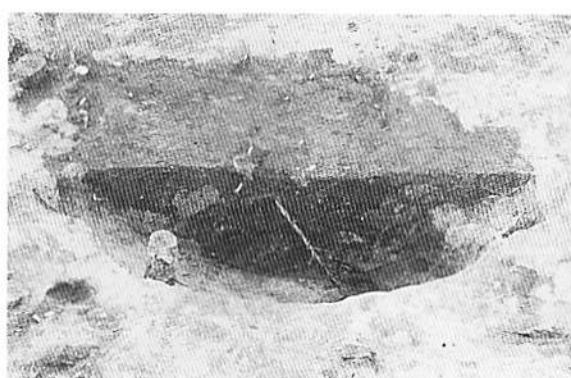
写真図版10 6号住居跡



7号住居跡完掘全景（南から）



7号住居跡断面（南から）



P2断面（南から）

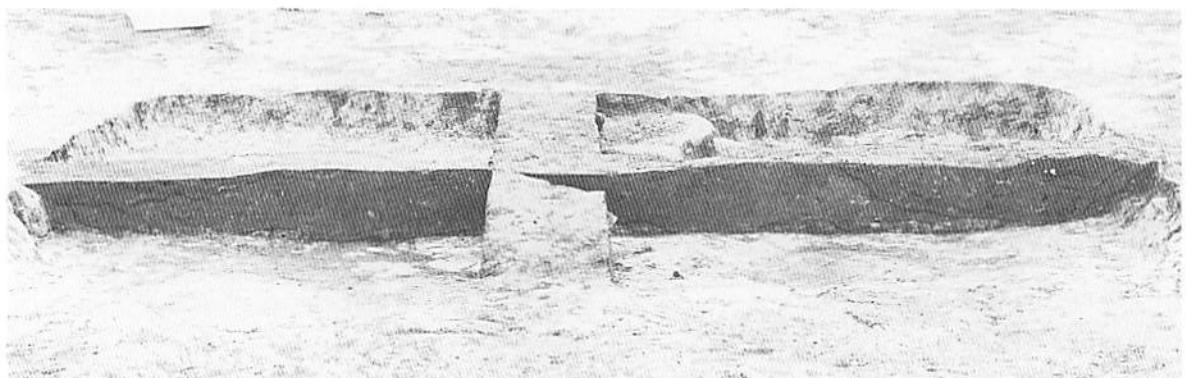


作業の様子

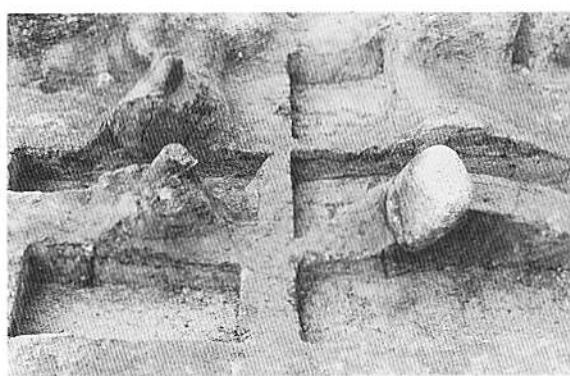
写真図版11 7号住居跡



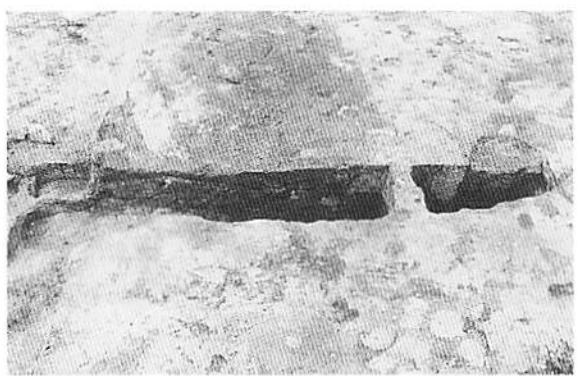
8号住居跡完掘全景（南から）



8号住居跡断面（南から）



カマド燃焼部焼土断面（南から）

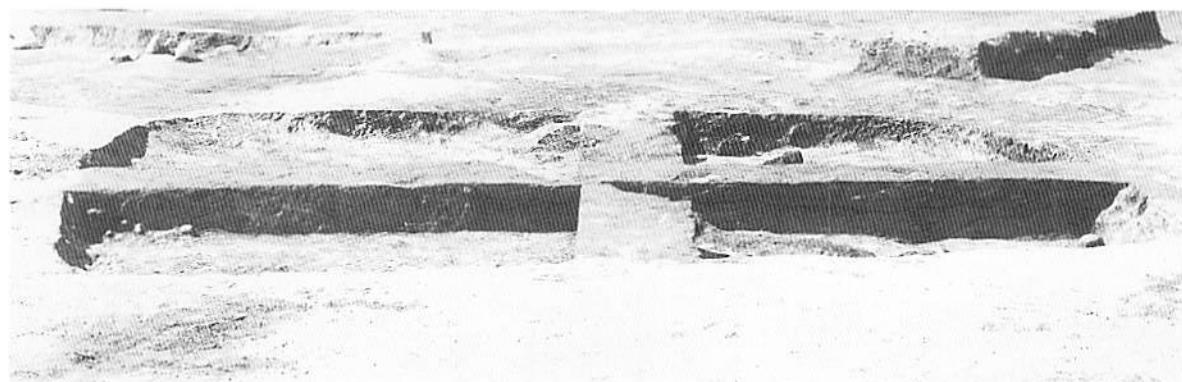


カマド煙道部断面（東から）

写真図版12 8号住居跡



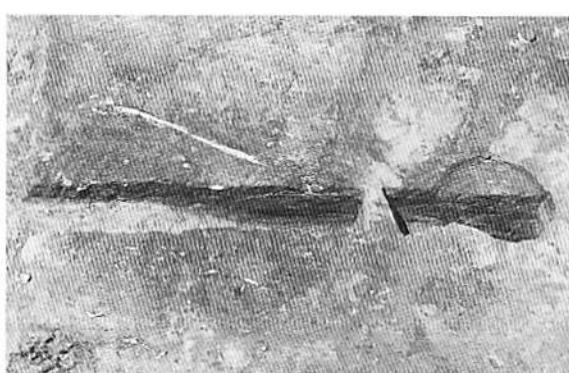
9号住居跡完掘全景（南東から）



9号住居跡断面（南東から）



炭化材出土状況（南東から）

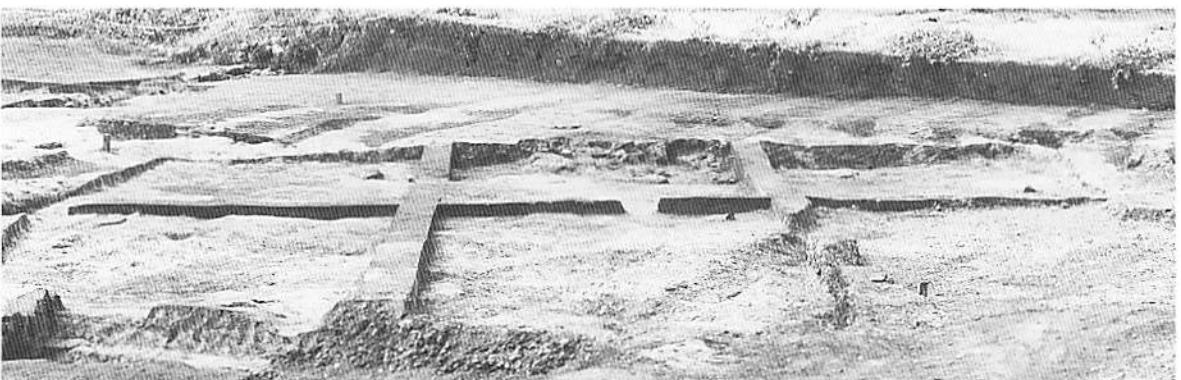


カマド煙道部断面（北東から）

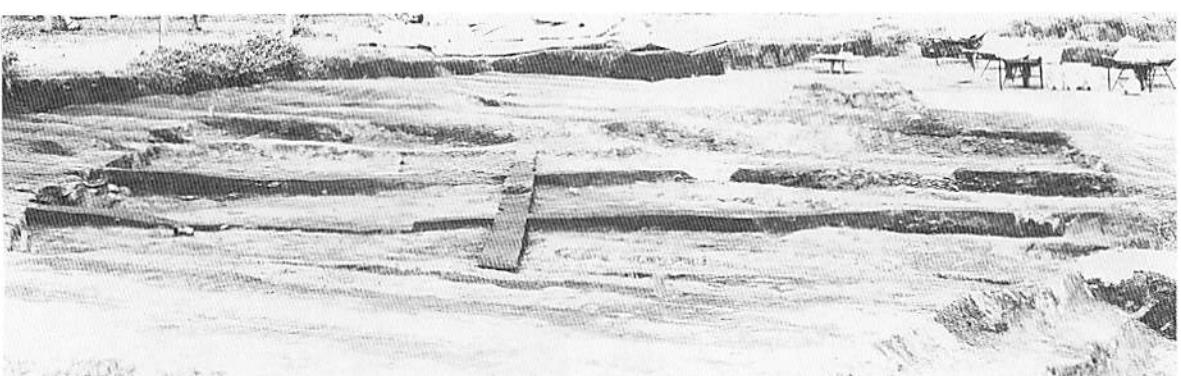
写真図版13 9号住居跡



10号住居跡完掘全景（南から）



10号住居跡断面（南から）



10号住居跡断面（西から）

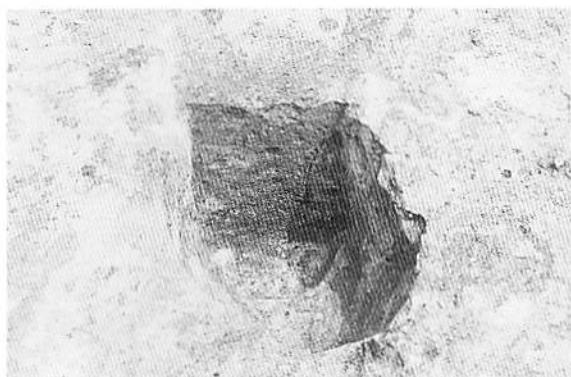
写真図版14 10号住居跡（1）



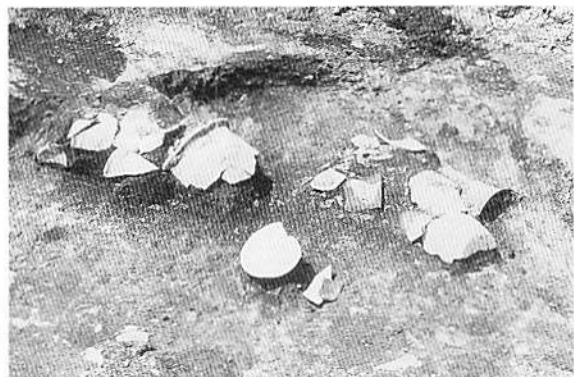
2号カマド検出状況（南から）



カマド精査途中（左：2号、右：1号）（南から）



P 12断面（南から）

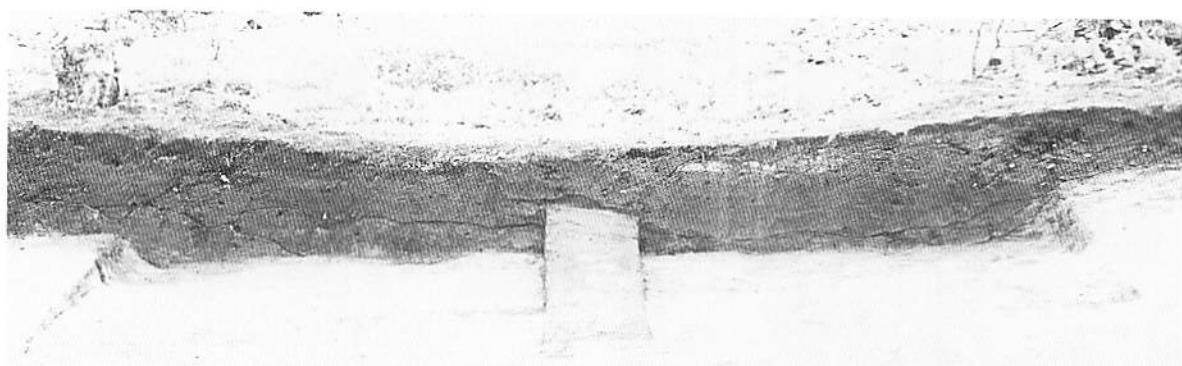


遺物出土状況（南西から）



11号住居跡完掘全景（南から）

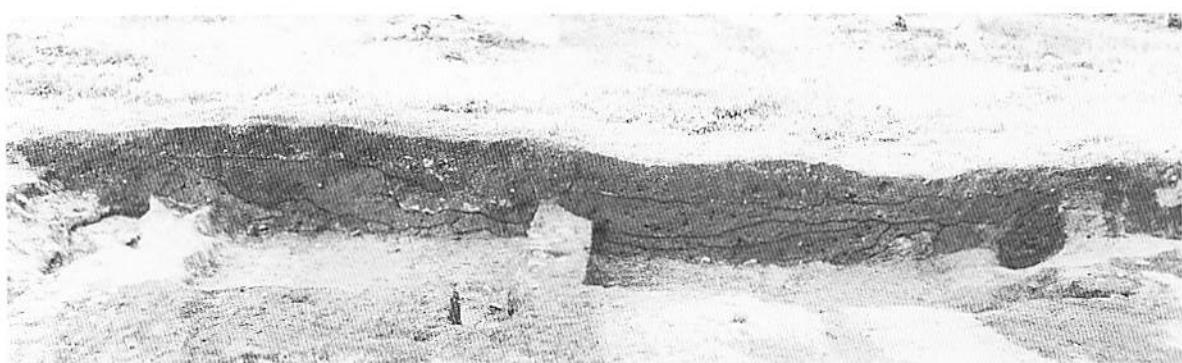
写真図版15 10号住居跡（2）、11号住居跡（1）



11号住居跡断面（南から）

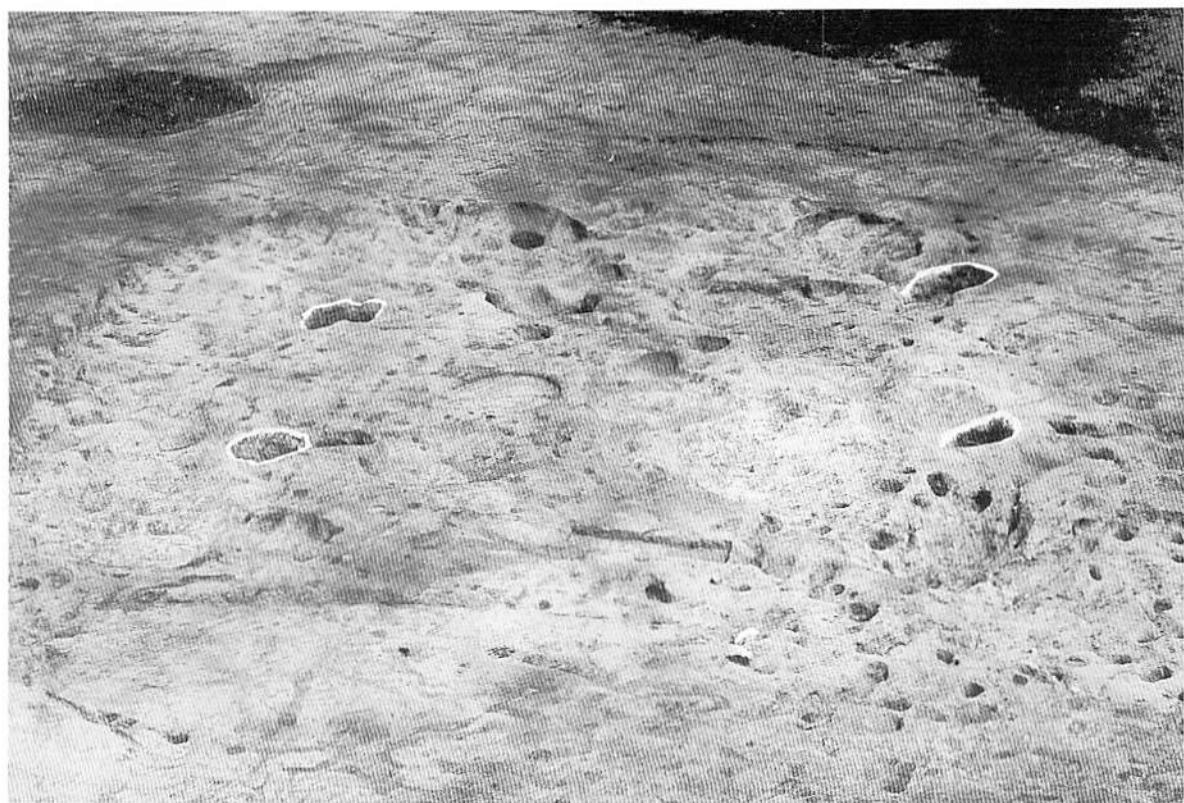


12号住居跡完掘全景（南から）



12号住居跡断面（南から）

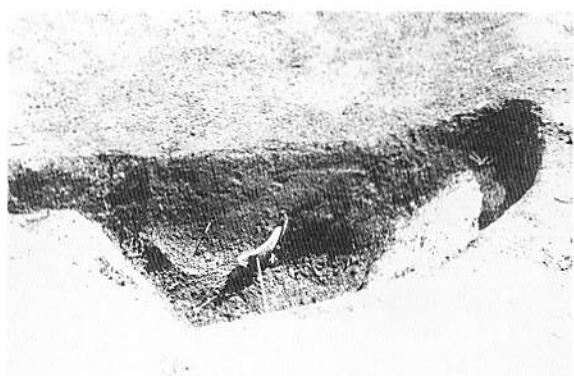
写真図版16 11号住居跡（2）、12号住居跡



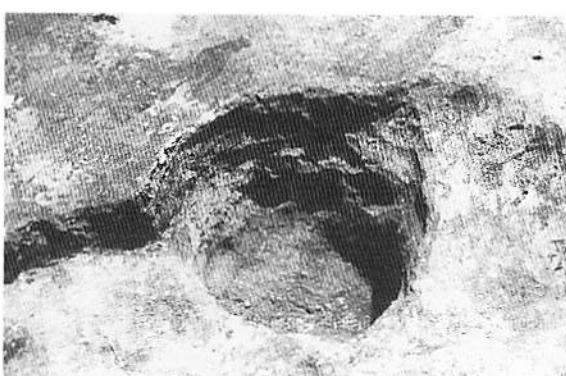
13号住居跡完掘全景（南から）



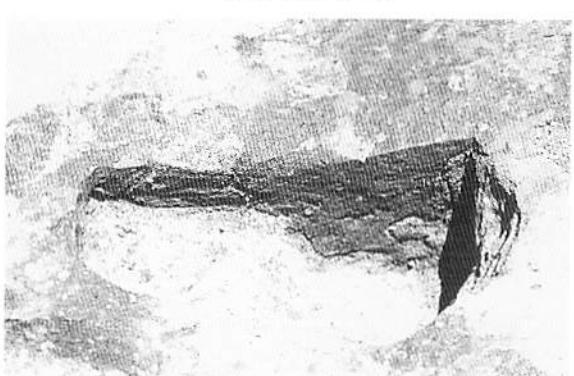
P 8 完掘全景（南西から）



P 8 断面（南西から）



P 4 完掘全景（西から）



P 5 断面（南西から）

写真図版17 13号住居跡



住居状遺構完掘全景（南から）



住居状遺構断面（南から）



1号焼土平面（東から）

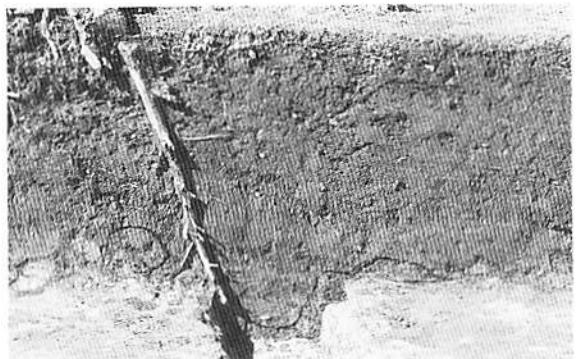


2号焼土断面（西から）

写真図版18 住居状遺構、1号・2号焼土遺構



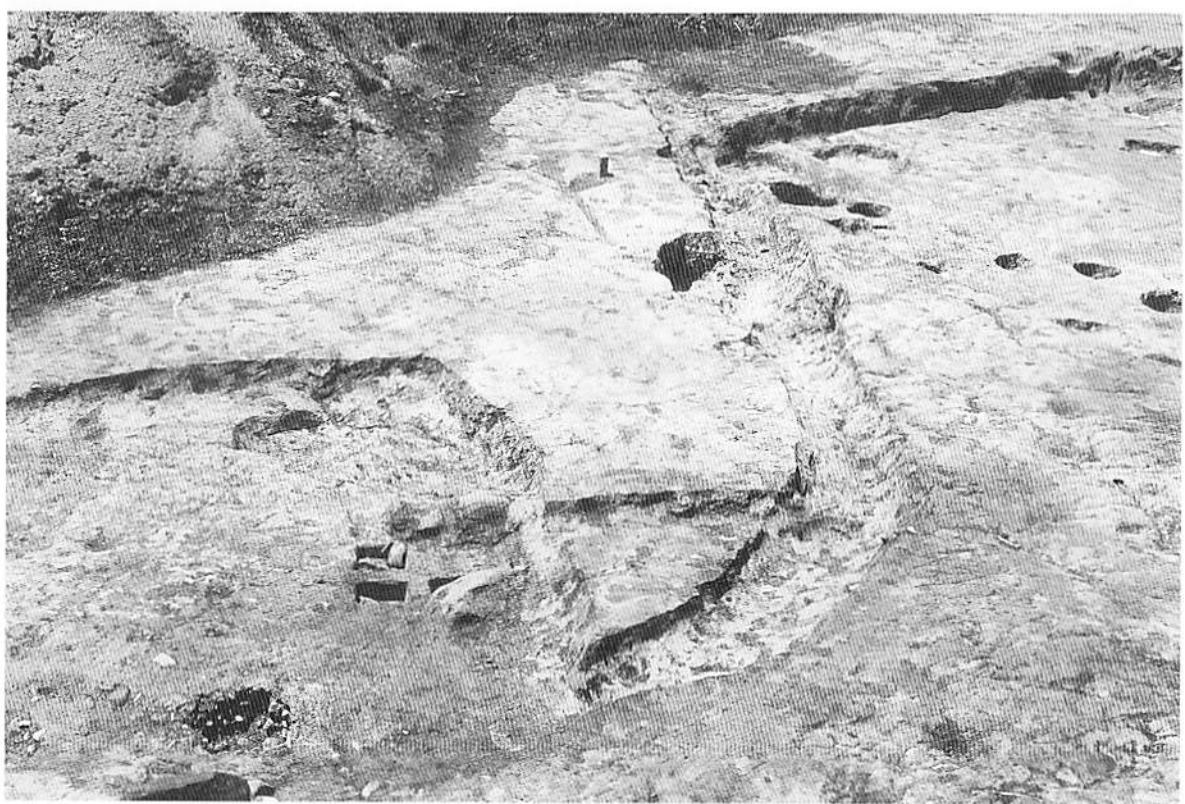
1号溝跡完掘全景（南から）



1号溝跡断面（C-C'）（南から）

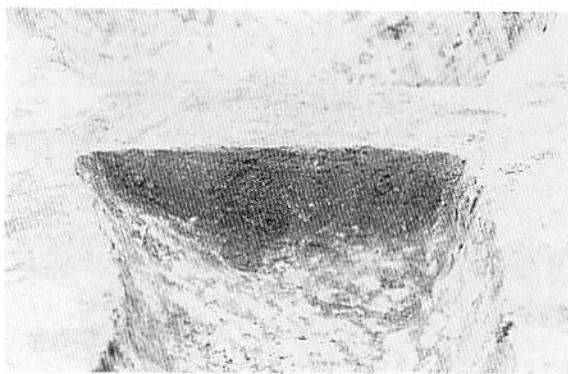


1号溝跡断面（B-B'）（南から）

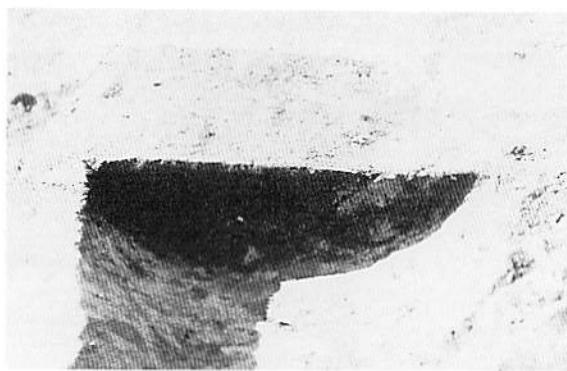


2号溝跡完掘全景（東から）

写真図版19 1号溝跡、2号溝跡（1）



2号溝跡断面A-A'（東から）



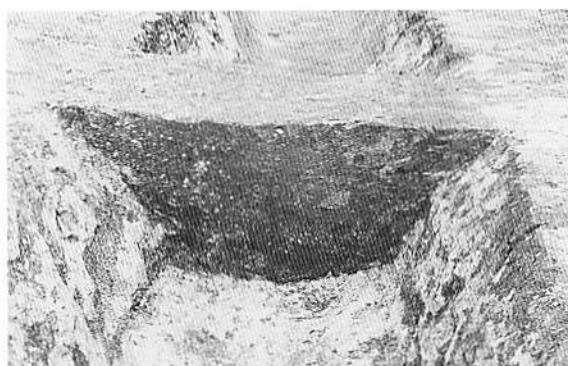
2号溝跡断面B-B'（南から）



3号溝跡完掘全景（西から）

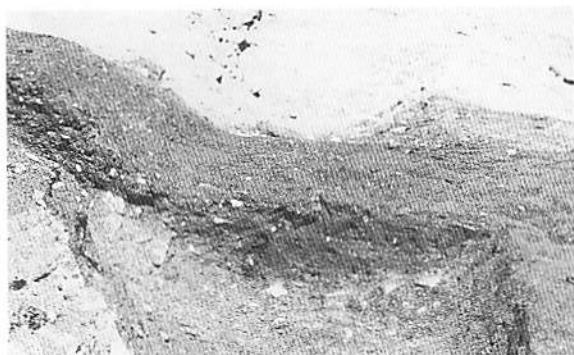


3号溝跡断面A-A'（南から）

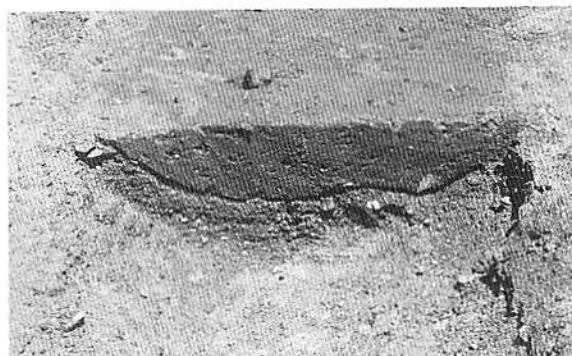


3号溝跡断面B-B'（西から）

写真図版20 2号溝跡（2）、3号溝跡（1）



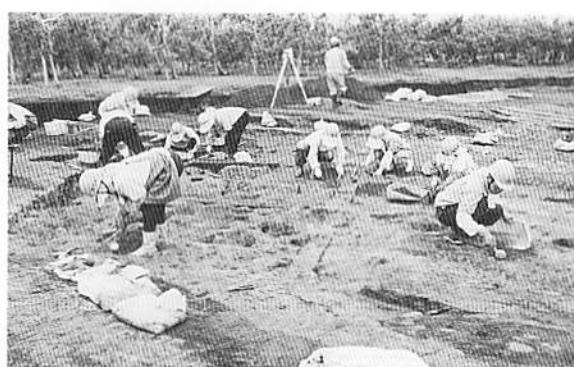
3号溝跡断面C-C'（西から）



3号溝跡断面D-D'（西から）



遺跡近景（調査後）（西から）

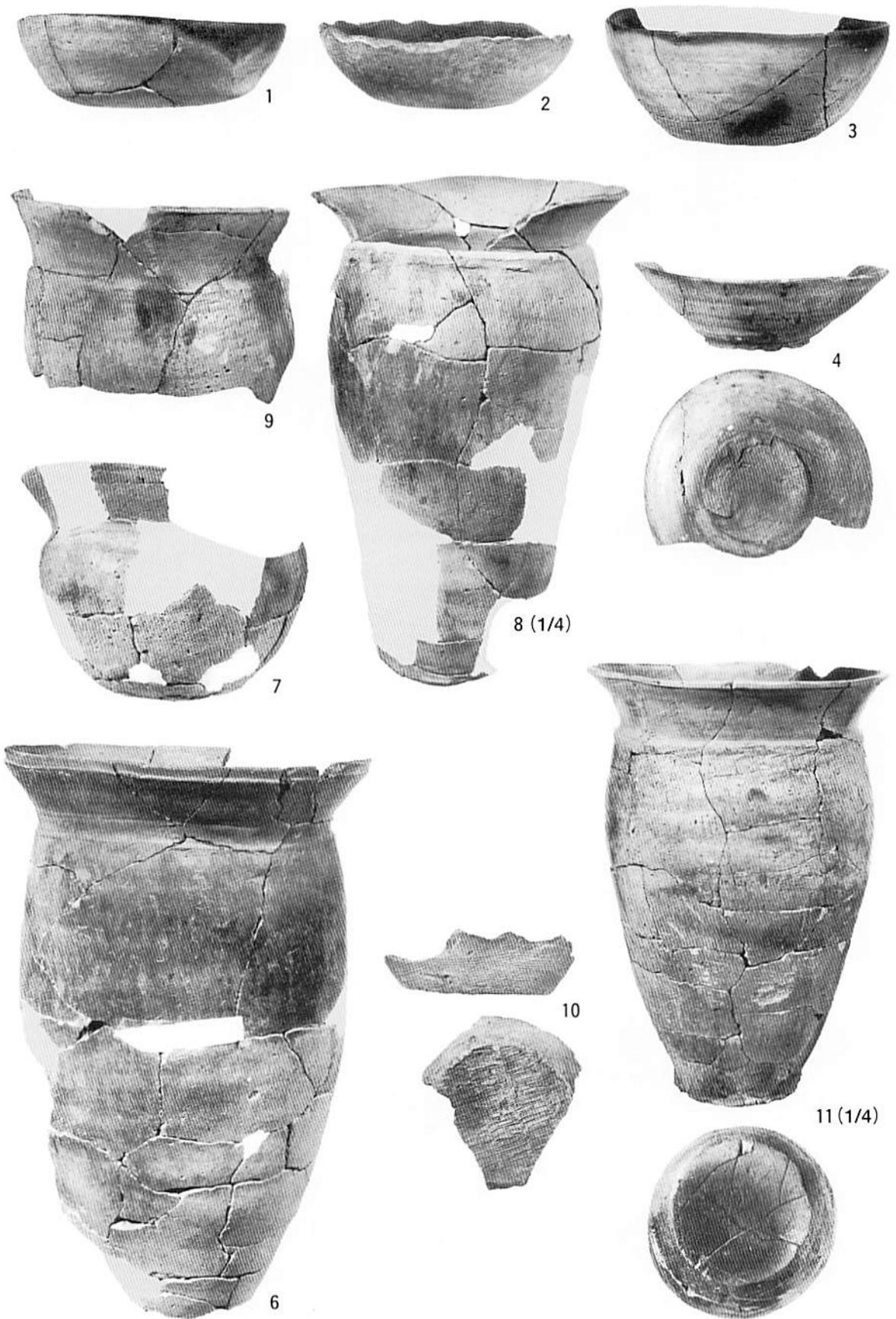


作業の様子



小学生の遺跡見学

写真図版21 3号溝跡（2）、遺跡近景、作業の様子、小学生の遺跡見学



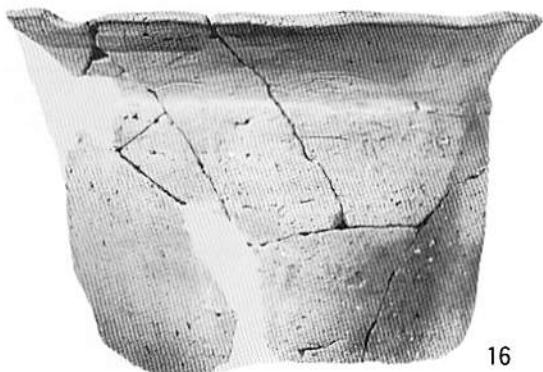
写真図版22 遺構内出土遺物（1）



5



12



16



14



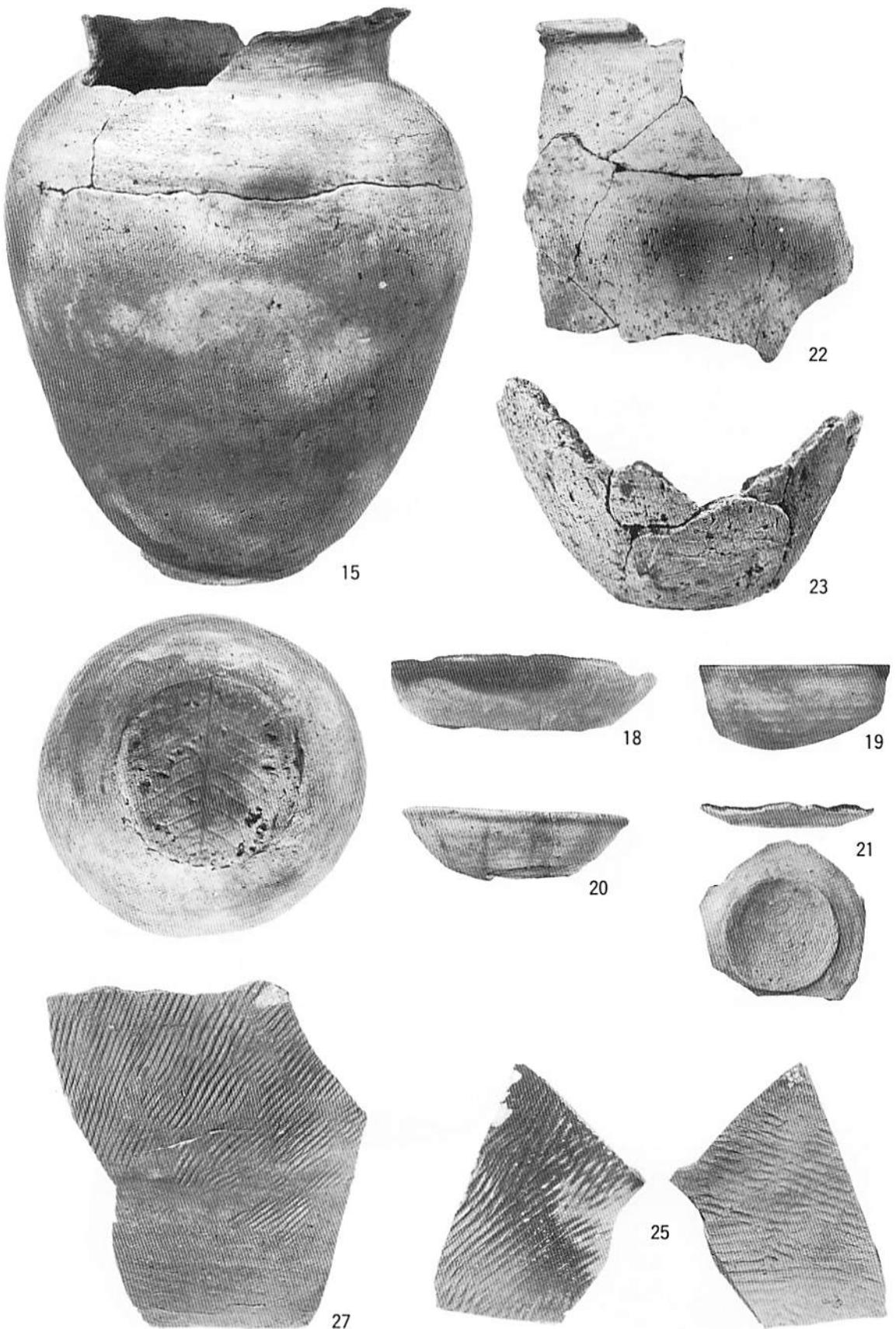
17



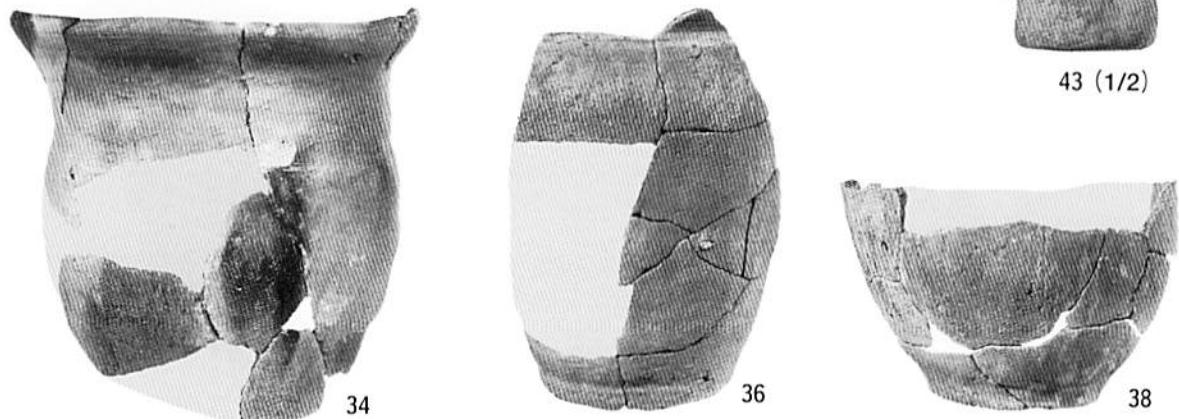
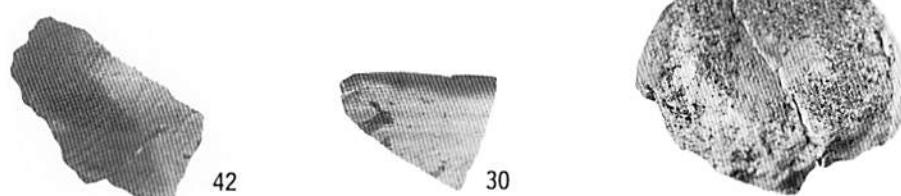
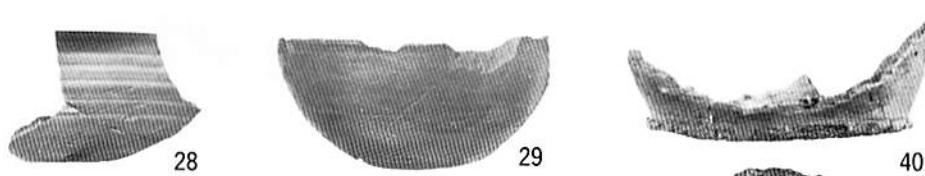
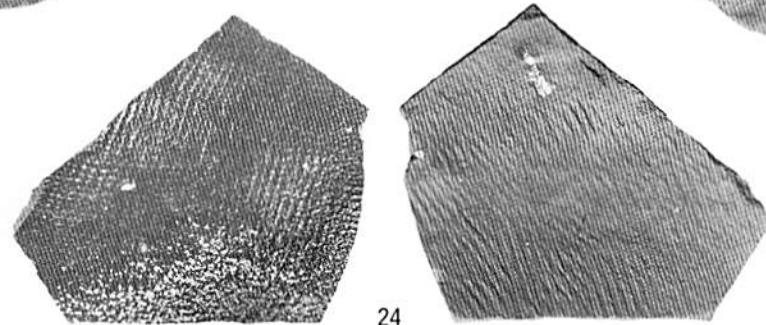
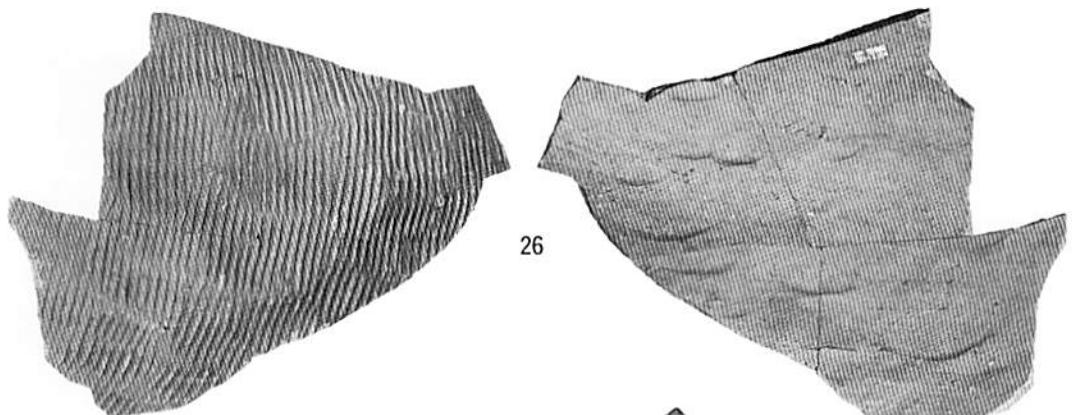
13



写真図版23 遺構内出土遺物（2）



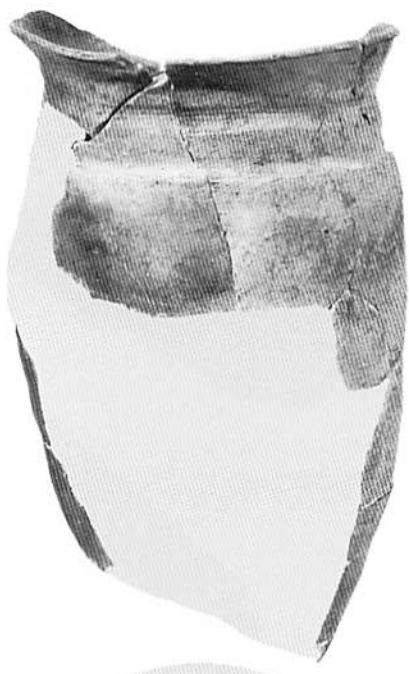
写真図版24 遺構内出土遺物（3）



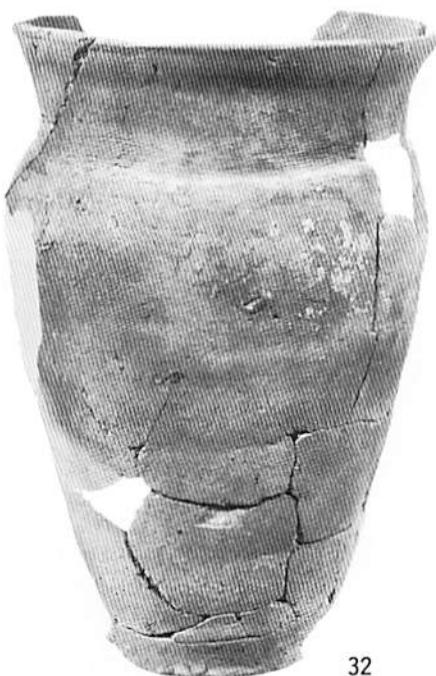
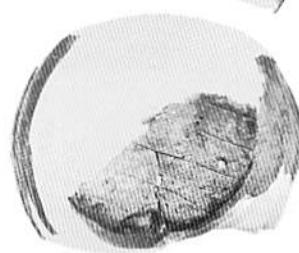
写真図版25 遺構内出土遺物 (4)



31



33

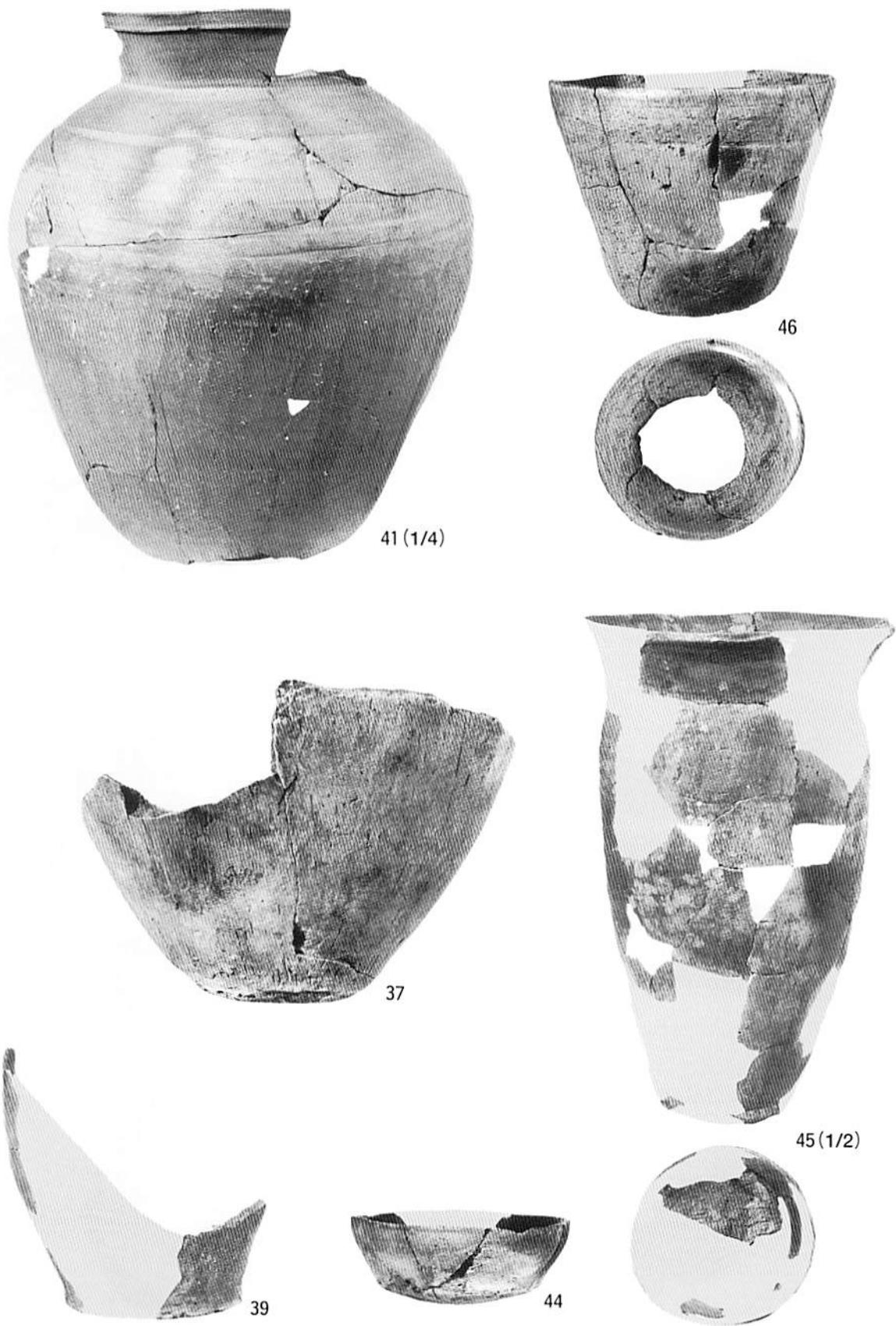


32

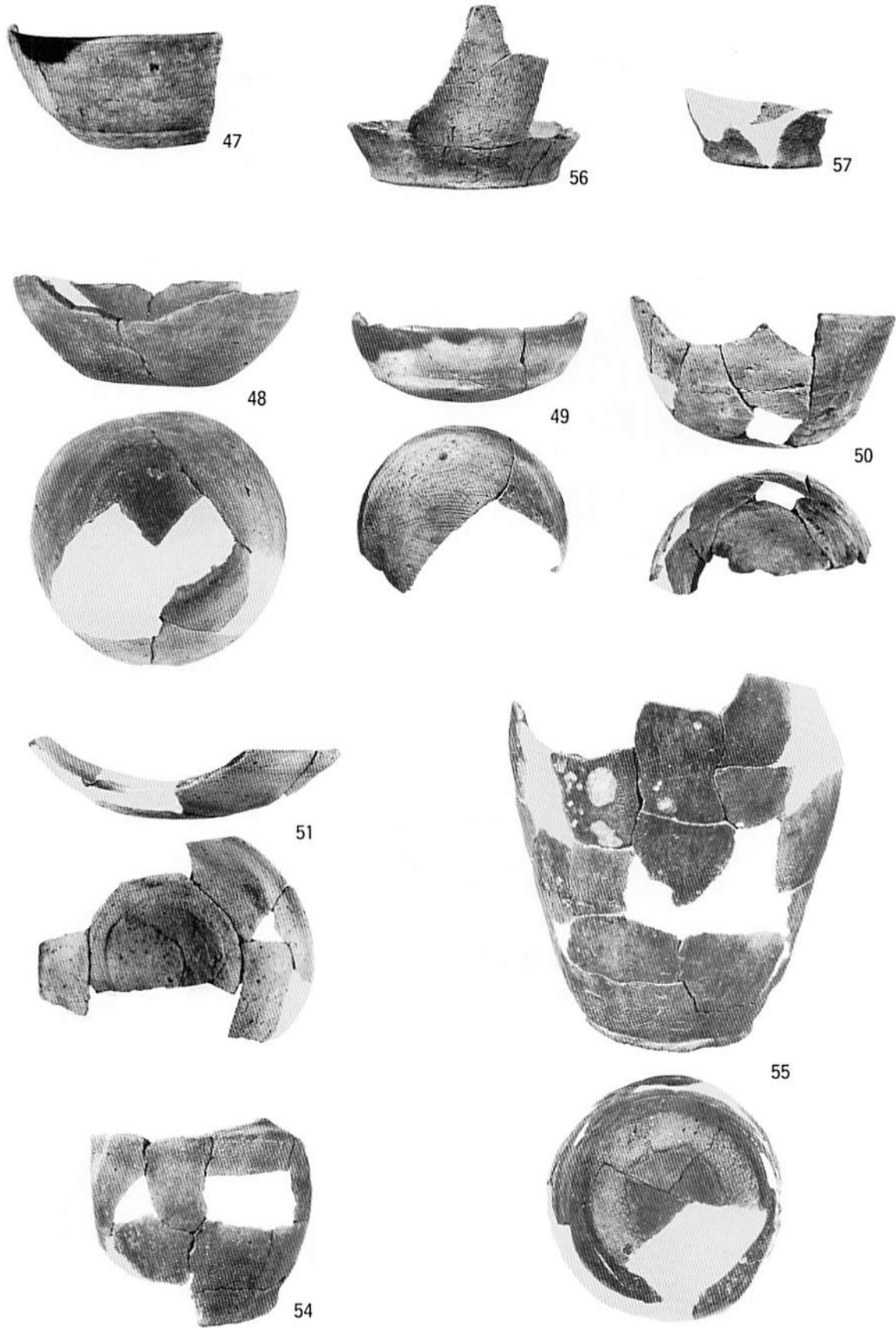


35

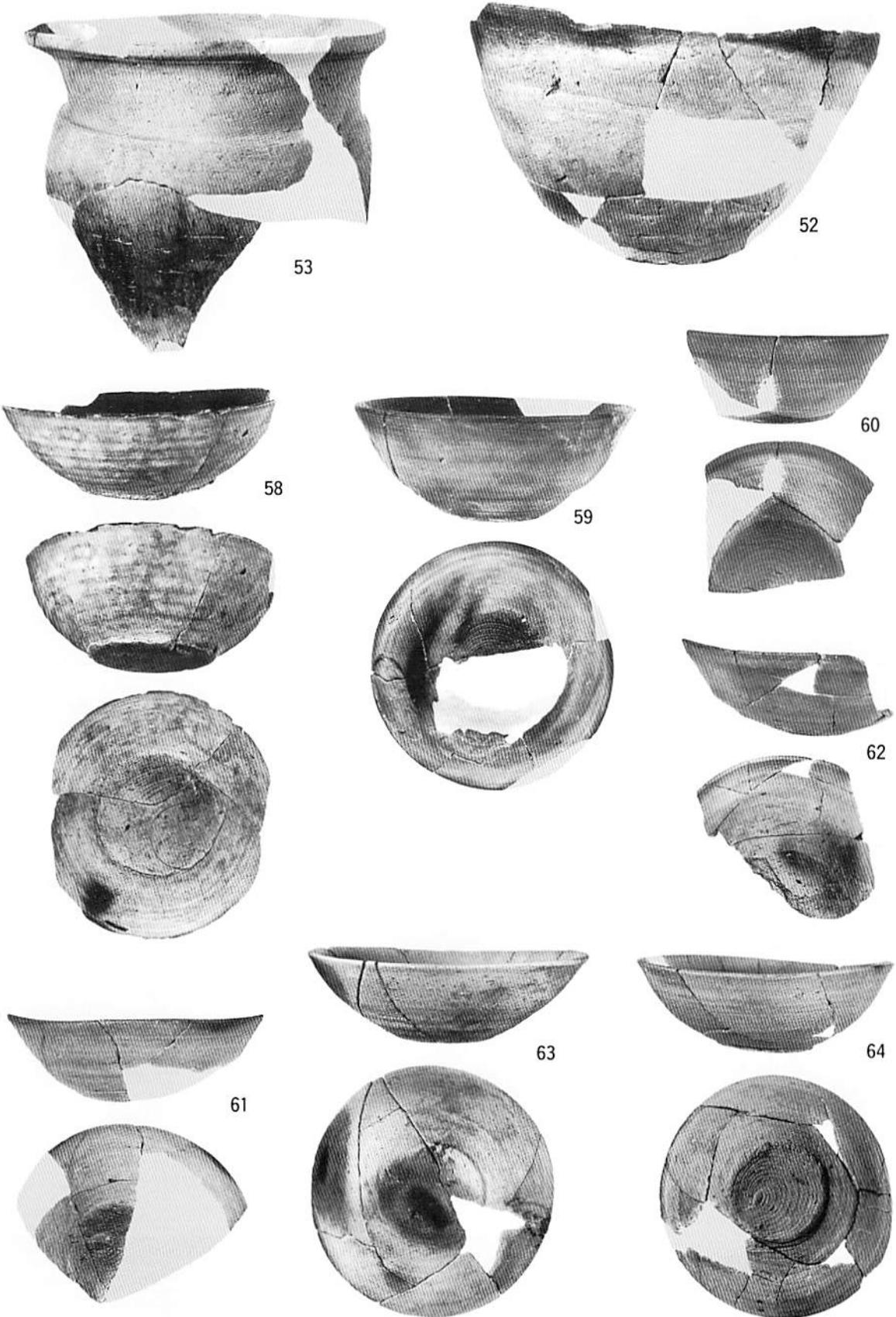
写真図版 26 遺構内出土遺物 (5)



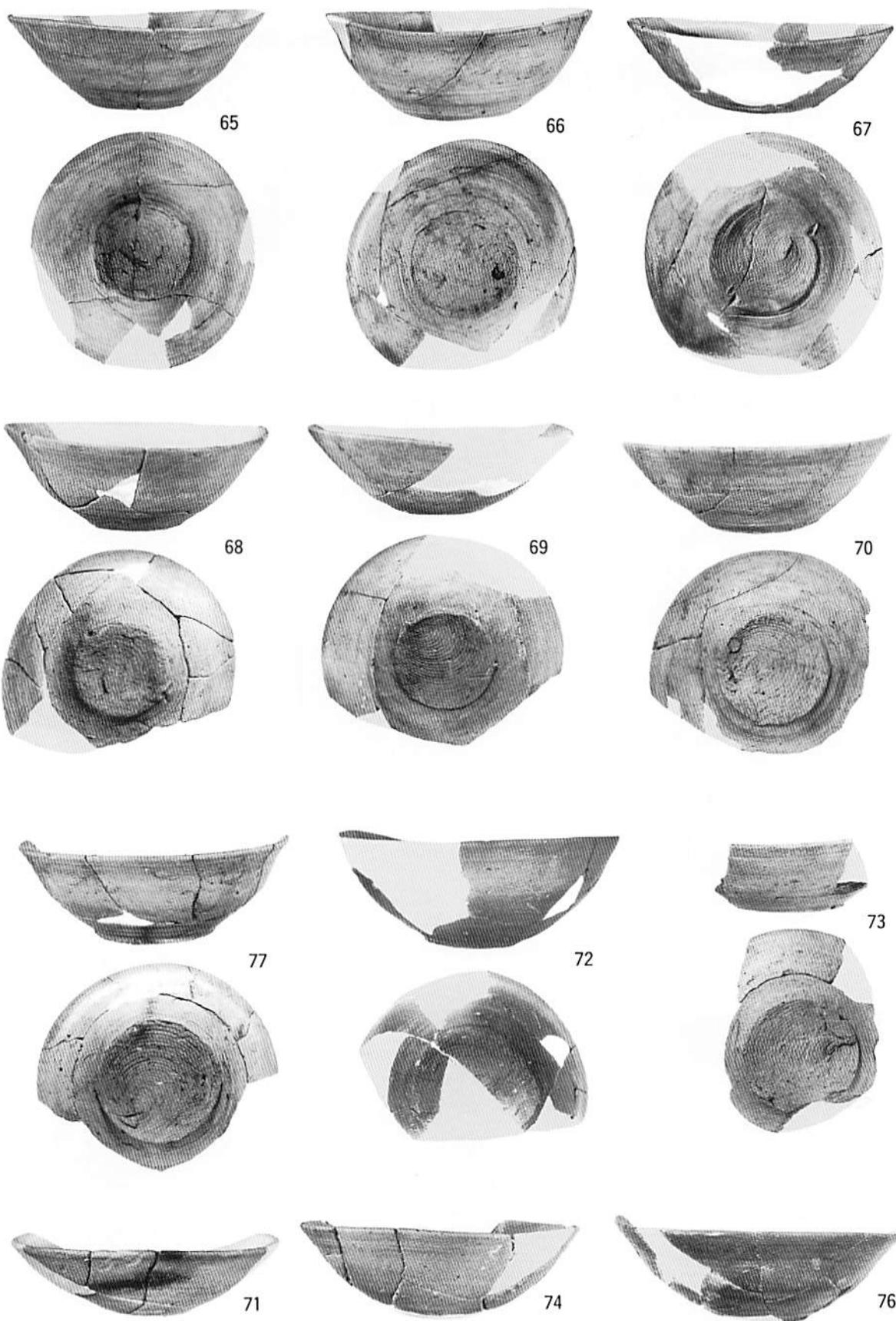
写真図版27 遺構内出土遺物 (6)



写真図版28 遺構内出土遺物（7）



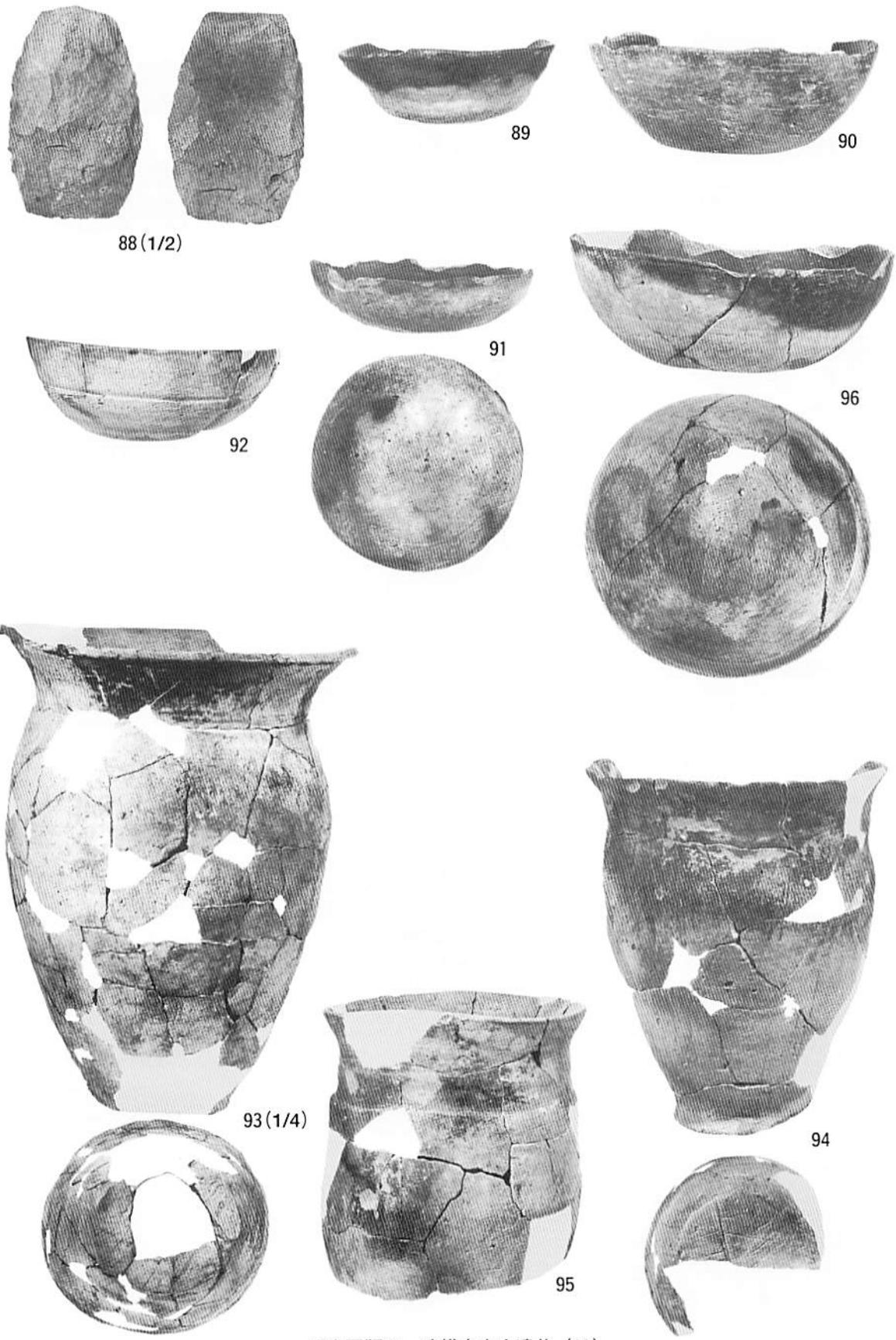
写真図版29 遺構内出土遺物（8）



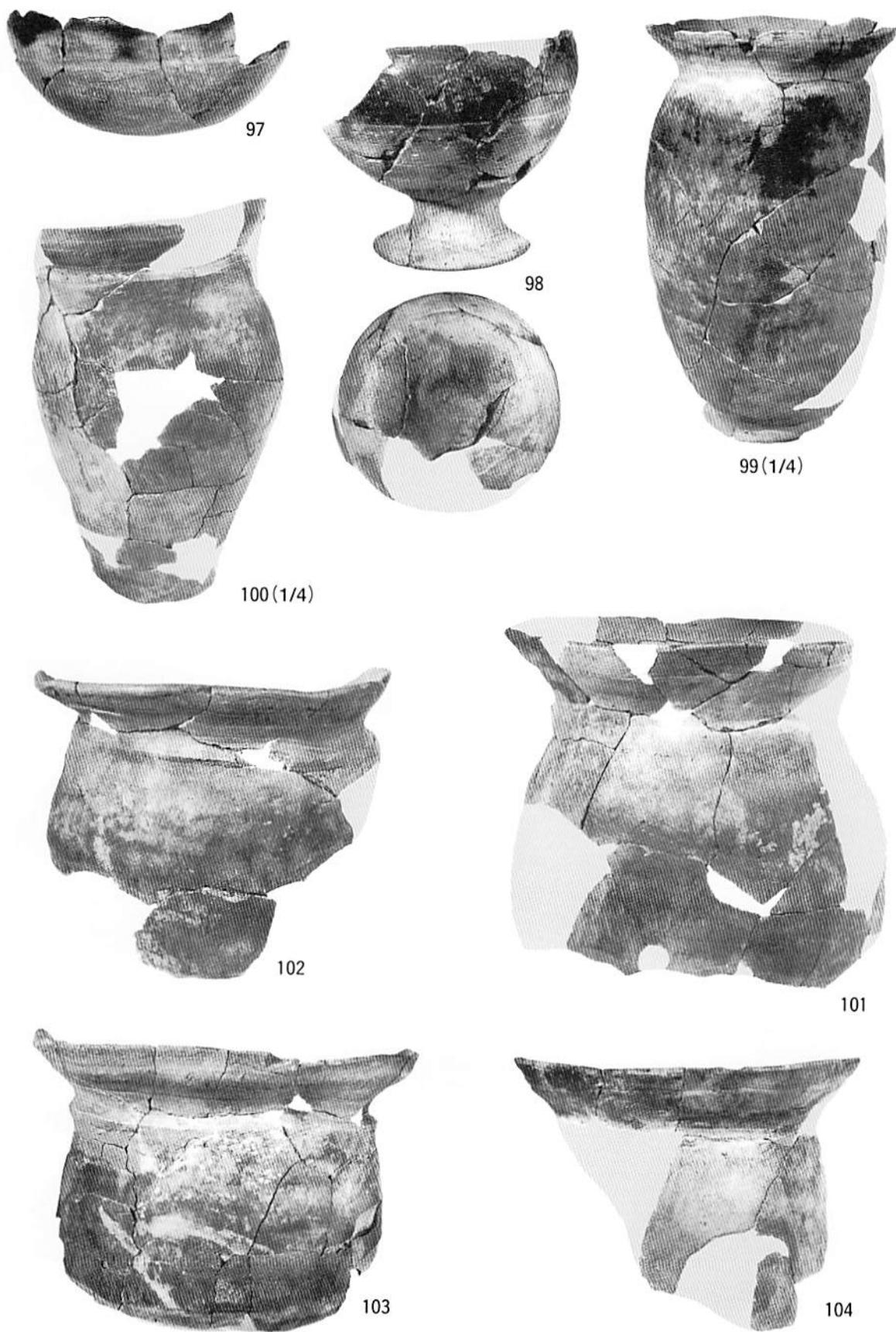
写真図版30 遺構内出土遺物（9）



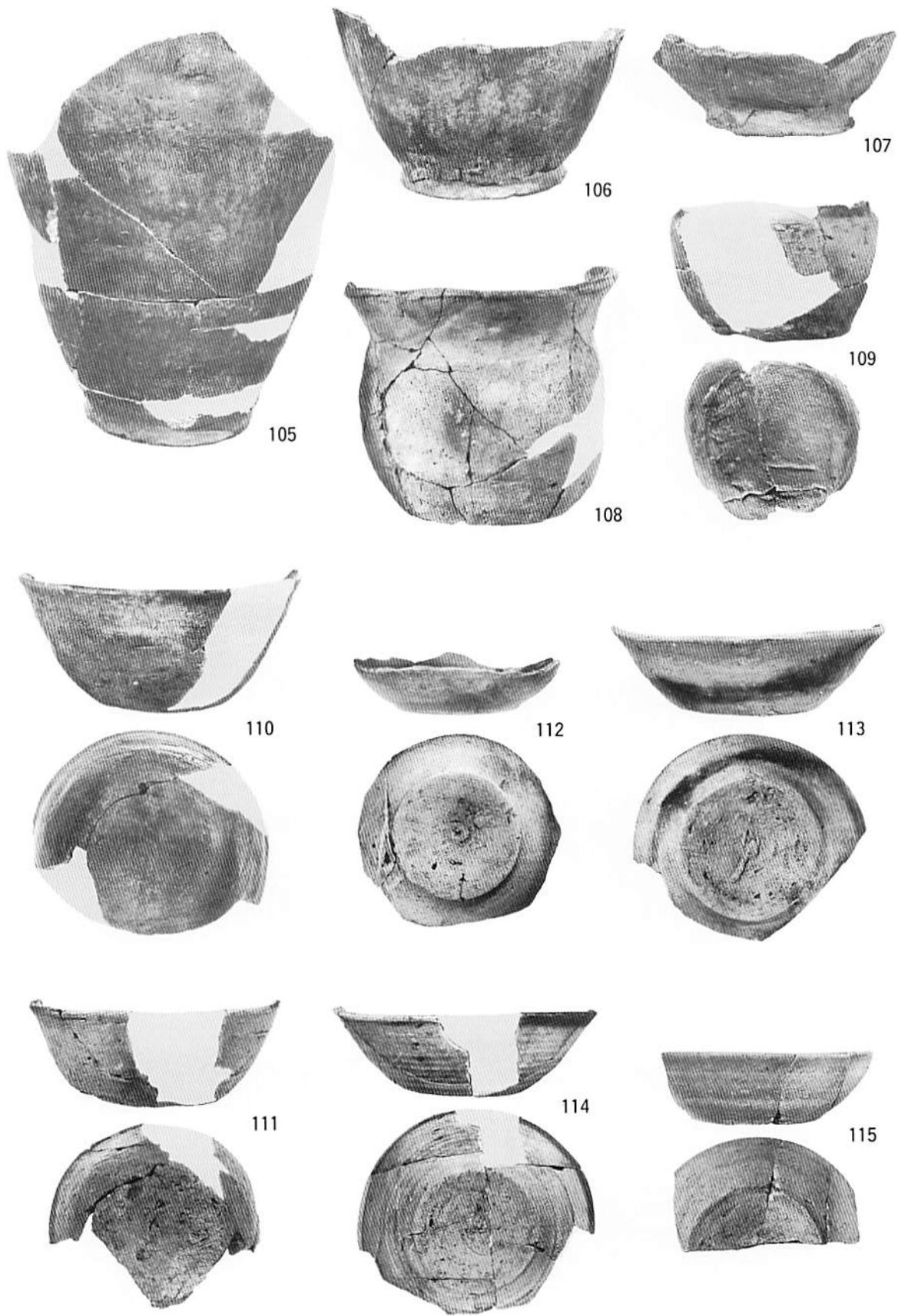
写真図版31 遺構内出土遺物 (10)



写真図版32 遺構内出土遺物 (11)



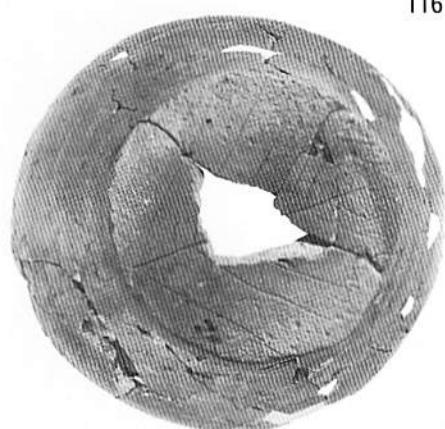
写真図版33 遺構内出土遺物 (12)



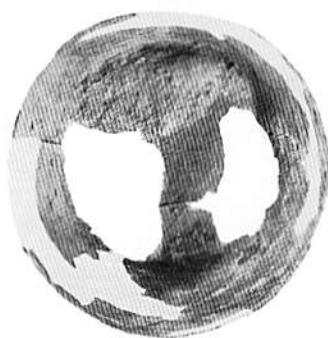
写真図版34 遺構内出土遺物 (13)



117



116



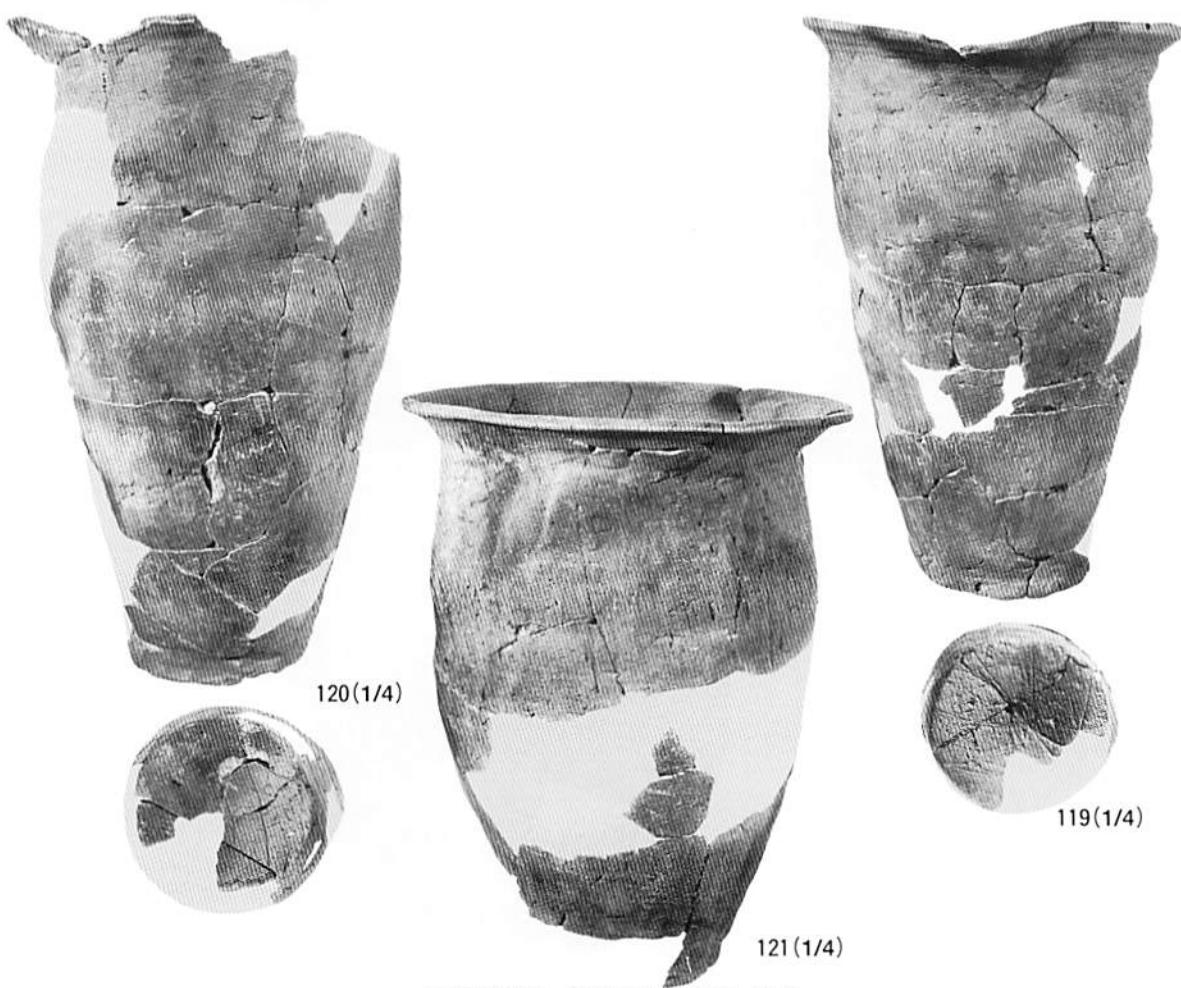
122 (1/4)

写真図版35 遺構内出土遺物 (14)



118

123

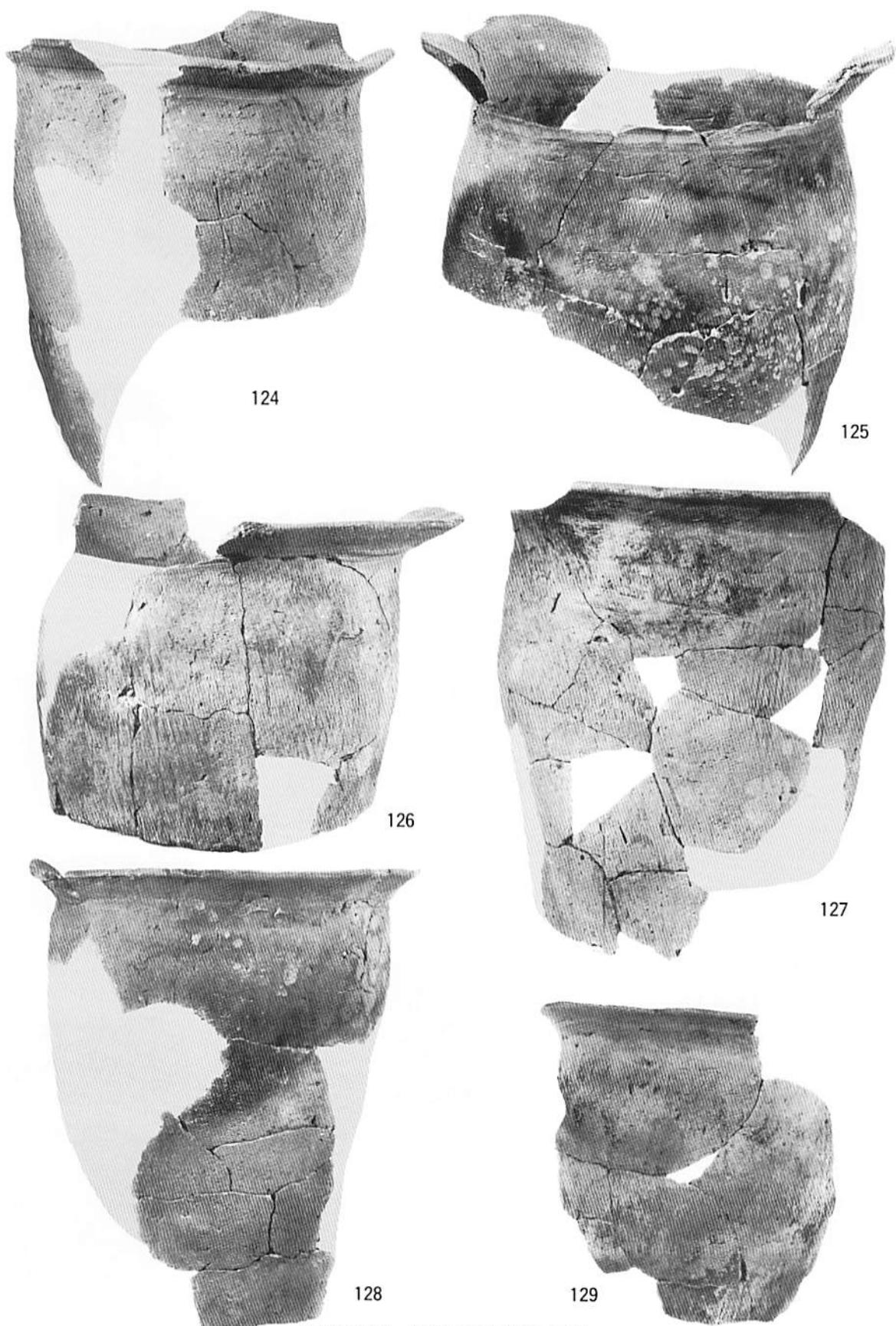


120(1/4)

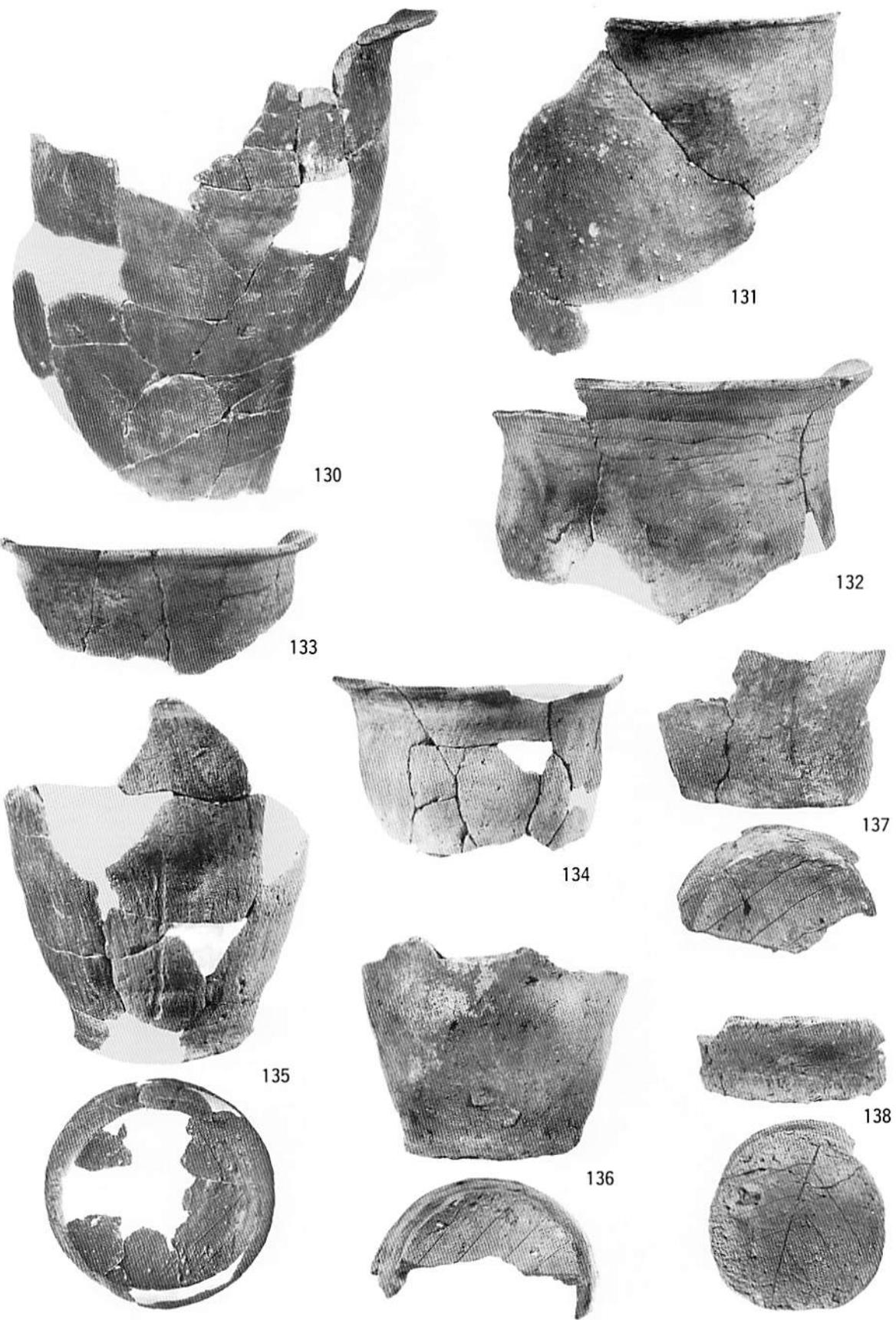
119(1/4)

121(1/4)

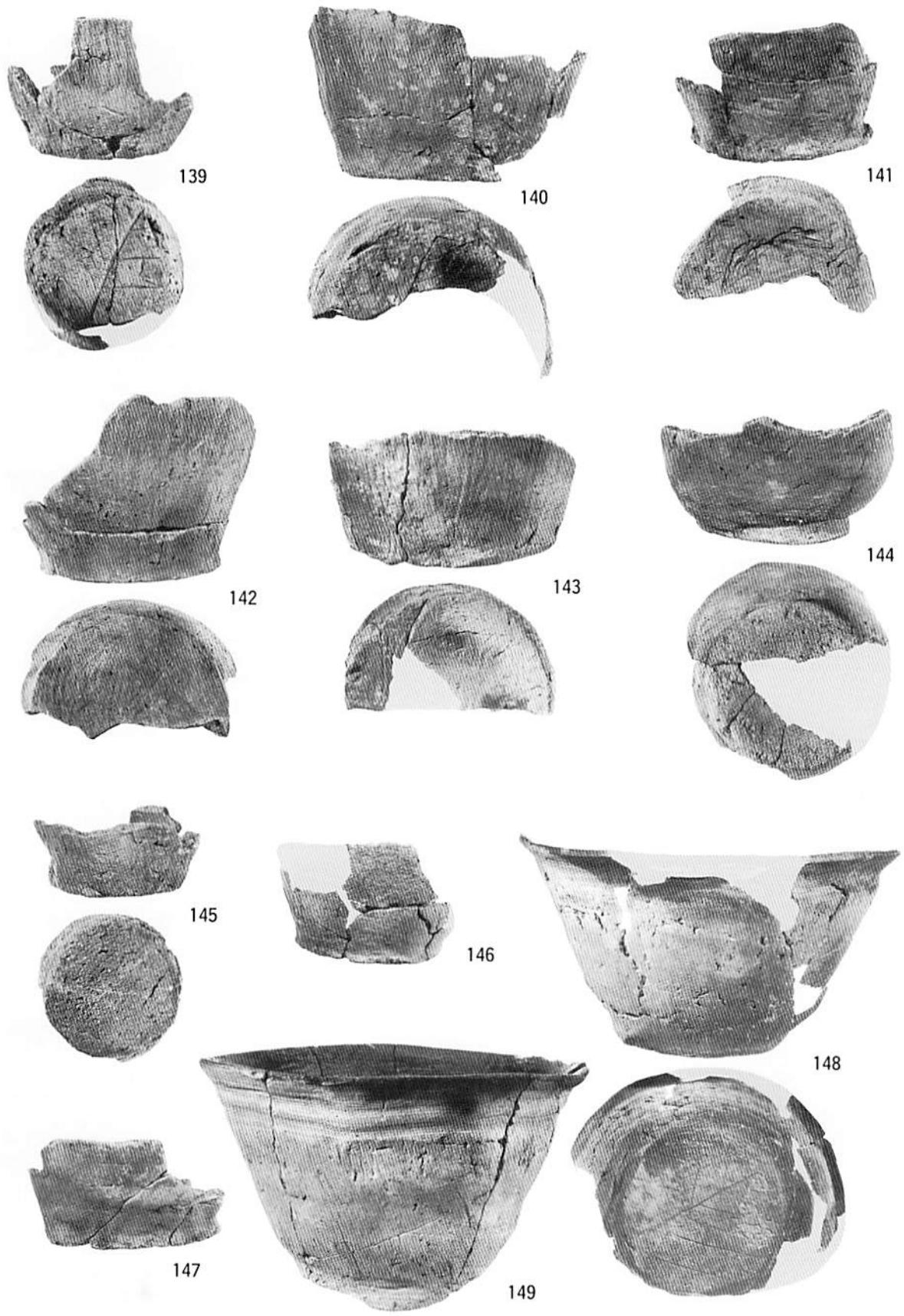
写真図版36 遺構内出土遺物 (15)



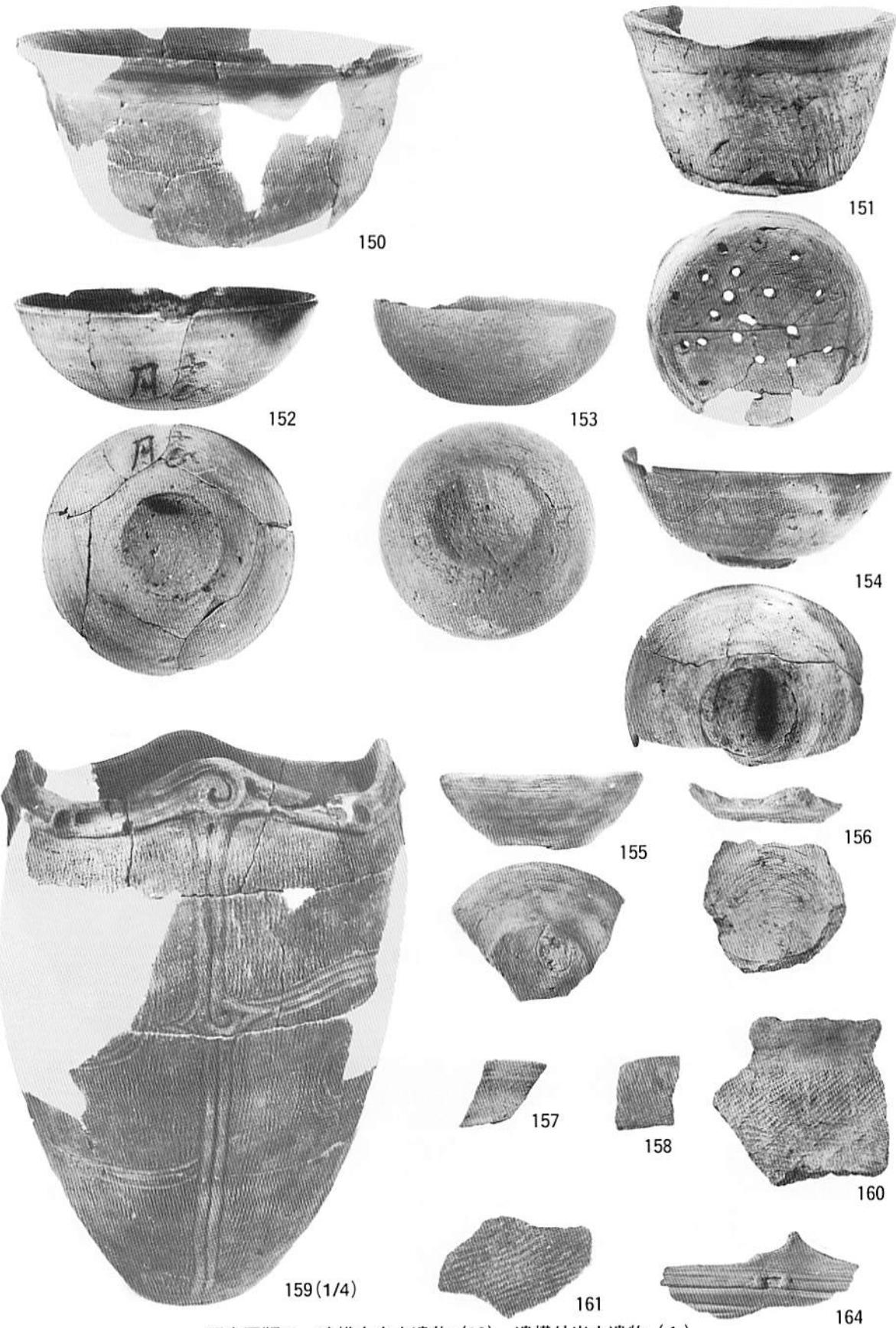
写真図版37 遺構内出土遺物 (16)



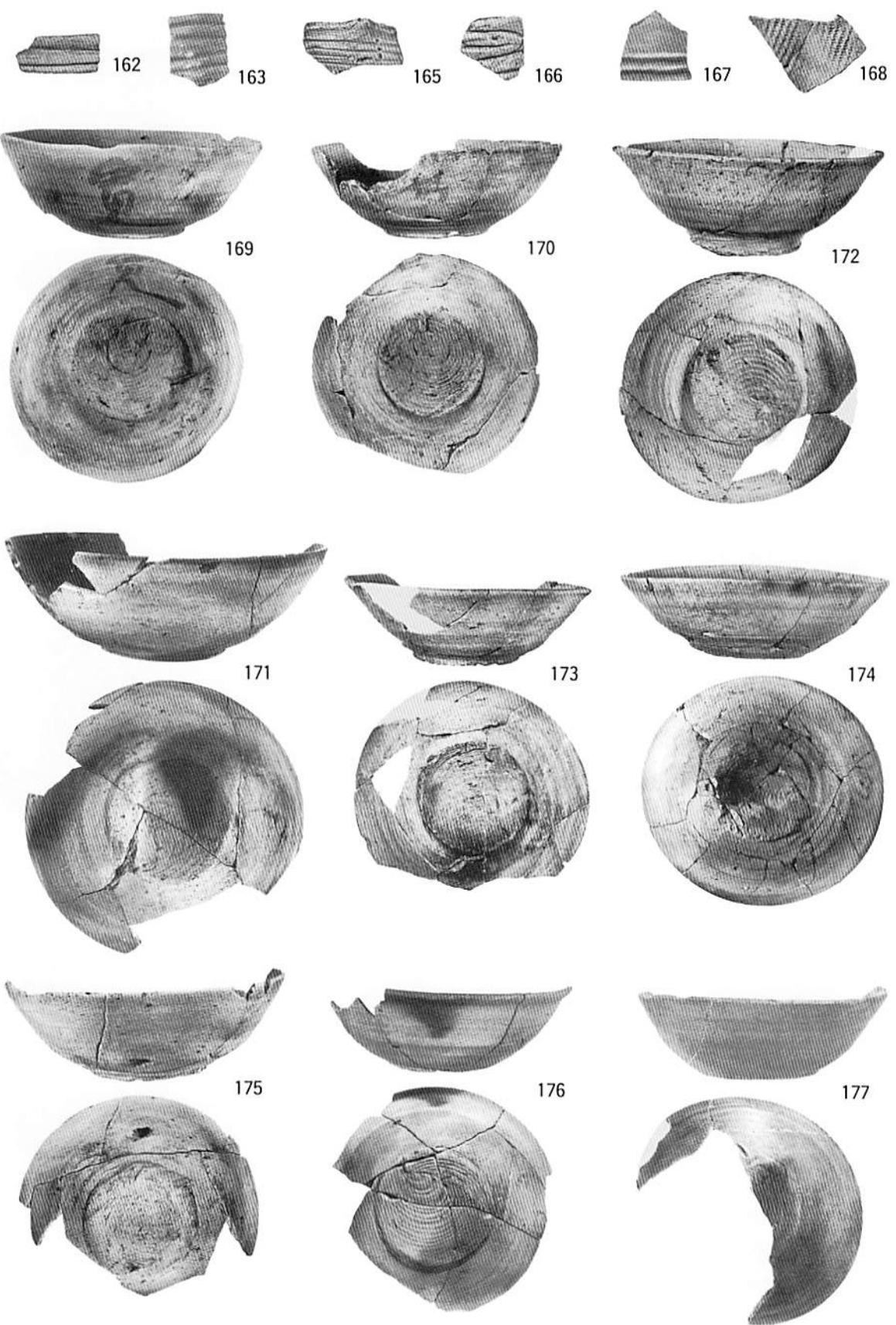
写真図版38 遺構内出土遺物 (17)



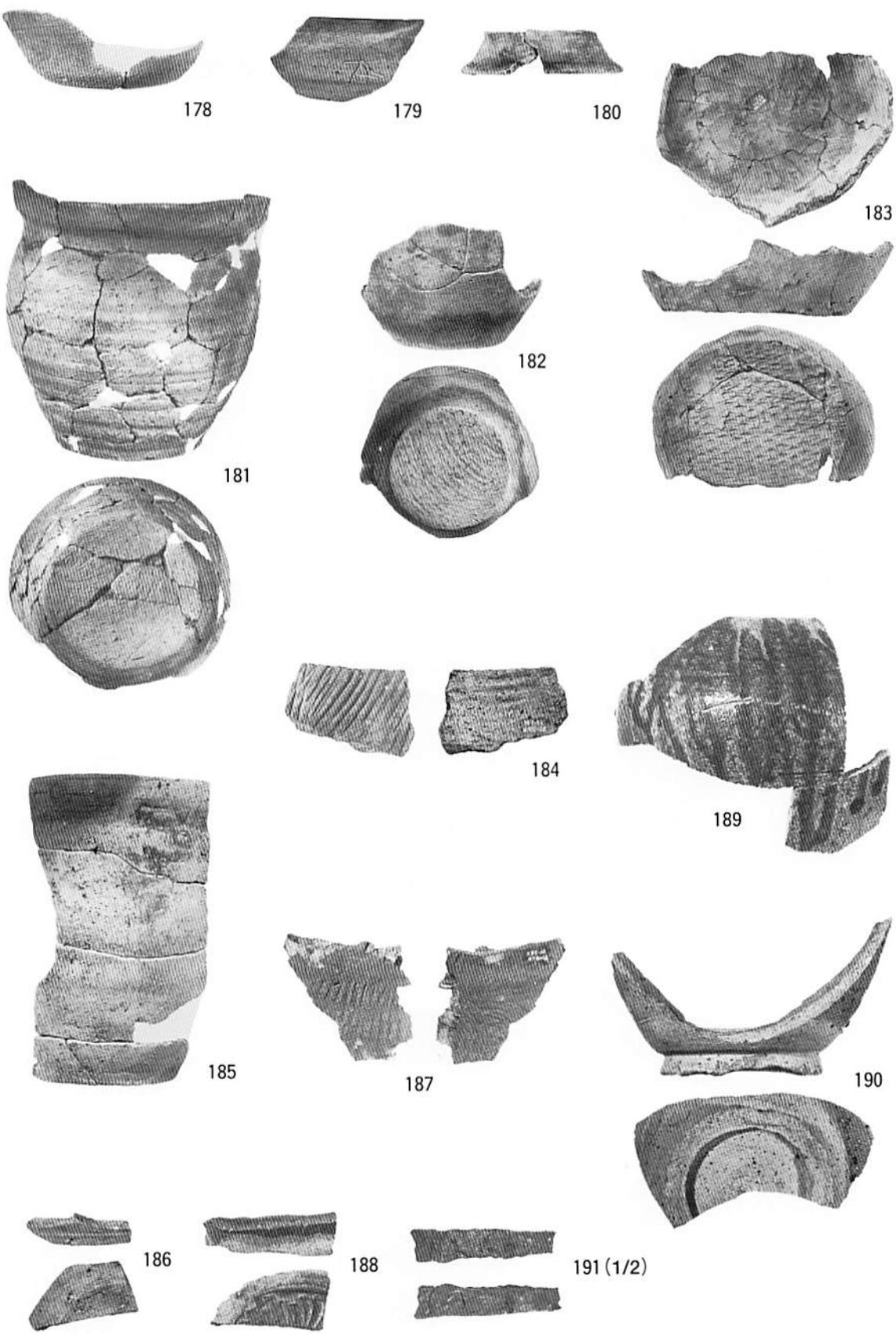
写真図版39 遺構内出土遺物 (18)



写真図版40 遺構内出土遺物 (19)、遺構外出土遺物 (1)



写真図版41 遺構外出土遺物（2）



写真図版42 遺構外出土遺物（3）

## 報告書抄録

ふりがな	かいのふちいちゃいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	貝の淵I遺跡発掘調査報告							
副書名	一般国道456号地域活性化支援道路整備事業埋蔵文化財発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第428集							
編著者名	佐々木信一							
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001・9002							
発行年月日	西暦2003年11月28日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かいのふちいちゃいせき 貝の淵I遺跡	いわてけんひえねきぐん 岩手県稗貫郡 いしどりやまとう 石鳥谷町 せきどりやまとう 関口31-2ほか	03342	ME 07 - 0167	39度 27分 30.235秒	141度 10分 16.355秒	20020408～ 20020618	3,020m <sup>2</sup>	地域活性化 支援道路整 備事業に係 わる緊急發 掘調査
世界測地系								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
貝の淵I遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代 不明	陥し穴状遺構 3基 竪穴住居跡 13棟 住居状遺構 1棟 溝 跡 3条	縄文土器 弥生土器 土師器・須恵器 土製品 鉄製品(刀子) 石器 陶器(灰釉)	平安時代の竪穴住居跡 から墨書き器・刻書き器・耳皿が、遺構外から灰釉陶器が出土。			

平成15年度 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長	木村 昇	副所長	平野 充苗
〔管理課〕			
課長	並沢 正吾	嘱託	高橋 照雄
課長補佐	山岸直美	〃	湯澤邦子
主査	中嶋賢一	〃	沼田テル子
主事	猿橋幸子	〃	伊藤滋子
〔調査第一課〕			
課長	佐々木 勝文	文化財調査員	北村 忠勝
課長補佐	佐々木 清彦	〃	八丸 浩
文化財専門員	金子 昭彦	〃	北島原弘
文化財調査員	吉田 充	〃	島坂忠志
〃	亀大郎	期限付調査員	小島卓
〃	野中真也	〃	小林弘
〃	新妻伸也	〃	大輔
〃	阿部勝則	〃	志彦
〃	杉沢昭太郎	〃	太田代一
〃	西澤正晴	〃	新井田えり子
〃	木村敬	〃	
〔調査第二課〕			
課長	三浦謙一	文化財調査員	星雅之
課長補佐	川重紀介	〃	佐藤淳一
〃	高橋義透	〃	星幸浩
文化財専門員	小山内一	〃	溜本二郎
〃	金子佐知子	〃	多山準
〃	濱田宏	〃	丸福直
文化財調査員	赤石登	〃	米田正
〃	阿部澄	〃	須中和
〃	水部博	〃	原村拓
〃	阿部憲	〃	中川絵
〃	早坂淳	〃	又上淳
〃	小松也	〃	(村)
〃	阿部幸	期限付調査員	麻紀子
〃	窓岩行	〃	斎藤高
〃	龟澤盛	〃	石吉里
〃	飯坂重	〃	立花和
〃	鈴木裕	〃	江藤裕
〃	林孝	〃	駒木野智
〃	阿部明	〃	駒木野智
〃	羽柴直人	〃	駒木野智

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第428集

## 貝の淵 I 遺跡発掘調査報告書

一般国道456号地域活性化支援道路整備事業埋蔵文化財発掘調査

印刷 平成15年11月21日

発行 平成15年11月28日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

電話 (019) 638-9001・9002

FAX (019) 638-8563

印刷 株式会社 長内印刷

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ三丁目3-28

電話 (019) 643-5343

